会　報　第33号

平成8.9.10.11.12年度（1996.4～2000.3）

日本大学山岳部

桜門山岳会

会報 第33号

目次

平成　８年度　日大山岳部活動報告 …… 宇田川勲 …2
(1996.4～1997.3)　桜門山岳会活動報告 …… 山本晃弘 …11
平成　９年度　日大山岳部活動報告 …… 村田慎也 …15
(1997.4～1998.3)　桜門山岳会活動報告 …… 山本晃弘 …28
平成１０年度　日大山岳部活動報告 …… 本多直也 …31
(1998.4～1999.3)　桜門山岳会活動報告 …… 山本晃弘 …46
平成１１年度　日大山岳部活動報告 …… 深沢智徳 …49
(1999.4～2000.3)　（メラピーク合宿を含む）
桜門山岳会活動報告 …… 尾上　昇 …66
平成１２年度　日大山岳部活動報告 …… 石川重樹 …69
(2000.4～2001.3)　桜門山岳会活動報告 …… 尾上　昇 …76

“声” ……平成10年度全部員 …78
寄稿 ……86
「出会い」…… 千谷雅子 …87
「初登頂！リャンカン・カンリ」 中村　進 …88
「カンチェンジュンガ北面」…… 山本茂久 …90
「韓国クライミングツアー」…… 鈴木快美 …91
追悼 ……95
樋山君を偲ぶ …… 原田　洋 …96
伸司へ …… 宇田川勲 …97
土肥信義先輩をしのぶ …… 今村文彦 …98
千谷壮之助先輩を偲んで …… 松田雄一 …99
沼尻正隆先生 …… 高緑繁伸 …100
石井達男君を偲ぶ …… 山本晃弘 …101
根津皖一君との思い出 …… 高橋正彦 …103
野田福五郎君を偲んで …… 星野辰雄 …105
中山昌之先輩の思い出 …… 宗方慎二 …107
だけわらさん …… 石坂昭二郎…109
鈴木克巳さんを偲んで …… 鞍田昌彦 …110
編集後記 ……113

日本大学山岳部

平成８年度　（1996年４月～1997年３月）

部　長　　平山　善吉
監　督　　嵯峨野　宏
コーチ　　石川　一郎
主　将　　宇田川　勲

部　員　　４年　CL 宇田川勲
　　SL 早川隆志　金子裕幸
　　３年　村田慎也　千葉敦雄
　　木村克久
　　２年　本多直也　松本達彦
　　１年　深沢智徳

部　室　　〒156-0056
　　東京都世田谷区八幡山 2-10-12

平成８年度活動報告

チーフリーダー　宇田川 勲

今年度のリーダー会は、春山合宿にて斎藤伸司君を失うという遭っては成らない事故からのスタートとなってしまった。この事故から我々は、今年度の目標として「安全登山」を掲げた。ただ安全登山というと、漠然としているが、春山合宿から浮き上がってきた反省をもとに一年間という期間のなかでどの様な活動を行い、技術を学び、そして教えることによって安全は支えられていくのか再度考え直して行くことにした。詳しい内容は報告書に譲るとして此処では一年間の流れを話して行きたいと思います。

４月は新入生を迎えるに当って、我々は事故の反省も完全に出来ていない、今後の活動内容も定かでは無いと言う状態で果たして新入生を迎えて上手く行くのか、と言う問題にぶちあたっていた。部会、ＯＢともこの問題について話し合った。その中では「歯抜けの状態は好ましく無い」「人材をきちんと育てて行くべきだ」と言う意見が多数を占めた。今になって思うと前者の意見が正しかった様に思うが私自身はこの頃、焦っていたと言うが事故処理、年間活動を考えることで本当に手一杯であり「新入生など、荷物になるだけだ」としか思っていなかった。然し、部会での話し合い、ＯＢの助言から一応新人勧誘を行う事にした。その内容は、ここ最近の様に何でもかんでも引っ張り込む様な強引なものでは無く、勧誘して来た者には新入生説明会を行い、現在の部活動の状態、年間活動を説明し納得した上で入部して貰う事にした。だが、この説明会は事故の事を全面に出した為に結局の所、新入生を脅かすだけの説明会になってしまった。それでも二人入部してくれました。

５月は例年通りの５月山行は行わず、年間活動の話し合いを主にする事となった。又、部内だけの考えに囚われない為、学生部、文部省などの講習会に参加して行った。

６月には年間活動も大まかにだが決まって来ました。内容としては事故の反省の実施、講習会で得て来た新しい技術の検討などを今まで通り初夏、夏、富士山、そして最終目標である冬山合宿を白山で行う事とし、完成させて行くと言うものでした。初夏合宿では記

録を見て貰えば判ると思いますが、意気込んで行った割には思い通りの結果が出せず「やはり自分には駄目なのか」「どうすれば・・・」と言う気持に包まれ、可也落ち込みました。

然し、夏は今までの苦労が報われたのか、私がリーダーと成ってから初めて合宿らしい合宿を迎える事が出来ました。合宿での行動、個人山行事体は特別素晴らしいものでは有りませんでしたがこの頃から事故の反省が形に成り出し、皆の山に対する気持も前向きになり始めた様に思います。この勢いで秋山、富士山共無事行う事が出来ました。そして、普段の部活動でも冬山を目差し夫々の部員が頑張ってくれました。中でも河口湖マラソン全員完走（全員４時間４０分以内）、４０キロ以上の石を詰めての大倉尾根のボッカ訓練など無駄とも思える様な事を文句も言わず良く矢ってくれました。冬山合宿は豪雪地帯と言われる白山に気合を入れて出発したのですが予想外の貧雪で肩透かしを食らった感じで、あっという間に終わってしまいました。

冬山合宿後、リーダーを交代した直ぐの２月山行では最上級のミスに因る敗退と結果に終わり「この一年間と言うものは何だったのか」と、嘆きましたが、次の春山では長期に及ぶ山行を無事成功させる事が出来ホッとしました。

私たちはこの一年間、安全登山と言う難題に取り組んできました。今、この一年間を振り返り思うのは、登山経験の少ない人間がリーダーを取り、そして未経験の者を山に連れて行くと言う環境にある大学山岳部において如何に無事故で安全に山行を行うかと言う事について考える上では私はマニュアルに頼り過ぎていた感が有ります。山行での計画、合宿の一日の流れ、年間計画・活動、部での活動など登山経験の薄い私たちには考えられるだけの事柄を全てマニュアル化してその通りに行動して行けば良いと。然し、少々時を置いた今考えて見ると、日本大学にだけ限って見ればこの６０年間事故は起こって無く、その頃の人々マニュアルなんかには頼っているのでは無く、自らの発想で山に行き、そして山を楽しんでいた様に感じます。逆に事故が起こるのは、私は山というものに真剣に取り組まず、自分の考え無しに駄々マニュアル的山行を作り、行っていたに過ぎなかったのです。マニュアルがいけないと言う事ではなく初めにも述べた様に経験少ない我々には少なからずもマニュアルは必要だし、経験豊なOB の助言も必要だと感じました。然し、一番肝心なのは山に行く部員の心であると思います。山に対しての真剣な取り組み、又情熱無くして安全な計画、山行は生まれて来ないと思います。私達は事故後、事故が起こってから気づいたのでは遅かったのですが、真剣に取り組み、少ない頭で色々考え、そして実践して来ました。その結果が事故後の一年間大した事は出来ませんでしたが無事行えた一番の理由だと思います。

最後に成りましたが、監督を初めとするコーチ及び諸先輩に深く感謝致します。又今年度の年間目標に掲げた「安全登山」については此れからもOBとして現役部員と共に取り組んで行きたいと思います。

平成８年度コーチ会報告

ヘッドコーチ　石川 一郎

平成８年度の活動は、前年度末の中央アルプス・空木岳での事故の教訓を如何に活かし、且つ萎縮せずに安全登山を実行していくかが

大きな課題となりました。其の為の留意点とした、前年度総会の冊子に私見として幾つかの目標を掲げましたが、ここではそれが実行出来たかどうかを考えてみたいと思います。

1．「事故（今回の事故に限らず）の討議会を開いていく」について。

討議会という形として開くことは出来ませんでしたが、各合宿、山行の計画、検討段階において、この事故の問題点は常に話し合われ、活かしていくことが出来たと思います。現在の部員が残っている間は、この事故の件は何らかの形で意識されていくだろうと思いますが、今後の課題として、今回の事故を直接には知らない者が部員となっていった時にどの様にしていくかに有ると思います。新入部員にはともかく上級生、或るいはリーダーとして山行を行う部員には何等かの方法で伝えて行かなければ成らないと思います。其の為の資料となる報告書が是非とも必要となりますが、現在の所まだ出来ておりません。これは部員諸君に問題が有る分けではなく、私の怠慢によるもので、早急に善処したいと考えます。

2．「事故を最小限とする為新知識、技術の習得、体力アップを図る」について。

文登研、都岳連、救急法等の講習会を積極的に受講し、また目的を持ったトレーニング（河口湖フルマラソン全員完走）等かなりの成果を上げました。今後とも続けて行きたいものです。

3．「計画に対する十分な討議、検討が行えるようにする」について。

完全は有り得ないかもしれませんが、実行出来たのではないかと思います。特に冬山合宿における検討では考え得る最悪の場合を想定し計画出来たと思います。実際の行動では天候と積雪の少なさに恵まれ、呆気なく終了しましたが、もし天候等、条件が悪くて成功したのではないかと思います。仮に失敗したとしても決して悔いを残す事は無かったでしょう。

4．「コーチの部会、合宿への参加を増やしコミュニケーションを図る」について。

私個人としては、仕事の忙しさにまかせて殆ど実行出来なかったと言って良いでしょう。しかし他のコーチングスタッフが出来る限り参加してくれ、まだまだ十分ではなかったかも知れませんが一応の成果は有ったと考えています。

5．「活動が萎縮してしまわない様にする」について。

本年度の部員が結果的に一名だった事を思うと決して活発な活動だったとは言えないかもしれません。然し乍、活動の内容としてある程度の事はしていたと思います。

総合評価としては、全ての事に拘わる正式な報告書も出来ておらず（繰り返しますが、これは、私の責とする所です）、百点を満点とすればその半分にも達していない事でしょう。百点に近づける為には、まず報告書を完成させ年度毎に入れ替わっていく部員にこの教訓を風化させずに伝えていく事だと思っております。

最後に、仲間を失い最も辛かったであろう宇田川チーフ・リーダーを始め現役諸君の検討を讃えると共に今後の活躍を大いに期待したいと思います。

記　録

■5月山行

本年度の5月山行は、主に事故の反省、今後の部活動についての話し合いに費やしたため山行自体は日帰りの沢、岩などといったものしか行くことが出来なかった。

1．文部省登山研究会

期　　日　5月14日～20日
メンバー　L宇田川、千葉

全国の？大学山岳部、ワンゲルの部員が集まり立山にある文部省の施設で雪山における講習を受け、剣沢にて実践訓練を行なった。内容としては普段合宿で行なわれているものが主だったが、その指導法など勉強になることも多少は？あった。

2．その他の日帰り山行

場　　所　逆川　水無川　海川
　　エズリハ窪
期　　日　5月4日～6日
メンバー　部員全員

■初夏合宿

穂高連峰・横尾定着

期　　日　6月13日～20日
メンバー　L宇田川　早川　金子　村田
　　千葉　木村　本多　松本　深沢
　　山口
　　OB岡田　向笠　大谷　石川
　　山本　家口　斉藤　鈴木

6月13日　晴れ　上高地→横尾ＢＣ
予定通りケルンを参拝しＢＣに入る。その後、偵察及び搬出の訓練（ツェルト、ロープを使ったもの）を行なう。

6月14日　曇り　雪渓訓練
1年生は昨日の疲れからか、ペースが上がらず予定より1時間も到着が遅れる。

6月15日　晴れのち雨　涸沢往復
涸沢に着く頃にはどしゃ降りになり、下山することにする。

6月16日　曇り　雪渓訓練
上級生はＯＢにロープワークの確認をしてもらう。また、ＦＩＸ工作、雪上での支点の取り方（スノーバー、バイル、デッドマン）を行なう。

6月17日　曇りのち雨　分散登攀
①　蝶ヶ岳　②常念岳
小雨がぱらついているために、予定を変更して分散登攀を行なう。1年生の山口は今日で2日目のテントキーパー。

6月18日　雨　雪渓訓練、白出のコル往復
雨が小降りになるのを待って出発する。山口は雪渓訓練。今日は深沢がテントキーパー。

6月19日　雨　分散登攀
どしゃ降りだったが、山口のたっての希望により、宇田川、山口2人で蝶ヶ岳に向かう。

6月20日　晴れ　下山
晴れた。なんと入下山だけ見事に晴れてくれました。後半分散隊とＢＣで別れ上高地へ。

≪後半分散合宿≫

1. 北穂高岳～槍ヶ岳～上高地
期　　日　6月20日～22日
メンバー　L千葉、木村、本多、松本

■夏山合宿

北アルプス内蔵之助定着

期　　日　7月27日～8月8日

メンバー　L宇田川　早川　金子　千葉
　　木村　本多　松本　深沢

≪前半分散合宿≫

1．　薬師隊

期　　日　7月27日～30日

メンバー　L宇田川　木村　松本　深沢

初日は松本が新しい帽子を無くし泣いていた。2日目は松本がばてていた。3日目は松本がばて、深沢がザック麻痺。4日目は夕立に会いびしょ濡れ。散々でした。

2. 歩荷隊

期　　日　7月29日～30日

メンバー　L早川　金子　本多

心配されていた、ゴルジュの状態はまあまあといったところだ。本田も良く頑張りＦＩＸを張り終え、初めての山荘泊まりに感動しながらゆっくり休養する。

≪定着合宿≫

7月31日　晴れ　ＢＣ整理、岩場偵察

ＢＣは、雪が少なく草刈が大変だった。

東面はゴルジュと一緒で雪が少なくシュルンドが多い以外は別段問題は無い。しかし、ＢＣは良いところだ。

8月1日　晴れ　雪渓訓練

深沢の調子が悪く歩行訓練のみにし、上級生の訓練を主とする。

8月2日　晴れ　分散登攀

①丸山尾根　L．宇田川　木村　松本

②主稜　L．早川　金子　本多

丸山尾根はガレた尾根といったところで登攀要素は少ない。登攀後松本のロープワークをし下山。主稜は問題無し。深沢は調子が良くないので停滞。

8月3日　晴れ　分散登攀

①主稜　L．宇田川　木村　松本

②枝稜右　L．早川　金子　本多

この日、村田、千葉と合流する。彼らは歩荷道を間違えずに上がって来たと思い、みんなに歩荷道の感想を述べていたが、実際は雷鳥沢であった。あまりの馬鹿さ加減に今日は罰当。

8月4日　曇り　雪渓訓練

深沢の調子も良くなったので、残りの訓練を行なった。

8月5月　雨のち曇り　停滞

8時頃からガスが取れ始めたため、昨日失態を晒した村田、千葉には1、2尾根まで偵察してきてもらうことにする。他は停滞。

8月6日　晴れのち曇り　分散登攀

①雄山　L．宇田川　深沢

②二尾根　L．木村　千葉　松本

③一尾根　L．早川　金子　本多

今日は各隊順調であった。一尾根では神社の人に見つかりピークを踏むことは出来なかった。残念。

8月7日　晴れ　分散登攀

①雄山　L．早川　金子　本多

②一尾根　L．宇田川　木村　深沢

③主稜　L．千葉　村田　松本

今日は雄山のピークを踏むことが出来た。こつは岩のグレード的には少々難しくなるが監視所（？）から見えないように、出来るだけ右から回り込むことである。

8月8日　晴れ　下山

後半分散ごとに下山する。今回の合宿は初夏とは違い、天気に恵まれ良かった。

≪後半分散合宿≫

1．　チンネ隊（真砂沢ＢＣ）

期　　日　8月8日～13日

メンバー　L宇田川　村田　千葉　松本

登攀ルート　チンネ：左稜線、中央チムニー、Ⅵ峰Ａフェース：魚津高ルート、中大ルート

登攀初日は、池ノ谷乗越が使えず別ルート

を探していたため、チンネは時間的に間に合わず、Ⅵ峰Aフェースとする。２日目以降は順調にチンネを登攀することが出来た。しかし、真砂沢だとアプローチが大変であった。

２．上ノ廊下隊
期　　日　8月9日～12日
メンバー　L早川　金子　木村　本多
　　深沢

深沢の怪我の様子を見るために一旦大町まで下る。診察の結果、ザック麻痺であったが、それほど悪そうでも無かったため連れて行くことにする。山行自体は、金作谷に架かる２００mにも及ぶスノーブリッジが問題になったくらいで、水量も少なく、岩魚も釣れ、快適な山行であった。

≪夏山個人山行≫

１．　　谷川岳　一ノ倉沢
期　　日　8月17日～20日
メンバー　L宇田川　千葉

夏の一ノ倉に来たのは初めてだが、観光客の多さには驚いた。変形チムニーとダイレクトカンテを登る。途中、誰かさんのヘルメットを落とし、高崎まで買いに行った他は問題無し。

２．北海道（クワウンナイ川～化雲岳、旭岳～トムラウシ岳～十勝岳～富良野岳）
期　　日　8月31日～9月9日
メンバー　L本多　松本　深沢

クワウンナイ川は難しさは無いが、景観の素晴らしさ、特に滝ノ瀬十三丁は素晴らしかった。また、オショロコマも大量に釣れ、ウハウハであった。縦走中は本州では見られないヒグマ、キタキツネと戯れることが出来、北海道を充分感じることのできた山行になった。

３．追良瀬川、葛根田川遡行
期　　日　8月30日～9月5日
メンバー　L木村　村田

下級生の都合が合わず、３年生同士の山行になってしまったが、それぞれリーダーを取り、適度の緊張感とブナの原生林などの自然を満喫できた。しかし、岩魚は一匹も釣れなかった。

３．白山偵察（牛首川赤谷右俣～御舎利山～千振尾根～別所出合、柳谷～別山～白山～大倉尾根）
期　　日　8月31日～9月3日
メンバー　L宇田川　早川　金子　千葉

冬に向けての偵察山行としてこの山域に入ることになった。白山は皆初めてということもありなんだか新鮮な気持ちになれた。赤谷は、資料通りガレガレで再度行く気にはなれないが、柳谷はまあまあ良かった。尾根は馬鹿尾根で、雪が積もると苦しそうである。

３．明星山
期　　日　9月6日～11日
メンバー　L宇田川　千葉

この壁はなんだか谷川に似て、陰気さを感じた。登れたのは、左岩稜、左フェースルートだけであった。あとは毎日雨、蛇にやられていた。雨が止み、太陽が出ると壁はすぐ乾くのだが、なにせ川の増水がひどく取りつきに行くまで一苦労である。キャンプ場には翡翠売り場（翡翠しか売っていない）と、釣堀しか無く、車を持たない自分たちはとても不便であった。

■秋山山行

白山（大倉尾根往復）

期　　日　10月30日～11月2日

メンバー　L宇田川　早川　金子　村田
　　千葉　木村　本多　松本　深沢

まったく雪無し（かけらも）。プラグツ、ワカン、赤旗、アイゼン、スコップ？。尾根上には出来るだけ高い樹木に赤布を付けながら、また危険箇所の確認なども行ないながら進む。偵察という意味では、目標を達成出来たが、雪が無いと気分が...。

■富士山合宿

期　　日　11月17日～22日

メンバー　L宇田川　早川　金子　村田
　　千葉　木村　本多　松本　深沢
　　OB野本　斉藤（大）　芹沢
　　鈴木（快）

11月17日　晴れ／曇り　入山・偵察

例年通り重荷レース。今年のチャンピオンは松本達彦。佐藤小屋で斉藤、芹沢、鈴木OB（OG）に会い、雪の状態を聞く。偵察も入れてみたが、ツバクロ沢では氷雪訓練は出来そうもないので8合目付近の大沢で行なうことにする。

11月18日　雨／晴れ

10：00頃に降っていた雨も止み、2パーティーに分けて時間の許す限りダッシュする事にする。

11月19日　晴れ／曇　氷雪訓練

太子館真横付近の大沢で行なった。雪質も良く、ジッヘルも充分訓練出来た。

11月20日　晴れ／雪　氷雪訓練

深沢のロープワークがいまいちであったが、他は問題無くこなした。

11月21日　晴れ／曇　登頂

登頂日和の素晴らしい天気である。訓練の意味も兼ねて、9号5尺付近で1ピッチ、下りで3ピッチフィックスする。

11月22日　晴れ　下山

不覚にもケルンを見つけることが出来なかった。（恐らく1本手前の沢に入ってしまった。）明後日のマラソンのことを考えると不安で堪らない。

■冬山合宿

白山（大倉尾根往復）

期　　日　12月21日～25日

メンバー　L宇田川　早川　金子　村田
　　千葉　木村　本多　松本　深沢

12月21日　曇／雪　平瀬～大白川CS

豪雪地帯？合掌作り？。雪が無いです。本来ならば平瀬で1泊の予定だったが、雪が無いので大白川まで行ってしまった。（3日の行程）

12月22日　晴れ／雪　CS～大倉避難小屋CS

頭上ラッセル？空荷ラッセル？。ほとんど膝から腰程度のラッセルでありました。そして、埋まっているはずの小屋もありました。

12月23日　雪　停滞

やっと冬らしい吹雪がやってきました。日本海低気圧です。2～3日は荒れるかも。

12月24日　晴れ　CS～白山大汝峰～大白川CS

な、なんとドッピーカン。おっかしいな。往復してしまいました。

12月25日　雪／曇　下山

秋山？。気合を入れていただけに、全くの拍子抜けです。この山行で印象に残っていたのは平瀬の食堂で見た、Gメン‘75だけだった。

■個人山行

・奥多摩　川苔谷　逆川
5月1日　L木村　本多　宇田川
　　OB 野本
・丹沢　水無川本谷
5月5日　L本多　千葉　木村
・奥多摩　海沢
5月１９日　L木村　金子　松本　深沢
・奥多摩　ユズリハ窪
5月２５日　L本多　松本
・奥秩父　丹波川本流
7月１４日　L本多　村田　千葉　深沢
　　OB 篠崎
・北岳バットレス　ピラミッドフェース
9月１７日～１８日　L宇田川　木村
・奥秩父　金山沢
9月２９日　L松本　本多　深沢　OB 大谷
・後立山　双子尾根（猿倉～白馬岳）
１０月5日～１２日　L千葉　木村

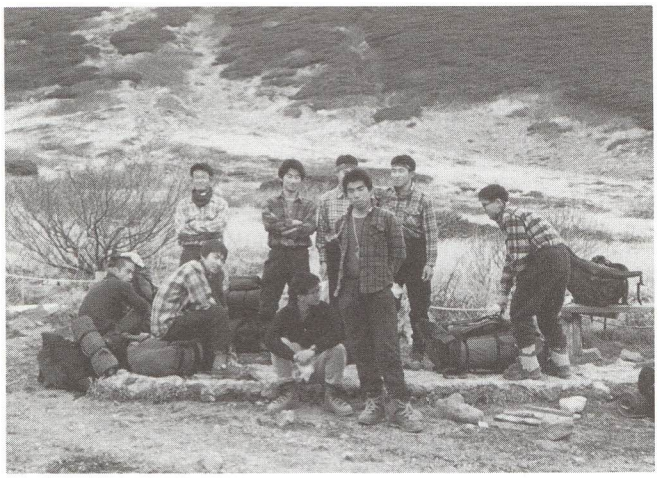
■岩登りトレーニング
三つ峠　１回　日和田山　８回　氷川屏風　１回　越沢バットレス　7回　人工壁　１０回

■ボッカトレーニング
大倉尾根　５回

■追悼、ケルン設置及び遺品回収
中央アルプス東川本谷（遺品回収）
８月２４日～２５日　L斉藤（大）　芹沢
　　宇田川　千葉　木村
　　本多
中央アルプス　極楽平付近（ケルン設置場所の確認）
平成９年4月２９日　L高緑　家口　西尾
　　宇田川
中央アルプス　極楽平付近（ケルン設置）
平成９年 10 月 1 日　L野本　芹沢　宇田川
　　早川　芹沢（母）
中央アルプス　極楽平付近（ケルン参拝）
平成９年 10 月 18 日～19 日
　　斉藤（兄）OB22 人　学生 11 人

■講習会
文部省、都岳連、上級・普通救急講習会（消防）、無線免許

■その他
河口湖マラソン　11 月 24 日



秋山合宿、白山偵察（平成８年・1996）

冬山合宿、白山登山（平成８年・1996）

白山山頂（平成８年・1996）

桜門山岳会

平成８年度の回顧

平成８年度理事長　山本　晃弘

昨年の総会に於いて理事長の指名を受けてから、当面の桜門山岳会の課題としては①現役学生の強化、指導　②会運営基盤としての財政健全化　③年齢差の非常に大きくなった会員の親睦、そして会報の発行。これらの事を基本課題として理事会活動をしてまいりました。

①については昨年の遭難事故が影響し、入部者２名、実働１名と山岳部運営上ゆゆしき事態となりました。

部員の絶対数確保は次年度に持ち越すとしても、現役学生の実力向上と特に安全登山に向かって監督、コーチ会諸氏の熱心な指導により、学生もかなり真剣に山行に取り組んでいったようであります。最終的には春の南アルプスで大変しごかれてきたようであり、昨春の遭難事故の検討と反省、冬山参考の内容等､理事長としては若干の不満もありますが、このはるやまが大変充実した山行のようでありましたので次年度上級背のレヴェルアップは一応計られた事と考えます。

新年度は何とか２桁の入部者をと思っていましたが現在３名と言うことであり、部員数の減少傾向には何とか歯止めをかけるべく至急の対応を計らねばなりません。いずれにしても日大山岳部の山登りというよい伝統を時代の変革に流されること無く受け継いでいかれるよう、監督、コーチ陣と理事会との意見交換を密にして学生の自主性を尊重しながらも強い指導をしていきたいと考えます。

②の財政健全化については昨年の総会に於いて承認されました年会費徴収を、その後の理事、評議委員会等を経て最終的に年額５０００円と決定させていただき、９月より会員の皆様にご納入をお願いしました。御陰様で赤字体質から何とか脱皮できるのではと考えますが、納入方法、又終身会費との兼ね合いをも考慮に入れよりよい方法を今後も検討していく考えであります。

③の会員相互の親睦についてでありますが、会員すべての人にとって大切な桜門山岳会の存続と発展の基盤となる会員相互の信頼と理解。このことをどのようにして深めていくか、歴代理事長各位に渉っても重要なテーマであったと思いますが、振り返って本年も「笛吹けど踊らず」というか、魅力的な集会が計画されなかったと言うことか、若いOB諸兄の集会参加が少なかったことは誠に残念でありました。中でも忘年懇親会は中国天山南路の山々の話を中心に大変楽しい会であったのではなかったかと思います。これからは特に比の種の会合、そして山での集会等、若い会員の人たちがイニシャーチブをとって積極的に行っていく必要を感じております。

又、行事予定には入っておりませんでしたが、鈴木先輩を始めとする戦前OBから２，３年前からの御提案でありました合同慰霊祭を４月１９日に鶴見の大本山総持寺に於いて執りましたところ大学当局、御遺族、会友、会員、学生合わせて１５５名の皆さまに御参列戴き物故者の霊を慰めるとともに御遺族、OB,学生の交流の場としても大変に貴重な会合であったと思います。御参列の皆さまより

多くの費用をかけずに大変立派な慰霊祭であったと誉めを戴きました、企画運営すべてに渉って松田全理事長にお任せしてしまいましたこと、紙面を借りて世話人の皆さま又、当日担当係の皆さまと共に厚くお礼申し上げます。

会報の発行については大変遅くなりましたが４月上旬完成中旬発送と言う事で皆様のお手元に届いていることと思いますが村口 OB には会報２６号以来長年に渉って大変ご苦労様でした。又、原田 OB にも最後の発送段階まで応援して戴き有難うございました。

何時までも特定の OB にたよりきりには誠に申し訳ありません。早急に編集担当者を決めて次回の発行の準備に入り度く考えております。これも特に自分たちの現役時代の記録が主となるという関係上卒業したての OB の人たちに責任を持って戴きたいと考えます。

又、年度末卒業式においてエベレスト北東稜隊に参加した学生の田村君が同じく隊員の医学部山岳部原田君と共に総長賞を受賞されました。

多くの体育会学生の中での受賞は、私たちの山岳部にとっても大変喜ばしいことと感じています。今後も学生と OB 一体となっての海外遠征を数多く持ちたいものと考えております。

以上平成８年度を振り返ってみましたが理想には道遠しの感を禁じ得ません。新年度は一部役員構成が変わりますが新役員との連帯を一層深めて会の運営を計って行くつもりであります。年頭の御挨拶でも触れましたがエベレスト後の一休止状態からそろそろ脱して若い OB 諸君の海外登山の再開をも期待致します。同時に日大山岳部、桜門山岳会の更なる発展のためにも若い会員の皆さまの積極的な会運営への参加をお願いする次第であります。

最後になりますが、会員各位の御健勝を祈念いたしますと共に今後ともなお一層、当理事会への御理解、御支援のほどお願いいたしまして今年度の回顧報告を終わらせていただきます。

平成８年度桜門山岳会事業報告

（平成８年４月１日～平成９年３月 31 日）

１．理事会・評議員会

表①参照

２．行事関係

―、年次総会

平成８年５月２１日、アルカディア市ヶ谷に於いて会員６４名、学生１０名が出席して開催され、平成７年度事業報告・収支決算報告・平成８年度事業計画、財政再建案、新役員および新入会員等が承認された。

―、エベレスト登山隊報告書出版記念会開催

平成８年７月９日、アルカディア市ヶ谷に於いて登山報告書、学術報告書の出版及び登頂一周年を記念して登山隊、学術調査隊、報道隊らによる出版記念会が開催された。

―、秋の天幕懇親会

平成８年１０月２６日、箱根奥湯本「須雲山荘」に於いて学生 10 名、OB21 名参加のもと開催された。

―、関西桜門懇親会

平成８年 11 月 23 日、西宮に於いて会員 16 名参加のもと忘年懇親会が開催された。

―、講演と忘年懇親会

平成 8 年 12 月 17 日、日本大学理工学部１号館会議室に於いて川上隆氏（防衛大学エベレスト西稜隊体長）による、シルクロードの高峰についての講演と引き続き忘年懇親会が開催された。主席者 43 名。

一、新春懇親会

平成9年2月4日、新宿ワシントンホテルに於いて会員27名参加のもと行われた。

一、湯沢懇親会

平成9年3月22日～23日、越後湯沢「湯沢山荘」でOB14名、同伴者3名でスキー及び懇親会が開催された。

平成8年度　理事会・評議会

表①

臨時理事会	4月1日	日大理工学部 平山研究室	・山岳部員遭難事故の件 ・70周年記念祝賀会中止の件	理事・監事13名 学生CL1名
理事会	5月7日	日大理工学部 5号館533号室	・平成7年度事業報告と収支決算報告 ・エベレスト収支決算報告 ・今後の財政対策・次期役員改選の件	理事・監事・評議員 20名　学生3名
理事会	6月4日	日大理工学部 平山研究室	・平成8年度の基本課題と方針の確認 ・学生指導、財務改善、会員親睦の担当理事の決定 ・エベレスト登山隊報告書発行の件	理事12名 学生CL1名
臨時理事会	8月20日	談話室滝沢 （御茶ノ水）	・財務改善の具対策の検討 ・その他	理事・監事・評議員 11名
理事 評議会	9月 9日	日大理工学部	・年会費徴収方法について ・会報32号編集の件 ・空木岳遭難事故の経費報告	理事・監事・評議員 19名
理事会	11月11日	日大理工学部 5号館533号室	・年会費納入状況について ・天幕懇親会の報告と行事予定 ・会報32号編集状況 ・学生の山行予定	理事　7名 学生CL1名
理事会	1月20日	日大理工学部 5号館533号室	・総会日程について ・学生の冬山報告と次期リーダー会 ・会費納入状況と納入率向上対策	理事・監事10名 学生2名
理事会	3月10日	談話室滝沢 （御茶ノ水）	・合同慰霊祭の件 ・次期役員改選の件 ・会費納入状況 ・行事予定 ・学生の山行状況	理事・評議員11名

日本大学山岳部

平成９年度　（1997年４月～1998年３月）

部　長　　平山　善吉
監　督　　神崎　忠男
コーチ　　山本　茂久
主　将　　村田　慎也

部　員　　４年　CL 村田慎也
　　SL 千葉敦雄
　　木村克久　西尾暁子
　　３年　本多直也　松本達彦
　　２年　深沢智徳　佐藤凡
　　１年　小林州行　木幡幸太

部　室　　〒156-0056
　　東京都世田谷区八幡山 2-10-12

平成９年度活動報告

チーフリーダー　村田　慎也

97年度は、年間目標を冬季登山における総合力を強化し、前年度にまとめてきた事故の反省を各訓練合宿に盛り込み、定着させることを目標とすることにした。

新入生の勧誘については、６人というメンバーで各校舎に回るのは難しく、４月時点での新規メンバーは１人という結果になってしまった。今後は勧誘の仕方についても考える必要があるだろう。

５月は目標である剱岳の偵察もかねて６人全員で早月尾根から剱岳、大日岳に行くことにした。２月、春といまひとつ成功とはいえない結果だったので、この成功は大いに自信に繋がった。

新入生が１名という状況を考え、初夏合宿は雪上技術の習得を第一に考えて涸沢で行った。本合宿を含め、後半では表銀座縦走、滝谷登攀と密度の濃い成果を収めることができた。

夏合宿では、剱岳の概念把握をするためにいつもの内蔵助カールではなく、剱沢で行った。しかし、合宿中は雨にたたられ分散登攀が１回しかできなかった。また合宿中と帰京後にケガ人を出すなど、夏は当初予定した計画をまっとうすることができなかった。

秋山は、少しでも雪のあるところに行き、経験を積むために北アルプス・後立山連峰に３隊で入った。この時期にしては大量の雪が降り、ラッセルなど本格的なトレーニングを行うことができた。

しかし、その２週間後に予定していた富士山合宿では山頂でも 15cm というわずかな積雪で、出発直前に北アルプス・八方尾根で行うことにした。ここでも雪は少なかったが、なんとか雪訓を行うことができた。

冬山合宿は、早月尾根からの剱岳登頂を目指した。尾根そのものは難しくないが、総合力をつけられる場所を選んだ。しかしここでも暖冬の影響から雪は驚くほど少なく、４日間で終えてしまった。

本多を中心に新規リーダー会となり、秋山や冬山で十分な経験を積むことができなかったため、２月山行はＯＢを入れ、長めの縦走を南アルプスで行った。去年敗退したルートだったが、14日間かけて成功することができ

た。その勢いに乗り、春山合宿では冬山合宿で予定している槍ヶ岳、穂高岳周辺の概念把握をするために横尾尾根から槍ヶ岳への計画を立て成功することができた。

目標であった冬山合宿はあっけなく成功したし、早くからリーダー陣の一員として計画検討に携わっていた、本多、松本は、しっかりした方向性とバランスの良い企画力を持ったリーダーに成長している。

平成９年度コーチ会報告

ヘッドコーチ　山本　茂久

事故直後の昨年度は、事故の反省を反映しつつ手探りで活動を進めていった状態だった。今年度は、昨年度の新たな試みを維持しつつ、いかにスムーズに今までの活動に持っていくことができるか、ということが課題であった。

新人勧誘は思うようにはいかなかったが、結果的には各学年２名以上づつ残り、他大学を見れば決して少人数ではない状態になった。各学年２名程度の人数で、全学年揃っているというのは、登山活動だけでなく、コミュニケーションの取り易さという意味でも、実はちょうど良い人数ではないかと思う。今年度の活動がそれを物語っている。

コーチ会の活動としては、昨年度に引き続き、無雪期は合宿・個人山行を問わず、積極的にＯＢが参加するようにした。特に卒業したばかりのコーチが参加することは、危機感を持った先輩と一緒に登山をすることになり、リーダー陣にとって非常に勉強になったと思う。また、このことは安全性を高めるとともに、若手ＯＢと現役部員がお互いに切磋琢磨するという構図が生まれたのではないか。

今年度は、「冬の剣」という大命題があったにもかかわらず、各合宿ごとの計画検討にはかなりの時間を要した。しかし、結果論で言うと、その時間が生きた形になったようだ。

記　録

■５月山行

北アルプス早月尾根～剱岳～大日岳～室堂

期　　日　４月29日～５月２日

メンバー　Ｌ村田　千葉、木村　本多　深沢

４月29日　晴　馬場島～早月小屋

５月になると、晴れると暑い。レーションのソーセージが腐ってしまった。早月小屋まではトレースがあり、難なくいく。

４月30日　曇～雨　ＣＳ～2600m地点

ガスがかかってきたので無理せず、エボシ手前までとする。

５月１日　快晴　ＣＳ～剱岳～剱沢小屋

昨日雨を降らせた前線が抜け、移動性の高気圧に覆われ絶好の登山日和。エボシ岩に１ピッチフィックス。シシ頭の下降は少し嫌らしかった。カニのはさみから別山尾根分岐まで３ピッチフィックス。別山尾根はカニのヨコバイで２ピッチ前剱の急な雪面２ピッチフィクスする。ＧＷの剱はたくさんの登山者がいて雪山なのだが、夏山のような安心感が出てしまった。

５月２日　快晴　ＣＳ～大日岳～室堂

別山乗越を経由した大日岳へ。雪がやむまで待っていて歩きやすい。思ったよりもいったので、今日中に室堂に下りる。室堂は観光客でいっぱいだった。

■初夏合宿

穂高連峰・涸沢定着

期　　日　6月11日～6月18日

メンバー　L村田　千葉、木村　西尾　本多
　　深沢　松本　佐藤　木幡
　　OB岡田　大谷　斎藤　宇田川
　　OG原田　鈴木

6月11日　雨～曇～雨～晴
　　上高地→涸沢

雨の中、上高地に到着する。深沢に先行させるが、そんなに差は開かない。本谷で松本が腰を傷めるが大事には至らない。木幡はまあまあのペースで涸沢到着。涸沢到着後、本多と深沢で雪訓場の偵察に行く。原田OG入山。

6月12日　曇～晴～曇

・北穂～奥穂高岳　L千葉　木村　本多
・雪渓訓練　L村田　西尾　松本　深沢
　　木幡　OG原田

周遊パーティーは問題なく偵察を行う。北穂高南峰直下で1ピッチフィックス。上級生パーティーなので1時前にはBCに行く。千葉はそのまま雪訓に合流。雪訓は5・6のコルの6峰側で行う。木幡ひとりなので質・量ともにみっちり行うことができた。

6月13日　晴～曇　雪渓訓練

木幡の歩行訓練の復習と深沢のフィックス工作の練習を行う。ビーコン捜索の訓練を終えたあと、時間が余ったので、木幡のザイルワークと制動確保時の脱出法を行う。OB岡田、大谷入山。

6月14日　晴　分散登攀

・北尾根　　L千葉　本多
・北穂～奥穂高岳　L千葉　松本
　　OG鈴木
・北尾根　　L宇田川　OB深沢
・北尾根・Ⅲ峰フェース　L斎藤OB
　　村田　本多

東稜は、V字雪渓の右をつめる。3ピッチフィックスし懸垂したあと、1ピッチフィックスし、東稜のコルに出る。北穂高岳山頂で北穂高隊と合流し、下降。北尾根はⅢ峰までとし、3・4コルから下降する。Ⅲ峰フェースは2ピッチ目のチムニーが山靴で突破できず敗退。村田、西尾下山。表銀座隊は横尾まで下りる。

≪後半分散・表銀座縦走≫

期　　日　6月16日～18日

メンバー　L木村　深沢　佐藤　木幡

6月16日　曇　横尾→槍の肩

朝8時40分に佐藤が到着し出発。大曲から15分ほど行ったところから雪渓歩きとなる。槍の肩では水は1リットル200円であった。

6月17日　晴～曇～雨　CS→大天荘

槍ヶ岳にアタック後、出発。ヒュッテ大槍から10分ほど下ったところのトラバースでザイルを出す。そこからさらに15分ほど下ったあとのトラバースでも出す。喜作新道が予想外に悪く、4ピッチザイルを出した。

6月18日　曇　CS→燕岳→中房温泉

小屋で水を買ってから出発。疲れた体にムチを打って歩く。燕山荘に荷物を置き、燕岳にアタック。ガスに包まれたなか、ピークに立つ。合戦尾根を下り、無事下山。

≪後半分散・滝谷クラック尾根登攀≫

期　　日　6月17日～6月18日

メンバー　L千葉　本多　松本

天候が悪く、17日に登攀するが間違えて1尾根を登っていた。翌日も天候が回復しなかったので上高地に下山する。

■夏山合宿

北アルプス剱沢定着

期　　日　7月30日～8月11日

メンバー　L本多　千葉　木村　西尾　本多
　　松本　深沢　木幡　小林
　　OB大塚　中沢　篠崎　宇田川

≪入山≫

薬師岳隊

期　　日　7月30日～8月11日

メンバー　L本多　深沢　木幡　宇田川OB

7月30日　曇　折立～薬師峠

樹林帯の急登を快調なペースで進む。とくに深沢は去年の雪辱戦ということで、危機感をもって臨んでいるようだ。

7月31日　曇　CS～スゴ乗越

今日もガスのなか、出発。薬師岳頂上で宇田川さんの差し入れの西瓜をいただく。

8月1日　曇　CS～五色が原

今日もまたガスのなか、出発。5時すぎまで雨が降っているので出発を6時にした。スゴの頭、越中沢岳は急登のアップダウンが続く。あまり暑くないのが幸いしているのか、今日もみな頑張った。

8月2日　曇　CS～剱沢

一ノ越からは行列が雄山まで続いており、頂上も人で埋まっている。昨日着いた早月隊の西尾、小林の出迎えがうれしかった。

早月隊

期　　日　7月31日～8月3日

メンバー　L千葉　木村　西尾　佐藤　小林

7月31日　晴～曇　馬場島～早月小屋

佐藤42㎏、小林36㎏ほどの荷物で出発。小林は止まることなく歩いた。早月小屋では1リットル150円で水を買うことができた。

8月1日　晴～曇　CS～剱沢

1ピッチ目から小林がバテ、2400m以上の危険箇所のことも考え、次のピッチから公共装備を抜く。抜いた装備は、危険箇所がすぎた前剱手前で小林にふたたび背負わせた。

8月2日　曇　雪訓

佐藤の雪訓を千葉、木村で行い、西尾、小林は停滞とする。熊の岩丈夫で雪訓を行う。佐藤は1年ぶりということもあり、下降で少しぎこちなかった。薬師隊BC入り。

8月3日　晴ときどき曇

6峰Aフェース魚津高ルート
　　L千葉　佐藤
源治郎・峰成城大ルート偵察
　　L木村　深沢

魚津高ルートは先行パーティーがいたので、30分ほど待つがその後は順調に登る。BCへの帰り、足を骨折した女性を救助した。V峰成城大ルートは落石が多く、遠目からルートを見ることにした。村田、松本、大塚OBが入山。

≪本合宿≫

8月4日　曇～雨

雄山ダッシュ　L村田　西尾　本多　松本
　　小林　木幡

1日無駄に使うのはもったいないので、ガスのなか雄山へ。その他のメンバーは停滞。中沢、篠崎OBが入山。

8月5日　雨　雪訓

朝から小雨模様で待機する。7時に出発するがガスっているので剱沢を少し上がったところで雪訓する。歩行訓練の途中まで行うが、雨が本降りになってきたので、BCへ戻る。帰ったらテント・ジャンボが1張倒れていた。すごい雨と風だった。大塚OB下山。

8月6日　晴　雪訓

予定どおり、長次郎で雪訓を行う。歩行訓練、直登直下降ダイヤモンド、8の字をこなす。1年のザイルワークの途中で時間切れと

なる。中沢、篠崎ＯＢ下山。

8月7日　晴　雪訓

朝ガスっていたので待機する。６時ごろから晴れたので出発する。長次郎の途中で木幡がフラフラになってしまったので１時間ほど岩陰で休ませたが、回復しなかったので村田、本多でＢＣまで下ろすことにする。小林も調子が悪そうだったが、なんとかザイルワークの雪訓を行う。

8月8日　雨　停滞

朝からすごい雨の為停滞。

8月9日　晴～曇

・６峰Ｃフェース剱稜会ルート

Ｌ木村　深沢　小林　宇田川ＯＢ

・６峰Ｂフェース京大ルート

Ｌ千葉　西尾　松本

雪訓後、剱岳登頂　Ｌ村田　本多　木幡

剱稜会ルート、京大ルートとも順調に終わるが、長次郎雪渓を下降中、深沢がグリセードで足をひねり、じん帯を傷める。一人で歩くのが困難なため宇田川と木村で肩を貸しながらＢＣになんとか戻り、診療所で診てもらう。また金沢大がＡフェースでグランドフォールしたとこのことで千葉が県警を手伝うため、熊の岩まで行く。無事ヘリコプターで収容された。

8月10日　雨　停滞

木村、深沢、宇田川ＯＢ下山。

8月１１日　雨～曇～晴

チンネ隊、縦走隊共雨の中の別れとなる。

≪後半分散≫

期　　日　8月11日～15日

メンバー　Ｌ千葉　本多　松本　木幡

8月11日　雨～曇～晴　ＢＣ～三の窓

雨のなか、剱沢ＢＣを出発。別山尾根のカニノタテバイなどの鎖場は雨のため岩が濡れており、緊張して通過。八ツ峰の頭への登りで１ピッチフィックスする。三ノ窓に着くころには天候も回復し、みな久しぶりにくつろぐ。

8月12日　曇、一時雨　中央チムニー、北条、新村ルート

本多／松本、千葉／木幡のザイルオーダーで行く。中央チムニーは難しいところはなく、快適に登る。その後、時間があったので北条、新村ルートを登る。このルートは３ピッチ（Ⅳ、Ａ１）のアブミを使用しハングを乗越すところだが、千葉以外のメンバーはアブミが初めてだったので苦労していた。

8月13日　曇～雨～曇　左稜線登攀

朝方、小雨が降っていたが、８時半すぎから晴れ間が出てきたので出発する。左稜線には３パーティーが取りついていたため、30分間、順番待ちする。Ｔ５に着いたころから雨が強くなり、登攀不可能になったため、仕方なく左下カンテルートを４ピッチ懸垂し、三ノ窓に帰る。

8月14日　晴～曇　左稜線登攀

快晴のなか、左稜線を登攀。我々のパーティの前後に８パーティー取りついていた。Ｔ５までは快適に登攀する。核心のⅣ、Ａ１（フリーではＶ－）の箇所は全員フリーで登る。小ハングを越えるところはガバなので、アブミを使わないで登ったほうがよい。左稜線は２回目にしてやっと登る。

8月15日　晴　三ノ窓～剱沢～室堂

剱沢で本合宿で使用した装備を回収し、室堂に下山。

≪縦走隊≫

期　　日　8月11日～16日

メンバー　Ｌ村田　西尾　小林

薬師岳、黒部五郎岳を経て、上高地まで快適に夏山を満喫することができた。

≪沢隊≫

双六川支流打込谷
期　　日　8月12日～14日
メンバー　L木村　佐藤　OB宇田川

■夏山個人山行

1．屏風岩強化山行　三ツ峠　谷川岳

期　　日　8月23日～28日
メンバー　L千葉　本多　佐藤　木幡
〈三ツ峠〉
8月23日
・右フェース　千葉－木幡
・中央フェース　本多－佐藤
ほか2本
8月24日
中央フェース、亀ルート
〈谷川岳〉
8月27日、28日
27日中央稜、28日変形チムニーを登る。
この時期はひょんぐりの滝を右岸から2ピッチの懸垂をする。

2．穂高屏風岩

期　　日　9月7日～13日
メンバー　L千葉　本多　木幡　OB宇田川
9月7日　雨
上高地～1ルンゼ押し出し岩小屋BC
千葉、宇田川で緑ルートを登る予定なので先に入山。
9月8日　雨　停滞
雨のため緑ルート登れず。本多、木幡激流の梓川を決死の渡渉で入山。
9月9日　雨時々曇り
朝方雨はやんでいたので、T4尾根賭取り付きまで行くがすぐ降ってきたのでBCに戻る。
9月10日　晴れ　雲稜ルート登攀
千葉－木幡、宇田川－本多で千葉パーティーが先行する。2ピッチ目はフリーの技術が無いので迷わずアブミ。終了点まであと1ピッチのところで東壁ルンゼの上部から岩雪崩が発生。千葉はハング下にいたので無事だった。他のメンバーも小石がぶつかる程度で無事であった。上部に行くのが危険だったのでそこから懸垂下降。
9月11日　晴れ　鵬翔ルート
昨日と同じザイルオーダーで行く。快適はアブミのかけかえだ。所々抜けそうなハーケン、ボルトが多く、3，4mmのスリングをタイオフにしていく。同ルート下降したがうまくいかず時間をとった。
9月12日　晴れ時々曇　BC～北穂南稜CS
次は滝谷だ。雪の無い涸沢に来るのは初めてだ。初夏と印象が違う。じめじめして無く、快適に眠れそうだ。
9月13日　雨　CS～上高地
明日も台風の影響で雨とのことなので下山。

3．南アルプス　赤石沢

期　　日　9月5日～8日
メンバー　L木村　村田　西尾　佐藤　小林
OB岡田

■秋山山行

1．八方～鹿島槍隊

期　　日　10月31日～11月4日
メンバー　L千葉　本多　佐藤　木幡
10月31日　曇のち雪
八方ゴンドラアダムに乗り入山。八方池からワカンを履き膝上ラッセル。天場につくころには吹雪になった。
11月1日　雪　停滞
冬型の気圧配置のため停滞。
11月2日　快晴　CS～五竜岳～北尾根の頭手前CS
アイゼンでラッセル。なかなか五竜までつ

かない。五竜を過ぎてからはいやらしい。G4,G5 は黒部側を巻くが夏道通しに行けたのでロープを出す必要は無かった。村田隊とシーバーを取る。

11 月 3 日　快晴　CS～鹿島槍～冷池山荘

キレット小屋までハシゴ、鎖場が続く。いやらしい。八方キレットは最低コルに行くところで１ピッチ懸垂（支点はハーケン、ボルト）以外はハシゴ、鎖が続いてザイルを使わずに行く。吊り尾根からは村田隊のトレースで快適に歩く。やっとラッセルが終わった。

11 月 4 日　快晴　CS～扇沢

下山。扇沢は紅葉がきれいだった。

２．柏原新道～鹿島槍隊

期　　日　11 月 1 日～3 日

メンバー　L 村田　木村　西尾　深沢　小林

11 月 1 日　雪　扇沢～種池小屋 CS

いきなりの大雪。ラッセルに苦しめられる。膝から腰ほどのラッセル。２３００m 付近の沢通過は雪崩の危険があり、素早く通過。何とか小屋まで行く。

11 月 2 日　快晴　CS～冷池～鹿島槍～冷池 CS

小林のザックのバックルが壊れる。何とか応急処置をして出発。冷池に着き荷物をデポし鹿島槍にアタック。

11 月 3 日　快晴　CS～赤岩尾根～大谷原

危険箇所の赤岩のトラバースはトレースがついていて、雪の状態もよいのでのーザイルでいく。その下の１箇所切れている所はフィックスする。

３．柏原新道～爺が岳往復隊

期　　日 10 月 29 日～31 日

メンバー　L 宇田川　金子　平城

途中入部の平城を OB 宇田川、金子に連れて行ってもらうが、平城は精神的、体力的にもまだ冬やまま無理なことが判明する。

■八方尾根訓練合宿

期　　日　11 月 29 日～12 月 2 日

メンバー　L 村田　SL 千葉　木村　西尾　本多　松本　深沢　佐藤　小林　平城

11 月 29 日　雨　黒菱平～八方池 BC

雨入山。出発直後から平城が遅れる。八方池手前まで夏道がかなり出ていた。あまりにはやく着いたので、２年のザイルワークを行う。

雪訓場所は丸山ケルン直下のカール状になっている場所で行う。

11 月 30 日　雨のち曇　雪訓

昨晩からの雨でシュラフ、服等がかなり濡れたのでコールマン４台でひたすら乾かす。

雪訓では２年のザイルワークの続きと１年の雪訓を並行して行う。初夏、夏と参加していない平城には苦労させられる。

12 月 1 日　晴れ

・唐松往復隊

L 村田　木村　西尾　松本　深沢　佐藤　小林

稜線は危険なところも無く２ピッチで唐松岳に着く。帰りは２年のザイルワークの練習で５ピッチフィックス。

雪訓場にて、ジッヘル、ビーコン捜索を行い BC に戻る。

・雪訓隊　L 千葉　本多　平城

朝から平城の準備が遅く出発が遅れる。肩がらみから始めるが、なかなか出来ない。何とか粘ってザイルワークを一通り終わらせる。

12 月 2 日　雪

BC～丸山ケルン～八方下山

昨日までとは打って変わって大雪。半分埋まったテントを除雪し撤収。ひたすらラッセ

ルで丸山ケルン下で行く。そこから引き返し吹雪の中下山。

＜全体を通して＞

この時期の合宿は冬山前の総仕上げとして組んでいくのであるが、毎年富士山で行っていたから安易にそうするのではなく、目標である冬山を考え、自分たちの力量と照らし合わし山域を考えていくことが必要である。リーダー会としては富士山のメリット、デメリットを考えた結果八方とした。

今回の八方は一つの選択肢であると考える。これは初夏、夏にも同じことが言えると思う。

■冬山合宿

北アルプス早月尾根～剣岳往復

期　　日　12月24日～27日

メンバー　L村田　千葉　木村　西尾　松本　深沢　佐藤　小林

12月24日　晴れ　馬場島～早月小屋AC

雪は少なく馬場島までタクシーでは入れる。尾根上も雪は少なく5月のような状態である。しかもトレースがありワカンノ必要も無い。

12月25日　晴れ

剣岳アタック　L千葉　本多　佐藤　深沢

テントキーパー　村田　木村　西尾　松本　小林

小林の調子が悪く微熱がある。フィックス工作と早月小屋からアタックできるかを千葉、本多、佐藤、深沢で偵察に行かせる。3大学が取り付いていてフィックス待ちで時間を取ったが、鳥帽子岩2ピッチ、シシ頭ピッチ（雪が少なく鎖が出ていたため池ノ谷側から巻く）カニのハサミで2ピッチフィックスする。本来はフィックス工作だけであったが時間があったので頂上に行く。2日目にして頂上に登ってしまった。

12月26日　晴れ　AC～剣岳～AC

昨日アタックしたメンバーアタックする。深沢は調子が悪いのでテントキーパーにする。小林は木村がコンテをし、さらに前後の上級生がフォローする体制で行く。トレース、フィックスもあり、早月小屋から5時間で頂上に着く。頂上は絶景で、日本海まで見渡すことが出来た。

12月27日　雪　AC～馬場島

行きよりも雪は減っており今年は暖冬であると感じた。

■南アルプス合宿

池山吊尾根～北岳～仙丈岳～北沢峠～甲斐駒ヶ岳

期　　日　2月9日～2月22日

メンバー　L本多　松本　佐藤　深沢　小林　木幡　小林　OB千葉

2月9日　晴　芦安先～夜叉神峠～観音経トンネル

夜叉神峠まで車で入れると聞いてきたが、雪のため芦安先のゲートで下ろされる。夜叉神峠からは雪がひざ下まであり、ラッセル。鷲ノ住山まで行く時間がなく、トンネルのなかで張る。長野オリンピック開幕。

2月10日　雪　CS～池山吊尾根取付

朝から雪が降っており、風も強い。林道を進むにつれ、ラッセルが徐々に深くなってくる。鷲ノ住山からは風も強くなり傾斜も急なのでアイゼンを履く。11時に池山吊尾根取付に着くが、天候とこの先天場がないことを考えて、テントを張る。スピードスケートの清水宏保の金メダルに歓喜する。

2月11日　晴　CS～城峰手前

ラッセルが徐々にきつくなり、2ピッチ目からワカンを着ける。雪はやわらかく斜面は

急なので歩きづらい。城南手前の樹林帯のなかにテントを張る。

2月12日　雪　停滞

朝から雪であり、風も強く視界が効かない。9時の天気図で判断し、停滞を決める。雪の多さと天候の悪さから今後の行動が厳しいものと予想される。

2月13日　晴　CS～ボーコン沢の頭先コル

快晴のなか出発する。相変わらずラッセルが深い。ボーコン沢の頭先コルから先は天幕可能地が北岳山荘までないので、防風壁をつくりテントを張る。

2月14日　雪　停滞

雪、風ともに強く視界が効かない。9時の天気図で判断し停滞を決める。前線をともなう低気圧が南岸を通過している。3時間おきの除雪を強いられる。

2月15日　晴　CS～八本歯の頭～北岳山荘

快晴のなか出発。八本歯の頭から下りで2ピッチフィックスして北側を巻くように通過し、さらに1ピッチ懸垂下降したあと、1ピッチフィックスして八本歯のコルに達する。コルからの登りでは埋もれた梯子場の急斜面で1ピッチフィックスする。主稜線に突き上げる斜面の雪の付き方がいやらしく感じたので十分な間隔を開けて通過する。北岳ピークへは下りのみ2ピッチフィックスする。さらに北岳山荘へ西側を4ピッチのフィックスをして通過する。信州大の4人もいたが山荘の中にテントを張れた。

2月17日　雪　停滞

6時半に出発するが15分ほど進んだところで、雪、とくに風が強く視界も効かないため危険を感じ引き返す。天気図では低気圧が通過し高気圧が張り出してきているのだが、夕方まで悪天候が続いた。やったぜ原田、日の丸飛行隊金メダル！

2月18日　晴　CS～横川岳先

移動性高気圧が来るのがわかっていたので早めに撤収、出発する。強風で目も開けられないほどだが快晴である。ときおり耐風姿勢をとりながらじりじり進む。三峰岳はピークをトラバースする。下りは細いが雪が安定しており問題ない。風も所所弱まってくる。樹林帯は地図でルートを探しながら慎重に進む。信州大のものと思われるトレースはほとんど消えてしまっていて、ワカンでのラッセルになる。野呂川越をすぎ、横川岳先の樹林帯でテントを張る。

2月19日　晴　CS～伊那荒倉岳～2676m手前

小林が疲れのためか37℃の熱がある。少し様子を見るが歩けそうなので出発する。リミットぎりぎりである。ルートファインディングとラッセルに苦労する。小林は途中から装備を抜いて歩かせる。小林の体調とこの先、天場のないことを考えて、仙丈岳手前の2676m手前のコルにテントを張る。

2月20日　雪　CS～仙丈岳～仙水小屋

昨日の天気図から午前中しか天気がもたないと予想していたが、すでに小雪が朝から舞っている。風は強くない。視界は20mほどだが。うまくルートファインディングができた。仙丈岳をすぎたころから風が急に強くなってきた。木幡のコンタクトレンズの調子が悪く眼鏡に替えたのだが、痛みがあるようでペースが上がらなかった。予想された雪屁や雪崩の危険はそれほどではなかった。

2月21日　晴　CS～甲斐駒ヶ岳～黒戸尾根七丈小屋

今日はリミットの日であり、8時に出発できなければ戸台に向かうと昨夜決めていた。5時の時点では雪であり、7時近くになって雪がやみ晴れ間がのぞき始めたのでぎりぎり

の出発となる。駒津峰までは急登のラッセルでワカンを使用するが、１年２人はバテバテである。駒ヶ岳直下の岩場は問題なく通過できた。黒戸尾根の下降も雪屁や鎖があるがザイルを出すほどではなかった。

2月22日　晴　ＣＳ～竹宇駒ヶ岳神社

梯子や鎖場の連続だがザイルを出すほどではなく、刃渡りも問題ない。下部の樹林帯ではルートファインディングが難しく、一度ルートを見失い５分ほど戻り、正規のルートを見つけた。竹宇駒が岳に着き、余韻に浸る。

＜南アルプス合宿を振り返って＞

目的にあげていたひとつである、「新メンバー間のコンセンサスの向上」という面では６人という少人数での準備会、トレーニングや天候が悪く、長期の合宿になったぶん、縦も横の関係も意思が自然と伝わる手前までに向上したと思われる。実際、山行中、たとえば危険箇所でのザイルを出す判断など、１年の感じ方と４年の感じ方は違うわけで、逐一上級生は下のものに声をかけ全員の見解で判断を下すことができた。今後の山行についてもこのことはもちろん実践していくのだが、上級生は隊におけるザイルを出す基準、判断の感覚を養い、さらに下級生が自分の意見を素直にいえる雰囲気づくりを、これからもしていこうと考えている。

２つめにあげていた「積雪期の諸技術向上」において、生活技術に関してはほぼできているが、体調不良が出たこともこの技術にかかわることなので、油断せずにさらに追求していく。

体力に関しては長期の合宿になったことや、ラッセルが多かったこともあり、後半に１年の体力不足が出てしまった。トレーニングの充実と徹底を図るとともに、自主トレーニングの重要性を認識させる。２年のザイルワークについては、支点の取り方やスピードに関してはほぼできている。が、先に述べたザイルを出す基準や判断、ルートの選定などの点で課題が残った。

計画を遂行することはできたが、それぞれの課題の追求と向上をさらに進めて、油断することなく春山合宿に臨まなければならない。

（本多記）

■春山合宿

北アルプス・横尾尾根～槍ヶ岳

期　　日　3月8日～3月13日

メンバー　Ｌ本多　松本　佐藤　深沢　小林　木幡

3月8日　晴　釜トンネル～横尾岩小屋

今年から釜トンネル手前まで車が入るため、ハイカーやクロカンスキーヤーがかなりいる。そのため上高地までは歩きやすい。徳沢あたりになると雪がひざ下ほどになるが、明治大のものと思われるトレースが残っていた。横尾の橋を渡り、岩小屋までは河原沿いを歩き、取付近くにテントを張る。

3月9日　晴　ＣＳ～３・４のコル

岩小屋から稜線目指してラッセルしながら直登する。稜線には明治大の赤布がある。Ｐ２の下りはクライムダウンでＰ２・３のコルに達する。Ｐ３へは出だしの木の露出した急斜面を１ピッチフィックスし、さらに雪の露出した箇所を１ピッチフィックスする。明治大のフィックスがかなりあり、Ｐ３には冬天が張ってあった。Ｐ３の下りは、両側が切れている岩峰に２ピッチフィックスする。ここでルート工作していた明治大とすれ違う。さらに50m懸垂下降し、Ｐ３・４のコルにテントを張る。

3月10日　晴　ＣＳ～天狗のコル

出発時にガスがかかっていたが徐々に晴れ

てくる。Ｐ４の登りは急だがザイルを張るほどではない。１か所岩峰を巻くところを細引きでフィックスする。Ｐ５付近で明治大はテントを張るようだ。Ｐ５から横尾の歯までは森林限界を越え、なだらかな稜線でロケーションがすばらしい。雪は重くラッセルが少しきつい。Ｐ７を越えた小コルから横尾の歯に２ピッチフィックスする。残置フィックスは古くて使えそうにないがピトンは使える。岩峰は巻かずに忠実に上を行った。雪の付き方がいやらしい。横尾の歯からＰ８、さらに天狗のコルまでは小さなアップダウンがかなり続いた。天狗のコルを整地し防風壁をつくりテントを張った。

3月11日　晴　ＣＳ～槍ヶ岳～肩の小屋

槍・穂高主稜線への登りは、心配していた雪崩よりも細い稜線に岩が露出したミックス帯となっており、アイゼンワークに気を使う。鎖場は埋まっていた。槍・穂高主稜線はクラスとしており、雪は安定している。中岳の登りも雪崩の危険はなかった。中岳の下りはやや急で、ハシゴは出ているが鎖場は埋まっており、クライムダウンする。飛騨乗越手前の岩峰は飛騨側のクラスとした斜面をトラバースし乗越にいたる。肩の小屋は屋根を残して埋まっている。登攀具のみを持ちアタックする。鎖、梯子は出ているが、それらをつなぐルートが雪で急斜面になっている。ピークはやはり何度来てもいいものであった。下りはピークから１ピッチフィックスし、さらに部分的に25mの懸垂下降を２回した。肩の小屋には誰もいなかった。テントは張らない。

3月12日　雪　停滞

二つ玉低気圧の通過で１日中、風雪が強かった。

3月13日　晴　ＣＳ～新穂高温泉

千丈沢乗越からの下りは雪が安定しており、岩峰を巻いて中崎尾根に出る。中崎尾根は小さなアップダウンが多く、雪も腐っている。奥丸山手前の分岐から槍平までは出だしの急斜面を間隔を開けて一人ずつ通過する。槍平から新穂高温泉までは各沢の出合い以外にもデブリが多く、間隔を開けて通過。雪が重く、トレースはないが、新穂高温泉まで雪崩以外に危険箇所はなかった。タクシーで松本駅に出る。

《春山合宿を振り返って》

春山合宿は１年間の総仕上げ、および新学年としての役割の自覚と実践が問われる合宿であるが、大きな問題点は見られず、２月の反省点を補おうとする姿勢が全員に見られた（ルート工作、体調管理、声、全体把握、諸生活技術など）。

これらは毎日の行動後の反省や、下界での講義会や規律の厳守などがよい形で出ていると考えられる。合宿を運営するにあたって、年間を通した計画を立て、各合宿に意義を持たせているのだが、新１年を迎えるまでの、２月、春、５月の合宿は、現６人のチームの確立を目指している。

細かい点での反省点はまだあるし、考え方が偏っているかもしれない。また油断もあると思う。コンセンサス、縦の指示系統などはほぼ確立できたと思われるものや、それぞれの反省点、および自覚、意識を高めることなども油断することなく部会、個人山行などで行っていき、リーダー陣が広い視野で冷静に部の舵取りをするようにしたい。（本多記）

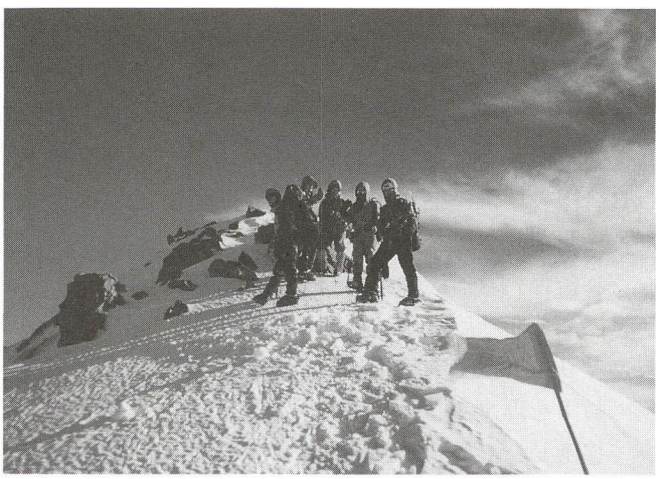
■個人山行

・上信越湯ノ丸山　東籠　山スキー
　3月1日～2日　L大谷OB　本多　松本
　深沢　岡田OB
・谷川連峰北部足拍子岳南面
　3月2日　L斉藤OB　木村　村田　宇田
　川OB
・谷川連峰一ノ倉沢一ノ沢二ノ沢中間稜
　3月2日　L山本（茂）OB　千葉
・みつまた高原スキー場～神楽峰往復
　4月13日　L本多　松本　深沢
・北アルプス　剱岳周辺（早月尾根～大日岳）
　4月29日～5月6日　L村田　千葉　木
　村　本多　深沢
・後立山連峰　白馬岳双子尾根
　5月10日～11日　L千葉　木村　松本
・奥秩父　丹波川小常木谷
　5月11日　L本多　深沢
・帝釈山脈　馬坂沢～サル沢
　5月21日～22日　L野本OB　木村　松
　本
・奥秩父　丹波川小室川谷　大黒茂谷
　5月23日～25日　L松本　本多
・奥多摩　日原川倉沢谷本谷　塩地谷
　5月25日　L西尾　木村　深沢　木幡
　鈴木OG
・北アルプス　表銀座
　6月15日～18日　L木村　深沢　佐藤
　木幡
・北アルプス　穂高連峰滝谷登攀
　6月15日～18日　L千葉　本多　松本
・吾妻連峰　前川　大滝沢
　6月25日　L野本OB　木村
・奥秩父　大常木谷
　7月5日～6日　L松本　西尾　深沢
　佐藤
・丹沢　玄倉川　小川谷廊下
　7月9日　L野本OB　小林　岡田OB
・八ヶ岳
　12月31日～1月2日　L野本OB　本多
　松本　深沢　平城

■岩登りトレーニングなど
日和田山　3回
氷川屏風岩　1回
三つ峠　2回
越沢バットレス　5回
パンプ　8回

■その他
大倉尾根（歩荷訓練）2回
救急講習会
上級救急講習会
アイスクライミング講習会

冬山合宿・早月尾根（平成 9 年・1997）



冬山合宿・早月尾根（平成 9 年・1997）

2 月山行・池山吊尾根（平成 10 年・1998）

桜門山岳会

平成９年度の回顧

平成８年度理事長　山本　晃弘

平成９年度は前年に引き続き、現役山岳部の実力向上、会員相互の懇親と連帯、会財政の健全化の三点を主な課題として理事会の活動をして参りました。

山岳部の実力向上については、何よりも新人の多数入部が第一段階であります。従って、前年の募集方法の反省に立って現役学生は努力致しましたが、残念乍結果二名の入部に止まりＯＢ皆様の期待に応える事が出来ませんでした。然し乍、実働８～９名の現役は退部者もなく、監督、コーチの指導のもとに各山行を無事にこなし一応技術的にも精神的にも成長して参りました。本年に入って４月の新人募集の対策を理事会、コーチ会、学生一体となって協議し、計画、準備そして勧誘活動と注力して参りましたのでその成果を期待しております。（本総会当日には確定していこと思いますが）

会運営の収支バランスについては会員皆様の御理解のもとに年会費の徴収をさせて戴く様になりましてから二年の本年も、会計報告に有ります様に黒字基調になって参りました。紙面を借りまして理事長として厚く御礼申し上げる次第です。然し乍、来年には会報の発行を予定しておりますし、今年度の住所録発行、新人募集パンフレット作成費等々、出費予定が控えております。又実績の出費として別会計報告に記載されないネパール国際山岳博物館建設寄付金、日本山岳会青年部カンチ登山隊への寄付金等、本来は当桜門山岳会から出費すべきものをエベレスト基金より取り崩して頂いたもの、又葬際関係費等も会長以下出席理事の個人負担によるものも少なく有りません。

何れにしましても会の活発な活動のペースと成る運営資金の原資であります年会費納入につきましては会員皆様にはどうかお忘れなく御納入下されます様節にお願い申し上げます。

会員相互の連帯と親睦の面では先ず理事会構成メンバーに若干の交替があり、不慣れなことから短信記事の誤字訂正等関係者に御迷惑をお掛けしました事等あらためてお詫び申し上げます。各担当理事も専門分野以外の不慣れな作業を正にボランティアでお引受け戴いている訳で有りますので、今後共暖かい御指導、御支援を紙上をお借りしてお願い申し上げます。

随時発行致しました短信にて御承知の通り、本年度は４月の合同慰霊祭を始めとして多くの行事、会合を実施致しました。然し乍、全行事への参加者が一部高年会員に偏りがちで、会員全体の連帯と親睦と言う所期の目的が達成されていない事を痛感しております。若年、中年層の会員諸氏の参加が少ないことは以前からの様でありますし、他大学等でもその傾向はありますが当会のなお一層の発展と、より良い会の運営の為にも若年、中年層会員皆様による当会主催行事への参加そして意志の疎通は不可欠のことで有ります。若い理事諸氏の積極的意見をくみ上げ諸行事を計画致しますので、更なる皆様のご参加、御協力をお願いするもので有ります。

役員人事につきましては会運営の硬直化を

防ぐ意味からも特に理事長の次世代交代を考えておりましたが、意に反して果たせずに留任と成りました。次年度には確実に新理事長への世代交代を計る所存で有ります。其の為にも中堅会員の方々による理事会への参加活動を強く望みたいと思っております。

さて、本年は山本（茂）氏の日本山岳会青年部カンチェンジュンガ登山隊が現在登山中であり、又池田パーティーのガッシャブルム登山が６、７月に出発と会員有志の海外登山が有ります。無事故登頂を節に期待致しますと共に、監督、コーチ会皆様の真剣な指導のもとに現役学生のより高みを目指しての厳しく且つ安全確実な登山を節にお願い致し、合わせて会員皆様のご健康を祈念し、回顧・報告を終わらせてい戴きます。

日本大学山岳部

平成10年度　（1998年4月～1999年3月）

部長　平山善吉
監督　神崎忠男
コーチ　山本茂久
主将　本多直也

部員　4年　CL本多直也　SL松本達彦
　　3年　深沢智徳　佐藤凡
　　2年　小林州行
　　1年　石川重樹　京増朋子

部室　〒101-0062
東京都千代田区神田駿河台1-18-1
日本大学理工学部内平山研究室

平成10年度活動報告

チーフリーダー本多直也

年間目標を槍・穂高連峰に定め、98年度はスタートした。

山岳部に何を求めて入部したかが各自異なる今日では、一つの目標に向かって全員で取り組むということに、強い苦痛を感じる者もいるだろう。

だが今年は部員一人ひとりがチームの一員、メンバーとしての役割を考え、実行してくれたため、部活動の充実、プラス冬山成功という結果に結びつけることができた。全体目標に取り組むやり方の例として今後、よい点、悪い点を部活に生かしてもらえればと思う。

最後に監督、コーチ、ＯＢの方々、支えてくださったすべての皆様に深く感謝いたします。そして松本、佐藤、深沢、小林、石川、京増、…Special Thanks.

平成10年度コーチ会報告

ヘッドコーチ　山本茂久

リーダーが多かった昨年度と比べ今年度は、起動力を生かして、冬の槍ヶ岳（北鎌と硫黄尾根）を年間目標においてスタートした。ここ数年、コーチ会では新規リーダー会発足時に具体的な年間目標を掲げることを半ば強制している。

個人山行日数が減少し、個人の能力のばらつきが大きくなっているせいか、自分たちに何が足りなくて、何をしなければならないのかが、分からなくなることがある。そういうときの指針として、明確な目標が必要であり、また目標はそのために必要最低限の技術・体力がわかるいう意味で、効率のよい活動をするための手段であるのだ。

当たり前のことだと思うが、リーダーといえど自分の時間を100パーセント山に割けない最近は、そういう目標が立てにくい状況にあるのかもしれない。

しかし、今年度のリーダー２人はコーチから話が出る前に、自然に槍ヶ岳の計画を考えてきたのだった。そして、目標に沿った年間

計画の立案と合宿計画の見直しを当初から行い、常に早めの計画提出を続けたことは高く評価したい。

実際の山行では、春に横尾尾根、５月に北鎌尾根の偵察を行い、秋にも準備山行を行った末え、冬合宿では見事に、北鎌尾根～槍ヶ岳～横尾尾根を成功させた。このようなひとつの山域にこだわった、流れのある山行は個人的にも好きだし、限られた１年間を有意義に使い、より安全な山登りをするためには、必要なことだと思う。

また、今年度は部室が実質的になくなり、運営上、苦しい年であった。しかし現役部員の努力と工夫によって何とか切り抜けることができた。

（総会パンフレットより）

記　録

■５月山行

１．北アルプス・硫黄尾根～槍ヶ岳～横尾尾根

期日　４月25日～５月４日

メンバー　Ｌ本多、深沢

４月25日　雨～曇　七倉～湯股～硫黄尾根樹林帯

雨の大町駅を出発。七倉でタクシーを降りて歩きはじめる。高瀬ダムのジグザグの登りは雨と重荷でくじけそうになる。ダムから湯股までは倒木が道をふさぎ、斜面につけられた木道は傾いている。稜線上に出て、Ｐ１手前まで向かうがまったく雪がなく、仕方なく先ほど、稜線上に出たところにあった残雪を求めて引き返し、テントを張る。

４月26日　ガス～晴　ＣＳ～小次郎のコル

Ｐ１までの樹林帯の急登は藪こぎを強いられる。硫黄岳ジャンダルム群はかなりもろい。小次郎のコルまでの下りはハイマツの急斜面で気が抜けない。小次郎のコルには何とか雪がありホッとする。

４月27日　晴　ＣＳ～南峰手前コル

硫黄岳へはもろい岩場（凹状雪壁）を直登する。その先のコルからアイゼンを履く。雪の上を左稜線に出るまで直登する。左稜線に出てからは稜線の右の斜面を登り硫黄岳に達する。雷鳥ルンゼ下降点は背丈を越すハイマツに隠れており、なかなか見つからなかった。南峰まで南西に伸びる顕著な尾根の右側を巻き降りるようなルンゼである。ルンゼ内を50ｍ×３ピッチで下降し、１ピッチで稜線に出る。ルンゼ内には雪が残っており、スノーバーで支点を取った。南峰には雪が見られなかったため、手前のコルにテントを張った。

４月28日　晴　ＣＳ～中山沢のコル

南峰を越えて赤岳ジャンダルム群１峰の手前でアンザイレン。テントを張った中山沢のコルに達するまでもろい岩と雪の稜線にまったく気が抜けず、緊張の連続で疲れる。

４月29日　ガス～曇ときどき晴　ＣＳ～白樺平

赤岳主峰群も赤岳ジャンダルム群同様、岩が非常にもろい。この日の行動は白樺平まで。

４月30日　晴　ＣＳ～槍ヶ岳山頂

西鎌尾根分岐から槍ヶ岳はでの南面は夏道が出ている。とくに問題もなく槍ヶ岳山頂に着く。肩から穂先まで雪がない。硫黄尾根では誰にも会わなかったが、槍の小屋付近にはたくさんの人がいた。

５月１日　風雨　待機

朝から槍ヶ岳はガスに包まれている。シーバー交信ができず、この日は北鎌隊と合流できないと思っていたが、16時半ごろに現れた。元気に５人がそろったことが何ともうれしい。

５月２日　風雨　停滞

前線による風雨が激しく、横尾尾根下降の危険性を考えて停滞とする。フライが破れて浸水するほどの激しさであった。

５月３日　風雨　停滞

昨日と同じ気象のため停滞とする。夕方になってようやく風雨が弱まってきた。フライは修理不能だが、ポールは曲がるだけでなんとか持ちこたえた。天気図からは明日の好転が予想される。

５月４日　晴　ＣＳ～天狗のコル～横尾～上高地

快晴のなか出発。南岳まではところどころ夏道が出ている。横尾の歯は雪がついておらず、残地フィックスが出ている。残地フィックスは信用できないほど古い。Ｐ３からは小ルンゼの雪渓を登山道まで降りる。１日で上高地まで着くことができたが、タクシー待ちと国道の落石事故で慌ただしい帰郷となった。

２．北鎌尾根

期日　４月28日～５月４日

メンバー　Ｌ松本、佐藤、小林

４月28日　晴　七倉～湯股～千天吊橋

湯股をすぎると左岸のガレた岩の都ラバー簾に緊張させられる。プラ靴のアウターだけを履いての渡渉もあり、さすがに冷たい。

４月29日　晴　ＣＳ～４・５のコル

千天吊橋は水に浮き沈みして使用できず、再び渡渉を強いられる。ロープで確保しながら進むが佐藤がバランスを崩して川に沈む。４・５のコルには何とか雪があり、天場とする。

４月30日　晴　ＣＳ～独標ピーク

全体的に岩がもろいが、支点はハイマツから取れ、確実に歩を進める。雪もぐさっており非常にいやらしい。独標ピークにテントを張ることはできたが、風をまともに受ける。

５月１日　曇　ＣＳ～肩の小屋

ガスのなか出発。連続する小ピークは細かなアップダウンがあり、危険を感じる。槍ヶ岳頂上までの登りは５ピッチ。下りは懸垂で越える。硫黄尾根隊と感動の合流。

《５月山行を振り返って》

98年の上半期は、上級生５名のチームとしての確立を目指してやってきた。なぜならこの５名が中心となって、下半期には新入生を迎えた新しいチーム作りをしていかなければならないからである。南アルプス、春山、５月と３つの合宿を行ってきたが、結果的にチームとしての確立はできたと考えている。この５人はそれぞれの得意、不得意分野をうまく補い合うことができるメンバーであると思う。

しかし、１、２人では力にならないと言うことができる。「クラブなのだからみんなで力を合わせればいい」という者がいるが、それは個人の努力であってこそのものであり、始めから他人に依存する気持ちでの言葉であってはならない。

５人にはそれぞれ個人の課題もある。さらには１年生を迎えての新しいチームづくりをしていかなくてはならない。一人ひとりがメンバーとして、各学年として、係としての役

割を果たせば、下半期も充実したものをつくることができるだろう。この部を実際つくり、動かしているのは誰か。それは自分たち学生である。自分たちで積極的に、楽しく、充実した魅力ある山岳部をつくっていこう。（本多記）

■初夏合宿

穂高岳涸沢定着

期日　6月19日～25日

メンバー　L本多　松本　深沢　佐藤　石川　京増　森田　奥村

〈定着〉

6月19日　曇～雨　上高地～涸沢ＢＣ

曇り空の上高地を出発。１年生もなんとか順調に歩いている。が、横尾での一本時にはすでに疲れが見え始めていた。昨年同様、本谷橋が設置されており、雪の少なさが心配になる。ここで雨が降ってきたため、雨具を着用する。涸沢まではほぼ夏道どおりで、ヒュッテ手前で100 mほど雪渓を歩くが、その先も雪はなく、天場にも雪がない。本谷橋から１年生のペースが上がらず、とくに森田が40分ほど遅れる。ギブアップ宣言も出たが聞く耳を持たず、土砂降りのなか、涸沢に着く。東京農大もテント張っており、挨拶に行く。

6月20日　ガス～晴　雪上訓練

ガスっていたため出発を遅らせる。５・６のコル直下は雪が少なく落石も多いために奥穂高岳直下で雪上訓練を行う。歩行、ジッヘル、グリセードと順調に行う。途中、千葉ＯＢが入山して雪上訓練を見ていただく。帰幕後、鈴木ＯＧ、宇田川ＯＢが入山し、賑やかになる。

6月21日　曇～雨　奥穂高岳往復

全員で奥穂高岳へ向かう。雪が少ないがかろうじて雪の上を歩く。途中、ザイテングラードのケルンを参拝する。体力不足が目立ち、３時間以上もかかってしまう。すべて夏道。１年はピークに立ててうれしそう。天候が持ちそうにないので早々に下る。ザイテングラードを途中でトラバースして雪渓をグリセードと直下降の復習をしながら下る。ＢＣに着くと雨が降ってきた。

6月22日　雨　停滞

雨の合間をぬって、ビーコン、コール、部下の練習を行う。

6月23日　雨　ＢＣ～横尾～上高地

前線による雨のため北穂高岳登頂をあきらめ下山する。途中、新村橋先のケルンに向かうがひどい藪で発見できず、黙祷のみ行う。

《初夏合宿を振り返って》

今合宿は普段のプログラムよりも大幅に軽い内容にし、１年が山の魅力に触れることを第一の目的とした。その目的は果たせた。しかし、個々の反省を見ていくと、安全に登山を行える実力をつけずに積雪期になってしまう可能性がある。いろいろな考え方があると思うが、精神面、行動面でもう一段階上を追求していくつもりである。（本多記）

《後半分散》

期日　6月23日～26日

メンバー　L深沢　佐藤

6月23日～26日

涸沢の残って24、25日に、前穂高岳北尾根を登攀。その後、上高地へ下山。

■夏山合宿

剣沢定着

期日　８月３日～８月 12 日

メンバー　Ｌ本多　松本　深沢　佐藤　石川　京増

〈入山〉

１．大日隊

期日　８月３日～５日

メンバー　Ｌ深沢　佐藤　京増

８月３日　雨　停滞

大雨で称名川が増水しているため、称名平へのバスが運休している。道路も通行するのは危険ということなので、停滞とする。杉田旅館のご厚意に甘え、泊めさせていただく。

８月４日　曇～雨　桂台～大日小屋

朝には雨がやみ、称名川の水も昨日の三分の一ほどになっているが、バスは 11 時まで運休となっている。そこでゲートのある桂台までタクシーで入り、称名平まで歩く。天気はときどき激しい雨が降ったりやんだりとはっきりしない。大日平山荘を過ぎると雨が降り続け、登山道が川のようになっている。数度沢を渡渉し、全員靴の中までびしょ濡れになりながら、大日小屋に着く。

８月５日　曇ときどき雨　ＣＳ～別山乗越～剣沢

朝から雨が降っており、出発を遅らせる。ガスのためせっかくの眺望もまったくきかない。ときどき晴れ間がのぞくが、連日の雨にみな少々疲れ気味である。剣沢に着き、全員の再会を喜ぶ。

２．雄山隊

期日　８月４日～５日

メンバー　Ｌ本多　松本　石川

８月４日　雨　室堂～女形

ダムの駅長室に上ノ廊下隊の荷物をデポさせてもらい（菓子折が効いた）、雷殿へとアルペンルートを進むが、激しい風雨のために雷殿が封鎖されてしまう。仕方なく室堂から歩く。一ノ越、雄山へと進むが、石川のペースが悪い。横殴りの雨で寒く、早く着きたいのだが……。ぬれねずみで剣沢に到着。内蔵助カールは非常に雪が少ないがかろうじて雪訓ができそうな状態だった。

８月５日　ガス～雨～晴　ＢＣ～６峰取付～ＢＣ

本多、松本で雪訓場と取付の偵察にガスの合間をぬって出発する。平蔵谷出合まではシュルンドが開いており右岸の夏道を行く。長次郎雪渓は途中で完全に分断されており、右岸の岩場を 200 ｍほど巻いてふたたび雪渓に戻る。雪訓は右股で可能。６峰取付付近にはまったく雪がなく、取付くまでに落石に注意が必要。東京農大をはじめ、学生が多かった。午後、剣沢小屋にあいさつにうかがい、食堂の写真を見せていただきコーヒーまでご馳走になった。

《定着》

８月６日　曇ときどき晴　雪訓

偵察した長次郎右股で雪訓を行う。日に日に雪渓が少なくなっていく。歩行技術をひと通り終わらせ、平蔵谷出合でツェルトでの搬出訓練を行っているときに千葉、村田ＯＢが合流する。

８月７日　雨～曇

雨の弱まった間に別山往復の隊を出す。

８月８日　雨～曇～晴　雪訓
ガスっているために雪訓の装備を持って雄山に向かう。やや視界が効くようになったので内蔵助カールでザイルワークを行う。雪は非常に少ないが、初夏の涸沢や長次郎右股よりも傾斜が強く練習になる。１年のザイルワークはさらに練習が必要である。

８月９日　晴
・６峰Ｃフェース剱稜会ルート
　Ｌ本多　松本　京増
　今合宿の唯一の快晴に歓喜するが、１年は疲れが顔に出ている。剱稜会ルートは前に２パーティー、後ろに４パ２ーティーいて非常に混んでいるが高度感がありおもしろい。山靴で登っているのは学生くらいであった。計５ピッチ。どこまでも青い空へ向かって登れることに感謝。終了点から５・６のコルへは懸垂 50m。
・源次郎尾根　Ｌ深沢　佐藤　石川
　踏み跡沿いに高度を稼ぐ。２、３度細引きで石川を確保する。２峰の懸垂 30m。

８月 10 日　曇～晴
・６峰Ｂフェース京大ルート　Ｌ松本　深沢　佐藤　石川
　一番で取りつく。石川は終始高度感を怖がり、怯えている。３年はスピードが遅い。
・別山尾根～剱岳往復　Ｌ本多　京増
京増が足を傷めたため、剱岳往復とする。ピークからは６峰とコールのやり取りをする。

８月 10 日　雨～曇
　涙ながらに雨下山。頭上のロープウェイを無視して歩く。タンボ平らは樹林帯で非常に快適。

《夏合宿を振り返って》
　１年が山を体験することに重点を置いた初夏合宿と異なり、各課題の訓練という目的で合宿を行った。結果、まだまだ足りない課題として技術・体力的な面も多々浮き彫りになった。それとともに、メンバーとしての責任やあきらめ、ない忍耐力など、メンタル面の不足が露呈した者もいる。ただ山に行く、参加するのではなく、下界での山への取り組み（いわば技術・体力・精神面など目標を明確にして最大限努力することだが）が、極めて重要なことがあらためてわかっただろう。危険な遊びを楽しむために楽な道はない。様々な意味で『より高く、より困難に』であると思う。（本多記）

■初冬山行

１．槍ヶ岳デポ上げ及び大キレット越え
期日　10 月 31 日～11 月３日
メンバー　Ｌ本多　深沢
　10 月 31 日　晴　上高地～槍沢ヒュッテ先ＣＳ
新宿からの直通バスで早朝の上高地に到着。暗いなか下ろされてすることがない観光客を横目に出発する。45・の荷物も冬山成功のためなら重さを感じない。黙々と歩く。明神岳、前穂岳にはうっすら雪がついている。横尾では木を伐採し小屋をもう一戸建設している。槍沢に人がときおり顔を出す。槍の穂先は雪化粧。♪雪の山見りゃ　心が勇む。槍沢ヒュッテ先ＣＳにテントを張るが、渇水のため上流まで水を汲みにいく。

11 月１日　曇～雪　ＣＳ～槍ガ岳山荘
　槍沢は長居。歩いても地形が、景色が変わらない。坊主岩小屋手前あたりから雪が出てくる。さおらには風も強く明らかに天候が悪

化してきた。途中からピッケルを出し、ときおり耐風姿勢で風をやりすごす。荷物が大きいだけに風に振られてしまう。ようやく小屋に着いたときには本格的な吹雪になる。冬季小屋はまだ使えず、デポ代 1000 円を払いデポだけし、風を避けられる場所を選んでテントを張る。

11 月 2 日　曇　ＣＳ～南岳～北穂高岳～涸沢

寒い。温度計はマイナス８度を指している。テントを出ると風も強く、完全装備に身を固める。クラストした斜面はアイゼンが快適に決まる。とにかく西風が強く、風の弱い信州側を歩くときは飛騨側と別世界のようだ。ストラップが目に当たりコンタクトが外れそうになる。長谷川ピークで 50mザイルを出す。どこかで見た写真のようにザイルは宙に舞う。飛騨泣きは、雪がついているが鎖が出ているのでノーザイルで慎重に行く。北穂高岳直下の雪壁はアイゼンをきかせて直登。槍～北穂間では誰にも会わなかったが、北穂小屋のなかはシーズン最後のため若い従業員たちが楽しそうに盛り上がっている。誘惑されそうな深沢をうながし涸沢へと急ぐ。南稜の鎖場のあたりでアイゼンを脱ぐ。

11 月 3 日　雪～晴　涸沢～上高地

小雪のなか下山。午前５時は真っ暗である。涸沢から本谷橋間はところどころ崩壊が激しく、大きな岩雪崩のような跡になっており、ダケカンバがなぎ倒されている。本谷橋も板だけのものになっていた。人であふれる河童橋を渡り（なんと深沢は初めて）、アルペンホテルで入浴する。上高地温泉より近い。帰りも新宿直通のバスで帰郷する。

２．五竜岳隊

期日　10 月 31 日～11 月 2 日

メンバー　Ｌ松本　佐藤　京増

10 月 31 日　曇ときどき晴　遠見スキー場～西遠見山

５時半に神城駅に到着。駅で水を汲みタクシーで遠見スキー場に向かう。6 時ごろ着き、体操をしてから出発する。雪はまったくなし。スキー場への道は黒菱平からの登りのようでだらだらと続いている。背後から昇ってきた朝日が、紅葉をよりいっそう真紅に染め上げ、とても美しい。荷物は佐藤が 32・、京増が 34・。京増にとっては初めての重さなのでペースはゆっくりだった。佐藤は傷めた足の様子を見ながら歩いた。地蔵ノ頭からは急な登りが続いた。小遠見山手前ピークから小遠見山までは東側が崖になっている。中遠見山まではところどころ北側が切れている。中遠見山からは、はじめは急な階段を下り、ところどころ北側の切れている尾根を水平に歩き、急な階段を上り、大遠見山にいたる。西遠見山までは南側が切れていた。その先の天幕地に 14 時ごろ到着。

11 月 1 日　晴～あられ　ＣＳ～五竜山荘～唐松岳頂上山荘

5 時 35 分に撤収開始。6 時 15 分から体操をして出発する。白岳へははじめは細い尾根でピーク手前までが急な上り（夏道は落石の危険があったため、尾根上を歩いた）。五竜山荘に８時半に着き、京増のザックを空にして装備を入れ、五竜岳をアタックした。山頂には９時 50 分到着。五竜岳は雪がうっすらついている。山荘に戻って装備をザックにつめなおし出発。稜線上は風が強く、細かい霰も降り始めていたため、終始、お互い寒くないか、風でバランスを崩さないように注意しあった。天気が悪くなってきたので、このまま

のペースだと遅いと思い、大黒岳手前のコルで１本をとり、京増のポールを抜く。大黒岳の岩場を慎重の登上り下りして、牛首はしっかり設置された鎖を使い慎重に通過した。唐松岳頂上山頂には 15 時到着。天気が悪く、時間もなかったので無理せず、山荘の横の風当たりの弱いところで張ることにした。

11 月２日　晴　ＣＳ～八方池山荘～黒菱平

５時 35 分に撤収開始。６時 20 分に唐松岳をアタック出発する。唐松岳にもうっすら雪がついていた。７時 10 分に山荘に戻ってきて、荷物を背負って八方尾根を下り始めた。雪がないので夏道に沿って歩いた。扇雪渓にも雪はまったくなくガレの斜面が続いた。あと３週間で雪訓ができるようになるのか、少し心配になる。天気はとてもよく暑いくらい。黒菱平には 11 時５分到着。時間があったので、雪はないがスキー場の斜面でザイルワークの復習を１時間くらい行い、タクシーで白馬駅に。白馬八方温泉（駅から歩いて約 10 分。400 円）に入って「あぁ～いい湯だな」。そして松本駅の「どんぐり」にてビールで乾杯して「ぷは～」。スパゲティを食らって「うま～い。明太子スパで満足していた昨日の自分はいったい」と一瞬思ったが、まあとにかく大満足だった。

■初冬合宿

北アルプス唐松岳八方尾根

期日　11 月 21 日～26 日

メンバー　Ｌ本多　松本　深沢　佐藤　京増　石川

11 月 21 日　雪～地吹雪　第二リフト～八方池山荘

白馬駅に着くと大粒の雪が降り、積もっている。黒菱平方面にタクシーは行けないということなので、ゴンドラ駅へと向かう。スキー場は今日オープンらしいが視界が効かないほど降っている。ゴンドラと第二リフトに乗り、鎌池よりワカンを着け、体操して出発。夏道沿いは雪崩の危険がある為避け、尾根上を行く。出だしから胸上ラッセル。６人で回すが１年の２人は初めてのラッセルのため遅い。さらに新雪のために何度も雪を踏み固めないと足が前に出せない。うしろから中高年のパーティーが来たが遅く、訓練合宿なのでラッセルはほとんど自分たちで行った。ときには空荷ラッセルも交えた。やっと八方池山荘に着くとテントが２張ある。さらに先に進むが地吹雪になってきたので引き返して山荘横に設営する。夕方から除雪を行い、夜中も３回除雪する。

11 月 22 日　曇～雪　雪訓

昨夜からの雪は明け方にやむ。１年は撤収、パッキングが遅い。出発時はときおり晴れ間も見えるが徐々に悪くなっていく。相変わらずのラッセルである。今日中に扇雪渓までに行くのは無理と判断し、八方池付近に適度な斜面を見つけ雪訓することにする。天候が悪化してきたのでまず設営を行う。それから斜面に移動し、アイゼンを着け、歩行、ジッヘル、耐風姿勢、弱層テストなどを行う。風は強く、寒い。テント場近くの平坦地でビーコン、ゾンデによる雪崩捜索の練習を行う。積雪は３ｍのゾンデ棒を刺して 30㌢が雪上に出るほどだった。

11 月 23 日　風雪　ＣＳ～第２ケルン先

風雪が強いため待機する。扇雪渓まで上がれなければ、ここまでの積雪量を考えると登頂は難しいと判断し、登頂にこだわらず、目的どおり雪訓と生活技術の充実を第一に行う

ことを再確認する。待機したが風雪は弱まらず、先に進む行動は危険と判断し、先日通過してきた第２ケルン付近まで雪中行動し設営することにする。風雪のなかの撤収、パッキングであったが１年は多少慣れてきたようである。出発前には部歌とコールの練習をさせる。ラッセルで尾根を進み、第２ケルン先の夏期トイレ（冬は閉鎖）の隣に設営する。その後、風が強くなり、鈍い音とともにポールが折れてしまった。しかも２回。冬天のポールが折れる経験は初めてである。防風壁は雪がやわらかく合宿中、一度もつくれなかった。反省会は強風で声が聞き取りにくく、大声で怒鳴りつつ、ポールを押さえつつ行った。

11月24日　快晴～雪　雪訓

今合宿唯一の快晴となった。快適に撤収、パッキングして八方池雪訓場に向かう。稜線から望む鹿島槍、語竜、不帰、白馬は真っ白である。ザイルワーク５種、タイトロープ２種を行う。フィックス通過の練習は荷を背負い、稜線を戻りながら連続８ピッチ行う。下界での練習のため１年もスムーズにできている。第２ケルン先まで戻り、斜面に雪洞を掘ることにする。このころから雲が出て、雪が降ってくる。６人が楽に入る雪洞を１時間ほどでつくる。なかは広くつくったたけ寒かった。音を吸収するため声が聞き取りにくい。

11月25日　雪　雪訓

新雪のため天井がかなり下がっている。朝食後、酸欠でライターがつかなくなり、入口を掘って空気を入れる。夜中に雪で密閉されてしまっていた。京増が少し気持ち悪そうなので外に出す。少しよくなったといい中に入れるとまた気持ち悪くなって外に出ていく。人によって感じ方が違う。座って深呼吸させると直った。もう１日、雪訓に当てることにするが、本多が卒論の関係で下山するので雪訓場を鎌池上の斜面で行うことにする（翌日、どんな天候でも下山できる、雪訓に適した唯一の斜面）。雪訓場までは、ラッセルが続く。途中、コールと部歌の練習をさせる。下りの斜面で雪崩の危険を感じたため、間隔を開けて通過する。鎌池に着き、まずは設営。さすがに１年も慣れたようである。そしてリーダーを松本に交代し、本多は下山する。その後、ザイルワーク、雪崩捜索など、前日までの雪訓の総復習を行う。

11月26日　雪

下山。

《初冬合宿を振り返って》

予想はしていたが雪が多く、天気も悪かった。そのぶん、ラッセルを始めてとする体力強化や生活技術習得の面で非常にプラスになった。

今回は冬山合宿の北鎌尾根など、積雪期山行に向けて、通常、定着合宿としているところを、毎日撤収、重荷行動、設営を繰り返したため、１年生は一連の流れを体得でき、風雪のなかで最低限必要な素早い撤収、パッキングや設営を行うことができるようになった。

雪訓時のアイゼン歩行に関してはほぼマスターしているが、本番経験が乏しい。昨年と異なり、今回は新雪が降り続いたため、クラストした斜面がほとんどなく、十分な経験ができなかった。アイゼントレーニングなどを行うことはもちろんだが、本番経験が乏しいことを十分考慮して今後の積雪期山行に臨まなければならない。

またタイトロープ２種類（大阪式コンテを除く、クレバス式とガイド式）は状況、条件によって非常に役立ちもっと用いるべき技術であると感じ、そのためには今後あらたに積

極的に学習、練習を行い、身につけるべきである。雪崩捜索に関しては、ビーコン、ゾンデ（２点ゾンデ法）、スコップの３種の神器によりかなり短時間で捜索できる自信がつき、これも頻繁に訓練するとともに、平行して心肺蘇生法などの救急法も継続的に行っていく必要がある。

１年がこれからの積雪期山行に向けて、雪山、冬山の厳しさを感じるこができたことは大きな収穫になり、技術だけでなく、メンタル面でも非常にプラスになった。（本多記）

■冬山合宿

北鎌尾根～槍ヶ岳～横尾尾根

期日　12月22日～１月５日

メンバー　Ｌ本多　松本　深沢　佐藤　京増　石川

12月22日　晴～雪　七倉～湯俣～硫黄尾根取付下川原

タクシーが七倉のゲートの到着する。うっすらと雪がある程度だ。いつも通り体操し出発するが、やはり今合宿は何か特別な気持ちを持ってしまう。ワカンの必要なく湯俣に着く。このころから雪が降り始める。湯俣先吊橋までのトラバースは問題ない。吊橋は板が外れかけているので慎重に歩く。左岸を行くが氷化した斜面があり、トラバースせず懸垂25mで河原に立つ。その先の大高巻きになりそうな岩場は渡渉する。裸足でアウターを履き、一気に対岸の雪の河原まで渡り、ザックの上に乗り、タオルで足を拭く。切るような冷たさで顔が真剣になり歯を食いしばる。笑顔はない。雪が激しいので硫黄尾根取付の河原で幕営。

12月23日　曇～雪　ＣＳ～Ｐ２取付

「岳人」に載っていたトラバース手前で右岸に徒渉する。中東沢は石伝いに渡る。そのあと、残置フィックスのあった左岸を一か所トラバースしたのみで、大高巻きになりそうなところはすべて渡渉する。ここまでに６回。千天吊り橋は崩壊してしまってないが、その先を石伝いに渡れる。千天出合付近からは右岸を３回高巻く。雪、笹に足を取られやすい。左岸のＰ２取付には石伝いに渡るさすがにここまで来ると雪が深い。しかしあとのパーティーはトレースを追って素直に６回も徒渉するだろうか。

冬山合宿・独標から槍へ

12月24日　雪～晴　ＣＳ～Ｐ２の肩～偽Ｐ２

ワカンでラッセルしながらの急登。石川35・、京増27・。１年のペースが上がらない。木登り箇所の付近でアイゼンに履き替える。この急登は細引き10m、ザイ50m×２ピッチで通過。Ｐ２までの登りは雪と木に足を取られる。偽ＷＰ２直下に細引き10mを出す。

12月25日　快晴～雪　ＣＳ～４・５のコル

３・４のコル先のクーロワールは50m×１で左上し、コルに出る。さらに50m×１で主稜線に戻る。雪は非常に不安定。Ｐ３直下はもろい岩場になっており細引き10mを出す。ここで京増が落石を足に受けるが大事には至

らない。Ｐ４手前は小ピークが３つありすべてに50mザイルを出した。４・５のコルからはＰ８が大きく見えるが、Ｐ６、Ｐ７は重なって見えない。なお今日、単独行の方に抜かされたが、ＯＢの方のご友人であった。

12月26日　雪～曇　停滞

石川が喉の痛みと鼻水、倦怠感を訴える。朝から風が強く雪が舞っているため停滞とし、雪がやんでから松本、佐藤でルート工作に行く。

12月27日　曇～晴　ＣＳ～北鎌のコル

石川の風邪も多少よくなり36.5℃。風は強いが晴れ間も見える。Ｐ５のトラバースは天上沢側を細引き10m×2.50m×３で５・６のコルに達する。Ｐ６へは千丈沢側のバンド状の登りに50m×１でＰ６に達する。Ｐ７へは小ピークに細引き10m×1.50m×１で達し、Ｐ７の下りは懸垂25m、50m×１の急下降で北鎌のコル（７・８のコル）に着く。設営後、本多、深沢でフィックスをしに行く。

12月28日　晴　ＣＳ～独標基部

今日は風が強いが晴れ間も見える。Ｐ８へは10m×2.50m×２。その後、独標基部まではやせたピークが続き、50m×３を出す。基部で３パーティーに抜かれる。早めに幕営し、松本、佐藤でルート工作に行く。

12月29日　曇～風雪　ＣＳ～独標～14・15のコル

早朝はガスと強風のため待機し、日の出とともにガスが晴れたので出発する。今日から中間着にフリース、手にはシルクのインナーをする。左のルンゼ50m×１、リッジ50m×１、さらに雪稜を抜けて独標に立つ。ピークからはときおり雲の切れ間に念願の槍ヶ岳

冬山合宿・槍ヶ岳山頂

が見える。その後、小ピークはいやらしく、１年２人はタイトロープでつねに確保して歩く。北鎌平を目指すが、予想以上のいやらしさと、強まる風雪でなかなか着けない。Ｐ13に50m×１、10m×１を出す。頂上まであと一歩の14・15のコルで幕営する。

12月30日　風雪　停滞

昨日からの冬型の強まりで今日も地吹雪となっている。無理せず停滞にする。京増が熱っぽく、平熱35.1℃のところ、36.5℃ある。26日の石川同様、夜中も薬を飲ませる。

12月31日　風雪　ＣＳ～槍ヶ岳～肩の小屋～大喰岳

昨日同様、風雪だが明るくなるとともにやや弱まり、京増の熱もだいぶよくなったので槍ヶ岳を越えるべく出発する。北鎌平をすぎ、左のリッジから登る。下部は１年２人をタイトロープで確保するがやさしい登りである。最後のルンゼ状は50m×１、10m×１で頂上の祠横に出る。念願のピークだが視界はまったく効かず、寒い。他に２パーティがいた。下降は地震のためか曲がった危なっかしい梯子を下りてから懸垂２ピッチを経て肩小屋に着く。冬季小屋のデポを無事に回収し、ＯＢの方の差し入れを発見する。大晦日のためか小屋に人が多く、先を急ぐことにした。大喰

岳の平坦なピークの風下に設営する。風雪はかなり強まってきたが、槍ヶ岳を越えられたことによりよい年越しになった。

1月1日　風雪　停滞
今日も冬型で天気が悪い。風も強く行動できそうもないので停滞。寝正月。

1月2日　風雪　CS～天狗のコル岩峰下
昨日よりもやや天候がよいので出発。だが風はかなり強い。素早く横尾尾根に逃げたいのだが、京増のペースが遅い。目出帽をしていてもまつ毛、まぶたが凍りつく。視界も悪く、中岳のあたりは要注意である。横尾尾根との分岐はわかりにくく雪庇も発達している。偵察時にはあった道しるべもなくなっている。このころからいっそうホワイトアウトになり、岩以外は区別がつかない。ザイルで少し下降、雪崩の危険はないと判断し、主稜線から 50m×3ザイルを張る。その後のミックス箇所は1年2人をタイトロープで確保する。平坦地に出て、視界がいっこうによくならないので雪崩の危険のない、岩峰下に幕営する。佐藤、石川が右目の下を黒くしたのでヒルドイドを塗る。1年2人は連日の風雪行動の疲れで元気がない。

1月3日　風雪　停滞
朝から風雪が強く、視界はない。横尾の歯を越えるのは厳しいと判断し、停滞。14時すぎに視界がきき、ルート、方角、雪崩の危険を頭に入れる。

1月4日　雪～晴　CS～横尾の歯～P3
移動性高気圧が来ているが、朝は風雪がまだ強く、様子を見て出発する。雪崩危険箇所があるのだが、京増のペースは遅い。しばし休ませるが強風のため止まっていられないので、タイトロープで確保して進む。横尾の歯（P8～P7）は50m×1で通過。両側が切れ落ちている。このころから風も弱まる。P4の下り、P3のリッジは残置フィックスで慎重に行く。

1月5日　快晴　CS～横尾～釜トンネルゲート
7日ぶりに満点の星空の下撤収する。無風快晴。気持ちを表しているようで、清々しい気分になる。P3の下りはタイトロープで確保する。そのあとは尾根状を忠実に尾根の首までラッセルする。尾根の首から横尾までは5分ほど。ここでガチャ類をすべて外す。誰もいない静寂だがトレースはあった。雪べったりの前東、北尾根、明神岳を眺めながら歩く。沢筋から釜トンネルまでの道は陽光眩しく、想いが巡る。ところどころ凍りついた釜トンネルを抜け、ゲートで握手を交わし、合宿を終える。

《冬合宿を振り返って》
年間目標として掲げ、取り組んできた計画が終了した。既成のルートであるが、経験、技術のないなりにこだわりを持って、山域、ルートを決め、偵察、研究、訓練に取り組み、本番で計画どおりに遂行できた。単純にルートに挑むよりも時間、労力がかかるが、充実感、達成感が大きく、このような学生ならではともいえる計画からは多くのことを学ぶことができた。また一緒につくりあげ、助け合ってきた仲間はかけがえのないものだ。
今後は深沢以下が試行錯誤し、自分に正直に山に取り組んでほしい。実際やるのは自分たちなのだから、自信を持って、もちろん慎重に、道の決定をしてもらいたい。細かい反省点はたくさんある。今合宿の成功はもう過去のものとしてスタートしてほしい。

■二月合宿

八ヶ岳

期日　２月 10 日～16 日

メンバー）　Ｌ深沢、ＳＬ松本ＯＢ、佐藤ＯＢ、石川

《前半縦走》

２月 10 日　曇～晴　ピラタスロープウェイ山麓駅→麦草峠→白駒峠先

終始、単調な樹林帯の上り下りの繰り返しが続く。白駒峠先に平らな所を見つけ、テントを張る。

２月 11 日　雪　ＣＳ→天狗岳→夏沢峠

細かい雪が降っている中を行く。稜線に出ると風がかなり強くなる。天気が徐々に悪化してきたので、夏沢峠に幕営する。

２月 12 日　曇～雪　ＣＳ→硫黄岳→赤岳鉱泉ＢＣ

硫黄岳への登りの樹林帯は昨日の雪が積もっており、ラッセルを強いられる。赤岳鉱泉に入り、設営後、石川のザイルワークを見る。

《赤岳定着》

２月 13 日　曇～雪　ＢＣ→硫黄岳→横岳→ＢＣ

佐藤が風邪で熱があり、テントキーパーとする。周遊を行う。次第に天気が悪化してきたため、予定を変更し地蔵尾根を下降する。

２月 14 日　晴　ＢＣ→阿弥陀岳北稜→赤岳→ＢＣ

北稜の下部からラッセルをして進んでいく。阿弥陀岳から赤岳、地蔵尾根を経由してＢＣに戻る。

２月 15 日　晴　ＢＣ→赤岳主稜→赤岳北峰→ＢＣ

今合宿いちばんの好天で、風もない。８Ｐで赤岳北峰に着く。帰幕後、赤岳鉱泉に定着合宿していた一橋大、千葉大と合同でツェルト搬出訓練を行う。

２月 16 日　晴　ＢＣ→ジョウゴ沢→ＢＣ→美濃戸口

今日も快晴。ジョウゴ沢でトップロープを交え、アイスクライミングを行う。ＢＣに戻り、美濃戸口に下山する。

《最後に》

今回の合宿は新メンバーとして行う最初の合宿であった。実際には深沢、石川しか参加できず、松本、佐藤両氏に参加してもらった。これからは部員の少ない現状を憂えることなく、残されたメンバーでやっていく気持ちが大事だと思う。（深沢・記）

■春山合宿

南アルプス南部

期日　３月８日～９日

メンバー　Ｌ深沢　ＳＬ佐藤ＯＢ　石川

２月８日　曇～晴　田代入口→転付峠→二軒小屋

雪はほとんどない。転付峠への登りはきつい。二軒小屋の冬季開放小屋に入り、食事を作ろうとしたときに米がないことに気づき、全員愕然とする。夜、全員で話し合い、下山することに決定する。

２月９日　曇～雪～雨　ＣＳ→転付峠→田代入口

昨日下った転付峠からの道を登り返す。皆、心なしか元気がない。雪が降り始め、途中か

ら雨に変わる。我々の気持ちを象徴するような雨である。

《春山合宿を振り返って》

今回の合宿は初歩的なミスで敗退してしまった。このミスは単に米を忘れたということだけでなく、部全体の問題やメンバーの意識など根本的なことを徹底的に話し合う機会を与えたと思う。

話し合いの末、ふたたび入山しないことに決定した理由は、もう一度同じところに行くとどうしても山行に身が入らず、危険を招きやすい。そして一度失敗したということで、心理的に失敗できないというプレッシャーとなり、無理をして事故のもとになる。以上理由から再入山しないことに決めた。(深沢・記)

■個人山行

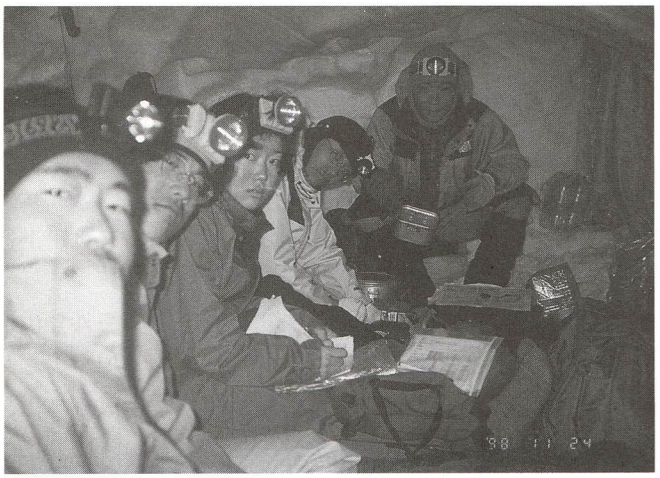
・奥多摩　大丹波川　真名井沢
5月13日　L深沢　佐藤　小林　森田
・丹沢　四十八瀬川　勘七の沢
5月23日　L本多　松本　京増　川元
・谷川岳　一の倉沢
5月23日　L斉藤OB　SL宇田川OB　深沢　千葉OB
・奥多摩　多摩川　水根沢
5月31日　L松本　小林　京増　石川　奥村
・奥多摩　笛吹川　鶏冠谷右俣
6月4日　L小林　深沢
・丹沢　玄倉川　小川谷廊下
L岡田OB　佐藤　深沢　高橋OB夫妻　大谷OB
・北アルプス　上ノ廊下川(増水のため敗退)
8月13日　L深沢　佐藤　石川
・巻畑山　登川　米子沢
8月23日　L深沢　佐藤　石川　京増
・奥秩父　小川山　フリークライミング
8月25日～28日　L松本　宇田川OB
・北海道　クワウンナイ川遡行&大雪山縦走(旭岳温泉～旭岳～層雲峡)
9月4日～8日　L深沢　松本　石川　京増
・奥多摩　笛吹川　釜ノ沢(雨天敗退)
9月26日　L本多　松本　深沢　京増　岡田OB　鈴木OG
・八ヶ岳　クライミング
2月28日～3月1日　L本多　深沢

■岩登りトレーニング

日和田山　3回
三ツ峠　3回
越沢バットレス　1回
パンプ2号　4回
船橋ロッキー　3回
大倉尾根

■その他

普通救命講習会
監督会議
天幕懇親会(奥多摩氷川キャンプ場)
初夏合宿・雪訓にて。
1年はジッヘルで顔に傷を負わないよう目出帽を使用。
独標にて。雲間から槍の穂先がのぞく。
14・15のコルにて。荒ぶる風のなかで設営。飛騨側からの風に右頬がやける。



初冬合宿・雪洞の中で（平成 10 年・1998）

2 月合宿・池山吊尾根～北岳（平成 10 年・1999）

池山吊尾根～北岳（平成 10 年・1999）

桜門山岳会

平成10年度の回顧

平成10年度理事長　山本　晃弘

大きな行事のある年度でもありませんでしたので、大過なくと言いたいところでありますが、現役学生の減少問題、日本山岳会青年部カンチェ遭難事故、根津会員の遭難等々、その他、大小様々な問題に追われ、またたく内に一年が経過してしまいました。

年度の始まりには、山岳部部室のある八幡山から、稲城市日大グラウンドへの移転問題がありました。これは都心よりかなり遠方になるということで、新入生の部への定着が懸念されましたが、大学当局体育会の意向に基づいて、環境のよい日大グラウンドに移転することとし、別途に都心での集会場所を考えておりました。しかし今年3月に入り入り、平山部長の御尽力より、理工学部に一室をお借りすることができることになり、学生、コーチの部活動に大いに利用させていただけることになり、ひとまず安堵した次第であります。

学生の部活動については若干の退部者も出て、冬合宿は6名で行われましたが、厳冬期の北鎌尾根末端より槍ヶ岳を越えて横尾尾根を下るという、厳しい風雪の中での成功は、最近の学生の冬山登山の中では、十分立派な山行であったと思います。またそこまでの一年間の部活動の努力を評価してやりたいと思っております。しかし乍ら、3名の卒業生が出ます平成11年度の山岳部活動は、監督、コーチ、リーダー、皆さんの大変な御協力を得なければなりません。特にチーフリーダー深沢君をはしりとして、部員のファイトに期待します。

日本山岳会学生部、青年部の海外登山に、最近は当会若年会員、学生の参加が少なく残念に思っておりましたが、昨年は日本山岳会青年部カンチェンジュンガ登山隊に、山本茂久氏が参加されました。その後登山隊遭難の一報が入りましたときは大変心配したものでありますが、幸いにも当人は二次アタック隊で難を免れ、救助活動にも奮闘され無事帰国されて、関係者一同本当に安堵いたしました。山本茂久氏にはヘッドコーチとして今後この貴重な経験を生かして、他大学との交流も含めて学生の指導を戴けるものときたいしております。なお登頂後、無念の遭難死された他大学隊員の御冥福を心からお祈り申し上げます。

ガッシャーブルムのシルバータートル隊に参加され無事登頂を果たし、他の当会隊員諸氏と無事帰国された喜びも束の間、巻機山で遭難死された根津会員の事故は、経験豊富な中高年OB会員の比較的容易な山での事故ということで、我々会員を大変驚かせもしました。深い悲しみの中、我々は単独行登山、高齢化と反射神経、大きな登山の後のリアクション等々多くの問題を考えさせられました。故人の冥福を祈ると共に、根津会員の死を無駄にせぬよう、尚一層高齢化して参りました会員諸氏の安全登山を願うものであります。

発行の送れていました住所録については、鈴木(快)会員及び関係皆様の御協力によって2月末に完成、過日総会案内と同封、発送させていただきました。

引き続き鈴木会員には大変御苦労をおかけ致しますが、会報 33 号の次年度内発行に向けて作業を進めていただいております。関係各位には重ねて御協力の程お願い申し上げます。

1995 年のエベレスト北東稜登山のような大きな行事のあとは、会の活動が比較的に停滞しがちであると言われておりますが、次の時代への繋ぎ役として理事長を引き受けましてから 3 年、はたしてそのことがどれだけできたか考えますと忸怩たるものがあります。しかし乍ら何とか在任中、学生の遭難事故もなく次代の人へとバトンタッチができるようであり、ホッとしているところであります。平成 11 年度は新会長、新理事長のもとに発足する新しい理事会に大いなる期待を寄せるものであります。

在任中は多くの先輩、後輩の皆様の暖かい御理解と御支援によって何とか任期 3 年を過させていただきました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

特に理事会活動を通じては、多くの後輩諸氏に御苦労をかけましたが、この間皆様の素晴らしい人柄に触れ乍らやって来ましたこと、そしてまた力不足の理事長を支えていただきましたこと、あわせて御礼申し上げ、今後とも終生変わらぬ御交誼の程お願い申し上げます。

終わりになりましたが、会員皆様の御健勝を祈念して回顧とご挨拶を終わります。

日本大学山岳部

平成11年度　（1999年4月～2000年3月）

部　長　　平山　善吉
監　督　　神崎　忠男
コーチ　　山本　茂久
主　将　　深沢　智徳

部　員　　4年　CL深沢智徳
　　3年　SL小林州行
　　2年　石川重樹、京増朋子
　　1年　加納　鳥居創太　原澤修

部室　　〒101-0062
東京都千代田区神田駿河台1-18-1
日本大学理工学部内平山研究室

平成11年度活動報告

チーフリーダー　深沢　智徳

平成11年度の冬山合宿後、4年生3名が引退し、平成12年度の新体制は4名でスタートした。チーフリーダーは4年の深沢、サブリーダーは3年の小林が務め、1年生は石川、京増の2名、計4人体制である。

年間の活動目標として、冬山合宿での白山、そしてその延長線として海外登山、特にメラ・ピークの登頂を掲げた。結果から先に言ってしまえば、メラ・ピークは新1年生を含めたメンバーで登頂を果たすことができた。

だが、冬山合宿での白山という目標は果たせなかった。このことは無念の一言に尽きる。

私にとって白山は、私が1年生時に冬山合宿として登頂した思い入れの深い山で、私の心には、チーフリーダーとして登りたいという思いがいつしか沸いていた。そしてもう一つの目標、メラ・ピークについては調べるにつれ、どちらの山もまず技術的なものより、体力が要求される山だという認識を強く持った。

この共通点をもとに、私は次の2つの目標を掲げ、目標を達成できると考えた。まず年間の合宿を通して体力、技術向上に励み、国内での総仕上げという位置づけで冬山合宿を白山で行う。そして、その延長線上としてメラ・ピーク登頂を目指す。

そのような青写真を描き、新体制をスタートさせた。

だが新体制に移行し、いざ合宿を行うにあたり、問題はいくつかあった。実際に合宿に参加できるメンバーは2名しかおらず、OBの力を借りて合宿を行わざるをえなかった。そのため2月合宿、春山合宿にはOBに参加してもらい、合宿を行った。

2月合宿は八ヶ岳で、北八ヶ岳からの縦走と赤岳鉱泉定着での登攀、アイスクライミングを行った。この合宿では上級生となるメンバーの登攀技術の向上を第一に考えた。

春山合宿は南アルプス縦走を計画したが、初歩的なミスで食料の米を忘れ、わずか2日で終わってしまった。その後、再入山するかどうかで部員で話し合った末、再入山しないことにした。初歩的なミスで、上級生の体力、技術向上にとって大事な時期を潰してしまっ

たことは、今でも非常に悔やまれる。しかし結果として、部員全員で問題を話し合ったことは、その後の我々にとってプラスになったのではないかと思っている。

その後、新人勧誘に至るのだが、今年はネパールで海外登山をすることを全面に掲げ、その結果、３名が入部した。その後、初夏合宿後に１名が入部したが、夏山合宿を経て、辞めてしまい、最終的に生物資源科学部（旧農獣医学部）の３名が残った。

私にとって、また部にとっても、部員の大量確保、入部した１年生を維持していくことは果たさなければならない目標であった。そのためには、技術的なレベルの低下も厭わずに部員を残そうとすることも一つの方法であるが、今年、新１年生を含めた海外登山を目標にしている我々にとって、その両立は不可能であった。

その板挟みの中で我々は一つの結論を下した。それは海外登山を目標とするにあたり、従来と同様の強化体制を選択することであった。初夏、夏山、初冬と合宿を行い、冬山合宿を一つの頂点と定め、強化していく体制である。

五月山行は冬山合宿を考えた結果、白山に行くことにし、新１年生の１名を連れていった。この山行ではＯＢは参加せず、新１年生を連れていくことで、いちばん初歩的なルートになったが、概念把握という目的は果たせたと思う。

初夏合宿は、前述した方針をもとに、従来と同様の内容を行った。今年は横尾定着とし、体力強化色の強い内容とした。後半分散は、上級生の登攀力向上のための涸沢定着の登攀隊と、１年生と槍ヶ岳に行く隊に分かれて行った。

夏山合宿は、３年ぶりの内蔵助定着で行った。久しぶりの内蔵助ということもあり、多くのＯＢの方々が参加した。しかし、合宿中に２年生が２人ともケガをする事態が起き、満足する結果を得られずに下山した。後半分散もそのことを受けて計画を変更した。また今後の活動方針を再検討し、白山、メラ・ピークのどちらも目指すのではなく、今後はメラ・ピークに目標を絞っていくことにし、そのために合宿を組んでいくことに方針を変更した。

９月には、学生部が中心の中国雪宝頂登山隊に、我が部から松本ＯＢと２年生の石川が参加した。松本ＯＢが登頂し、登山隊は無事帰国した。

秋山山行は、白山と静岡・城山でのクライミングの２隊に分かれて行った。

初冬合宿は、一昨年、昨年同様、八方尾根で行った。当初の計画では、五竜岳を経て、遠見尾根から下山する計画であったが、大量降雪のために実行できなかった。

だが、今年も昨年同様、大量降雪の中でのラッセル、除雪、生活技術等、冬山を前に十分な訓練ができた。ただ、例年、同時期に行っていた富士山合宿のようにアイゼンでの歩行訓練ができなかったので、来年以降は最終目標に合わせ、初冬合宿を八方尾根か富士山か、その特色を考えつつ、工夫して選んでいってはどうかと思う。

そして冬山合宿であるが、方針変換により、あくまでも訓練という位置づけで行った。
そのため、南アルプスの長期縦走を計画。また部員の都合もあって、参加者が深沢、石川、１年生３名という構成であったため、千葉ＯＢに参加いただいた。

合宿は天候をはじめ、かなり恵まれた山行だった。雪が少ないのは予想できたが、終始トレースがあり、3000mの稜線上でも風がない日がほとんどであったのは予想外だった。そのため日程を１日短縮して合宿を終えた。

冬山合宿後は、ただひたすらメラ・ピーク合宿の準備に邁進した。海外登山の経験豊富なコーチ、ＯＢの方々の協力もあり、準備は着実に進んだ。そして２月 15 日。我が登山隊は日本を発ち、３月５日、我々はあこがれのメラ・ピークの山頂に立つことができた。このことは、メンバー一人ひとりの胸に一生涯忘れ得ぬ思い出になったであろう。ここであらためて、募金していただいた多くの方々、協力していただいた多くの方々に感謝の意を伝えたい。今度は私がこの感謝の思いを胸に、今後の部の活動に微力ながらも協力していきたい。

最後になったが、私がこの１年３カ月間をチーフリーダーの役割をやり遂げ、なおかつメラ・ピークを登頂できたことは、部長、監督、コーチをはじめとするＯＢ、ＯＧの諸先輩方のご支援のお陰であると思う。本当に感謝の言葉は尽きない。

そして私についてきて、支えてくれたメンバー一人ひとりにも感謝したい。本当にありがとうございました。

平成 11 年度コーチ会報告

ヘッドコーチ　山本　茂久

2 人いた 4 年生が抜け、2 年の時から CL になることを約束されていた深沢がとうとう CL の座に就いて始まった今年度は、やや苦しいスタートを切った。4 年 1 人、3 年 1 人、2 年 2 人、1 年 3 人という人数構成は悪くないものの、ベストの状態で合宿に入れる上級生が少なく、1 年を通してメンバー的に苦しい計画が多かった。しかし、このような状況の中で、深沢が春山合宿でのメラピーク登山を打ち出したことは素晴らしいことだった。実際、強力とは言い難いリーダー会にとって海外の山を目指すことが大きな負担になり、うまくいかないのでは、という疑問があり、当初コーチ会でもこの計画の是非をめぐって意見が分かれることもあった。しかし、深沢自身の「是非、自分たちだけで行きたい」という強い意思を買って、学生主体で行くという計画を後押しすることにしたのだった。

各合宿は全てメラピークを念頭に置き、基本的な内容の計画を行なったが、あまりうまくいかないことが多かった。1 年生は非常に意欲的で、与えられた範囲の中で良く頑張っているのだけれど、2 年生以上のメンバーの間で意識がうまく噛合っていないように感じることが多かった。夏から冬にかけてのこのような状況から、結局、メラピークへ神崎監督、松本コーチの参加をお願いすることにした。コーチ会の中の若いメンバー達からの叱咤激励があったからか、冬山の前あたりからやっとメラピークに向けての意識の高まりのようなものが感じられるようになった。その結果、冬山を完璧にこなし、良い雰囲気で出発することが出来た。面倒くさく、大変なことの積み重ねが、その分だけ素晴らしい経験になることを実感したと思う。

今回の計画は、当初意図した「学生主体」という方向からは外れてしまったかもしれない。常々「コーチ会とは単に遭難救助の組織である」と考え、学生の計画の方向性に対して首を挟むべきではないと思っていたのだが、逆の方向に進んでしまったのが残念だった。学生がやりたいことと、出来ることのぎりぎりの接点を確実に把握することがコーチ会の使命だと思う。今後、学生、コーチお互いが納得できる計画を出す為には、予防も含めた遭難救助隊としてのコーチ会の実力をもっと上げる必要があるだろう。

記　録

■5月山行

白山縦走

期　　日　5月1日～2日
メンバー　L深沢、SL石川、鳥居

5月1日　晴　別当出合→室堂
急登の連続で、弥陀ヶ原へ至る。弥陀ヶ原は広く、悪天だといかにも迷いそうだ。室堂に着くと、神社は雪に埋まっていた。室堂でテントを張る。

5月2日　晴　室堂→御前峰→別当出合
山頂への登りは問題なさそうなので鳥居も連れて行く。その後、室堂に戻り、別当出合に下山する。

《5月山行を振り返って》

春山合宿の敗退以後、我々メンバーは多くの時間をさき、反省はもちろんのこと、様々な問題点、今後の方針などを話し合った。今回の山行は、新メンバーだけの力で、そして冬山合宿での目標である白山へ向かうという目的をもって計画した。その結果、もっともノーマルなルートになったが、新一年生の鳥居を加えることで、上級生には指導的役割も同時に問われ、今後のメンバーシップ育成には役立つ結果になった。そして何より一年生には山の楽しさを知ってもらいたいという思いがあり、その点では十分目的は果たせたのではないかと思っている。

（深沢・記）

■初夏合宿

穂高連峰・横尾定着

期　　日　6月18日～21日
メンバー　L深沢、SL小林、石川、京増、鳥居、原澤、加納

≪定着合宿≫

6月18日　雨　上高地→横尾BC
小雨のなか、横尾に向かう。天幕設営後、深沢と石川で雪訓場の偵察へ行く。

6月19日　雨～曇　BC→蝶ヶ岳→BC
朝、雨が降っていたが、しばらく待機するとやんでくる。蝶ヶ岳を往復してBCに戻る。山頂はガスに包まれ、何も見えなかった。

6月20日　雨～晴　雪渓訓練
朝、涸沢方面は濃いガスに覆われ、BCでも時々雨が降るので出発を遅らせる。涸沢まで行く間に晴れ間が出てくる。雪訓中は快晴。歩行訓練は無難に終わるが、ジッヘルが皆できず、時間がかかる。グリセードはやり方を教え、涸沢に帰る途中に交えながら行う。

6月21日　晴　BC→奥穂高岳→BC
白出しのコルへの雪渓の登りで1年生が遅れる。山頂についた時にはガスが出始める。白出しのコルから涸沢まで直下降とグリセードの訓練をしながら下る。

≪後半分散合宿≫

1．横尾→槍ヶ岳→上高地

期　　日　6月22日　晴～曇
メンバー　L深沢、SL石川、原澤、加納、鳥居

加納は体調が悪いため、テントキーパーとする。横尾から槍ヶ岳を往復する。1年生は雪渓になると、途端にペースが落ちる。槍沢

の雪渓の下りでは、1年生も問題なく直下降、グリセードをこなしている。横尾に着き、急いで撤収し、上高地に下山する。

2．涸沢定着登攀

期　　日　6月22日～24日

メンバー　L小林　SL佐藤OB　京増

6月22日　晴～曇　横尾→涸沢→北穂東稜→涸沢

横尾から涸沢へ移動する。京増は体調が悪いためテントキーパーとする。小林と佐藤で北穂東稜の登攀へ行く。

6月23日　晴→曇　涸沢→前穂北尾根→涸沢

Ⅳ峰の登りは地震の影響か、かなり崩れていてルーファイに苦労する。その先もがれがれである。奥穂を通り、白出しのコルから雪渓を下りて、涸沢に着く。

6月24日　雨　涸沢→上高地

雨の中、上高地に下山する。

《初夏合宿を振り返って》

今回の初夏合宿は、今年度の目標である海外登山へ向けての体力強化に重点を置いて行った。3年ぶりの横尾での定着もその一環であり、新1年生に対しても体力的に厳しさを要求した合宿だった。ただし厳しさのなかにも、1年生に山の楽しさを伝えようと、後半は槍ヶ岳往復を加えた形式をとった。また通常の雪上訓練中心の定着合宿のみでは、上級生の登攀力向上の要素が足りないため、後半分散として、上級生で涸沢定着の分散登攀を行った。最初の2日雨に降られたものの、梅雨時にもかかわらず、それ以降は晴天に恵まれ、全行程を消化できたことはよかった。期間は短かったが、内容の濃い合宿ができたと思う。1年生は、上級生に負けない貪欲さがあり、頑張っていたのが印象深かった。

（深沢・記）

■夏山合宿

北アルプス立山東面内蔵助谷左俣定着

期　　日　7月30日～8月7日

メンバー　L深沢、SL小林、石川、京増、原澤、加納、鳥居、山口
OB宇田川、村田、千葉、松本、OB佐藤

≪前半分散合宿≫

1．大日隊

期　　日　7月30日～8月1日

メンバー　L小林、SL京増、加納、鳥居

7月30日　晴　称名平→大日小屋

ひたすら急登。加納も鳥居も交互にばてる。日射が強かったので、水を大量に飲ませる。18時を過ぎても着かないので、加納の荷を抜く。

7月31日　晴　大日小屋→奥大日岳→雷鳥沢

朝から加納が下痢ぎみ。ゆっくりではあるが歩けるので、薬を飲ませ行動する。早く着いたので1年生と京増のザイルワークを見る。

8月1日　晴　CS→別山乗越→内蔵助BC

内蔵助カールまでは1年生も立ち止まることなく順調に進む。ゴルジュの下降に時間がかかった。

2．歩荷隊

期　　日　7月31日～8月1日

メンバー　L深沢、SL石川、原澤、山口
OB宇田川、佐藤

7月31日　晴　室堂→内蔵助山荘

深沢、石川は65kg、１年生は37kg。ボッカ道を行き、内蔵助山荘へ行く。宇田川ＯＢ、佐藤OBは先に行き、ゴルジュの偵察に向かう。ゴルジュは問題なく、内蔵助に定着することに決める。

8月1日　晴　内蔵助山荘→内蔵助BC

ゴルジュのフィックス工作を深沢、石川、宇田川OBで行う。フィックス工作中に石川が転び、足首を痛める。カールで大日隊と合流し、ゴルジュを下降する。

≪定着合宿≫

8月2日　晴　天幕整理

小林と宇田川OBで三本歯のコルへの偵察に行く。その他のメンバーは天幕整理を行う。

8月3日　晴　雪渓訓練

内蔵助カールで雪訓。カールまでダッシュする。雪訓では１年の歩行、ジッヘル、グリセードの訓練を行い、京増のザイルワークを見る。ケガをした石川はテントキーパーとする。

8月4日　晴　雪渓訓練

石川は、佐藤OBとともに室堂に下山する。雪訓では１年生のザイルワークを見る。できる者とできない者とがはっきり分かれる。

8月5日　曇　分散登攀

①．枝稜右（Ｌ深沢、京増、鳥居、加納、山口、宇田川OB）

②．中央山稜主稜（Ｌ小林、原澤、松本OB）

それぞれ一尾根、二尾根登攀の予定で出発するが、稜線近くにガスが出ているため、予定を変更する。とも時間がかかりすぎて、富士ノ折立の到着が遅れる。内蔵助カールで京増がグリセードに失敗し、腕を打撲するが、ＢＣまで下りてくる。

8月6日　晴～雨～晴　分散登攀

分散登攀２日目は予定を変更し、全員で雄山往復を行う。京増は宇田川OBの付き添いで室堂に下山する。最低コルまではダッシュで行き、雄山までの道も飛ばして行く。雄山に着くころには、あたりがガスで覆われる。雨が降る中、深沢と小林でゴルジュのフィックスの回収を行う。

8月7日　晴　下山

計画より１日早い下山。道はヤブが多く歩きにくい。全員重荷で進みが遅い。最後のダムへの登りで、山口がバテるが一気に歩かせる。

≪後半分散≫

北アルプス縦走(黒部ダム～白馬岳～親不知)

期　　日　8月16日～23日

メンバー　Ｌ深沢、ＳＬ小林、京増、原澤、加納

8月16日　曇　黒部ダム→内蔵助平→真砂沢

扇沢ではかなり雨が降っていたが、トロリーバスでダムに出ると雨はやんでいた。内蔵助平手前で道を間違え、約１時間をロスしてしまう。

8月17日　雨～曇～晴　ＣＳ→仙人池→阿曽原温泉

仙人池までは急登だが、いいペースで行く。阿曽原温泉に着くと、温泉に入り汗を流す。

8月18日　晴　ＣＳ→欅平→祖母谷温泉

水平歩道は文字通り平らで快調に進む。途中、何カ所か岩をくりぬいた道があり、スリルを味わう。欅平で下界を感じ、さらに先の

祖母谷温泉へ向かう。

8月19日　晴　停滞
京増の体調が悪く、停滞とする。

8月20日　晴～雨　ＣＳ→不帰岳避難小屋
樹林帯の急登もそれほどでもなく、随分早く避難小屋に着いたが、京増の体調を完全に回復させるため、行動を打ち切る。

8月21日　晴～曇　ＣＳ→白馬岳→雪倉岳避難小屋
予定より先に延ばし、雪倉岳避難小屋へ行くことにする。白馬岳に近づくころからガスが出始め、頂上に着いても眺めはきかない。雪倉岳避難小屋は水場がないとのことだったので、水袋に水を入れて持って行ったが、水場があった。

8月22日　雨～曇　ＣＳ→朝日岳→栂海山荘
長い行動予定なので早く出発。小雨降る中、行動する。稜線上は風が強い。朝日岳に着いたものの、ガスの中。犬ヶ岳手前で雨が止んでくる。これで日程を1日短縮することができた。

8月23日　晴　ＣＳ→白鳥山→親不知
白鳥山までは上り下りが続く。白鳥山山頂からの日本海の眺めはすばらしい。その後、日本海を目指して下る。親不知に着き、そのまま海岸に下りて、山行を終える。

《夏合宿を振り返って》
この夏山合宿は、冬山合宿、メラ・ピーク合宿へ向けて重要な意味を持つ合宿だった。その意識の徹底が不十分だったのか、２年生が２人ともケガをしてしまい、分散登攀の内容に変更を迫まられ、かつ１日早く下山することになった。今回のケガは、単なる個人的な技術不足の一言では終わらないと思う。その原因を我々はより深く掘り下げ、反省し、今後の対策を含めて話し合った。冬山合宿、メラ・ピーク合宿までに残された時間は少ない。今回の現状を踏まえ、我々は今後の方針を再構築するにいたった。後半分散も計画を変更し、長期の縦走を行った。

（深沢・記）

■秋山山行

1．白山
期　　日　10月30日～11月1日
メンバー　Ｌ深沢、ＳＬ京増、加納、原澤

10月30日　晴　平瀬→大白川避難小屋
林道のアスファルトをプラブーツで歩くので、足が痛い。途中、白山の上部が白く見える。どうやら雪があるようだ。大白川避難小屋の脇にテントを張る。

10月31日　晴　ＣＳ→室堂→御前峰→南竜ヶ馬場
大倉尾根の急登をひたすら登る。主稜線分岐の手前から雪が出てくる。室堂に着くと人の多さに驚く。山頂にも人が多い。南竜ヶ馬場へ下ると雪がなくなり、夏道となる。

11月1日　雨時々曇　ＣＳ→御舎利山→市ノ瀬
夜から雨が降りだし、風も強い。視界も悪く、出発を遅らせる。千振尾根をひたすら下り、市ノ瀬に着く。濡れた体をすぐ近くの白山温泉で温める。

2．静岡・城山
期　日　10月30日～31日
メンバー　Ｌ小林、ＳＬ石川、鳥居
　　ＯＢ千葉、松本
　２日間、城山においてフリークライミングを行う。

■初冬合宿

北アルプス唐松岳八方尾根
期　　日　11月27日～12月２日
メンバー　Ｌ深沢、ＳＬ小林、石川、鳥居、
　　原澤、加納、ＯＢ斎藤、松本

11月27日　晴～曇　黒菱平手前→八方池ＢＣ
　天気は晴れだが、冷たい風が吹き、とても寒い。ＢＣまで１、２年生をせかして登る。到着後、小林と石川で雪訓場へ偵察に行く。その他のメンバーは、ＢＣ近くでビーコン捜索訓練を行う。

11月28日　雪　停滞
西高東低の冬型の気圧配置が決まり、昨晩から雪が降り続く。一日中雪が降り停滞とする。除雪を４回、夜にも１回行う。

11月29日　雪　ＢＣ→下樺尾根分岐→八方池雪訓場→ＢＣ
　今日も雪が降っているが、昨日より小降りである。大量に積もった雪をラッセルして進む。下樺尾根分岐まで行くが、扇雪渓まで行き、雪訓するのは時間的に無理と判断し、ＢＣへ向かう。八方池の近くの斜面で雪訓。歩行訓練を行う。
　11月30日　雪　ＢＣ→扇雪渓ＣＳ
　ＢＣを撤収し、扇雪渓へ向かう。重荷での深い雪のラッセルに苦戦する。扇雪渓の手前にテントを張る。撤収も設営も遅い。天気が悪く、雪訓は明日行うことにする。上級生で石川のザイルワークを見る。

12月１日　晴～曇　ＣＳ→丸山ケルン手前2361→八方池ＣＳ　雪渓訓練
　テントを撤収し、ラッセル訓練を兼ねて丸山ケルンを目指す。時間が厳しくなったので、２３６１地点まで行き、八方池へ下降する。八方池にテントを張り、近くの斜面で雪訓を行う。１年と２年のザイルワークを見る。

12月２日　雪　ＣＳ→黒菱平で雪訓→下山
連日の雪も風でだいぶ飛ばされ、それほどのラッセルを強いられず進む。黒菱平のリフト乗り場の付近で雪訓を行う。ビーコン捜索訓練と１年のザイルワークを見る。終了後、リフトとゴンドラを乗り継ぎ、下山する。

《初冬合宿を振り返って》
　今回の初冬合宿は、大量降雪の影響があり、計画していた五竜岳、遠見尾根への縦走はできなかったが、冬山を前に貴重な訓練ができた。八方尾根で合宿を行って今回で３年目だが、昨年、今年と大量降雪の中で行ってみて、八方尾根はプレ冬山の訓練の場として貴重であると思う。今回もラッセル、除雪、生活技術等、冬山を前にして十分な訓練ができた。ただ、富士山合宿でのようなアイゼンでの歩行訓練ができなかったことが悔やまれる。
（深沢・記）

■冬山合宿

南アルプス北部縦走

期　　日　12月25日～12月30日

メンバー　Ｌ深沢、ＳＬ石川、鳥居、原澤、加納、ＯＢ千葉

12月25日　曇時々晴　戸台→北沢峠→仙丈3合目

川原をもくもくと歩き、八丁坂を登り、北沢峠へ。さらに先へ進み、仙丈岳を目指す。三合目でテントを張る。雪は少ない。

12月26日　晴～雪　ＣＳ→仙丈岳→2755手前

朝から晴れで風もなかったが、小仙丈岳の手前からガスに包まれ、風も強くなる。仙丈岳周辺の細い稜線は雪が少なく、ザイルなしで行ける。大仙丈岳から樹林帯まで、強風の中、耐風姿勢を交えながら進む。石川と原澤が顔に軽い凍傷を負う。

12月27日　晴　ＣＳ→野呂川越→2699手前

ラッセルするほど雪はなく、つい最近のトレースが残っている。野呂川越から明日のためにさらに先に行く。森林限界の手前の2699手前にて幕営。

12月28日　晴　ＣＳ→三峰岳→新蛇抜山手前コルＣＳ

稜線に出ても風は強くない。三峰岳手前の小岩峰は、問題なく通過できる。熊熊ノ平から先に行き、新蛇抜山手前のコルでテントを張る。

12月29日　晴　ＣＳ→塩見岳→塩見小屋

北荒川岳周辺でルートファインディングに手間取る。塩見岳の稜線は風がまったくなく、暑いくらいだ。塩見岳の下りで岩がいやらしく１ＰＦｉｘする。

12月30日　晴　ＣＳ→三伏峠→塩川

塩見小屋からはしっかりしたトレースがついている。下山なので全員足取りも軽い。塩川小屋に着き、小屋の人に無線でタクシーを呼んでもらう。

《冬山合宿を振り返って》

今回の冬山合宿は、天候をはじめとして多くのことに恵まれた山行だった。雪が少ないのは予想できたが、終始トレースがあり、3000ｍの稜線上でも風がない日がほとんどであったのは意外であった。そのため本当の冬山らしい日は２日目だけで、その日の行動中に顔に凍傷を負うなど、冬山が厳しいときに技術が対応しきれてないのが露呈された。

今回、千葉ＯＢに参加いただいたが、メラ・ピークへ行くメンバーが力を合わせて、長い縦走をやれたことは、メラ・ピーク合宿への弾みとなったであろう。本来の目標である白山を変更しての南アルプス縦走であったが、２月からのメラ・ピーク合宿に向けての最後の総仕上げとして意味あるものになったと思う。

（深沢・記）

■メラ・ピーク合宿

ネパール・クーンブ山群
メラ・ピーク（6476m）

期　　日 2000年2月15日～3月14日
《隊員構成》
深沢智徳（23歳）法学部政経学科４年
石川重樹（22歳）法学部政経学科３年
加納崇史（20歳）生物資源学部２年
原澤　修（19歳）生物資源学部１年
鳥居創太（19歳）生物資源学部１年
松本達彦（24歳）法学部政経学科・平成10年卒業
神崎忠男（59歳）日本大学山岳部監督

行動記録

２月15日　晴　成田→バンコク
平山部長をはじめ、多くの方々に見送られて、出発。成田からタイ航空でバンコクへ。空港近くのラマガーデンホテルにて泊。バンコクは日本の夏のような蒸し暑さだ。

２月16日　晴　バンコク→カトマンズ（1300m）
同じくタイ航空でカトマンズへ。空港に着くと、荷物を運んでお金をもらおうとする子どもたちに取り囲まれる。その子どもたちを追い払い、ヒマラヤ観光の車に乗り込み、カトマンズ・ゲストハウスに向かう。到着後、タメルにて装備、食料、医薬品の買い出しを行う。夜はヒマラヤ観光の井本ＯＢ、今回同行するシェルパたちと会い、話を聞く。今年は雪が多く、ザトルワラ峠にも雪があるのでは、とのこと。

２月17日　晴　カトマンズ（1300m）→ルクラ（2800m）
朝、カトマンズからプロペラ機でルクラに向かう。ルクラに着くと、周りの山々が迫り、いよいよ来たなという気持ちになる。ルクラでは町を見て歩いたりとゆっくりと過ごす。

２月18日　晴→雪　ルクラ（2800m）8:25発→ﾄｳｯﾃﾞｨﾝﾏ（3200m）11:25着→チュタンガ（3400m）13:45着
ザトルワラ峠の雪の状態を見るための偵察１日目である。ルクラを出発し、ゆっくり進むが、登りが急でしんどい。トゥッディンマで昼食とし２時間ほど過ごす。トゥッディンマとチュタンガ（13時45分着）には人家はない。細かい雪が昼頃から降り始める。チュタンガ到着後、１時間ほど順化活動を行う。

２月19日　晴→雪　チュタンガ（3400m）8:05発→イヤ・カルカ（4000m）10:10着10:30発→ザトルワラ峠手前（4260m）13:20着13:30発→チュタンガ（3400m）14:30着
偵察２日目。標高4000m台に全員到達したが、目立った異常はない。イヤ・カルカからプラ靴、アイゼンを装着し、4260mまで行き、雪の状態をシェルパとともに見る。現時点での雪の状態からポーターの通行は無理との判断。昼からまた雪。ルクラに着いてから毎日同じ天候だ。

２月20日　晴→雪　チュタンガ（3400m）8:20発→ルクラ（2800m）10：10着
今日で偵察は終了。所々雪がついており滑りやすい。ルクラに到着後、井本ＯＢと電話で偵察結果と今後の予定について話す。３時頃からまた雪。早く春になってほしいものだ。

２月21日　晴　ルクラ（2800m）滞在　神崎監督合流

神崎監督が朝、飛行機でルクラに到着。朝食後、メンバー全員で今後の予定を話し合う。その結果、ザトルワラ峠の通過はＦＩＸすることで対応し、メラ・ピークへ行くことが決定する。

２月 22 日　晴→曇　０℃→12℃→０℃
ルクラ（2800m）12:30 発→チュタンガ（3400m）15：35 着

今日からメラ・ピークへのキャラバンが始まった。シェルパ、コック、キッチンボーイ、ポーターを合わせて、30 人以上の大部隊である。今回はゾッキョは使わずすべて人力である。我々は軽い荷でゆっくり行く。チュタンガは寒い。

２月 23 日　晴　　－２℃→17℃→３℃
チュタンガ（3400m）８：30 発→イヤ・カルカ（4000m）11：15 着

今日もゆっくりなペースで歩く。イヤ・カルカは朝の寒さとは程遠い暖かさだ。一度、4200m地点まで皆、行っているので、監督も含め高度障害を訴える者はいない。２時 30 分から順化活動で 4300m地点まで行って戻る。シェルパたちは峠へのルートをＦＩＸして帰って来る。

２月 24 日　晴　－２℃→－１℃→－４℃
イヤ・カルカ（4000m）9:15 発→ザトルワラ峠手前稜線コル 12:00 着 12:30 発→イヤ・カ
ルカ（4000m）13：30 着

今日は、順化と荷上げをかねて、ザトルワラ峠の手前まで往復する。ザトルワラ峠への急斜面には雪がついており、ポーターには危険なため、ＦＩＸしたうえで、ポーターは今日と明日とで荷を分けて、軽い荷で行ってもらう。我々も一人 10 キロ程の個装を持つ。荷はザトルワラ峠手前の稜線のコルにデポする。皆、ゆっくりとしたペースで歩き、石川が苦しそうにしていた以外は大丈夫そうだった。

２月 25 日　晴　－３℃→５℃→１℃
イヤ・カルカ（4000m）8:30 発→ザトルワラ峠（4550m）12:00 着 12:15 発→タシン・ディンマ手前（3800m）16：15 着

我々にとって最大の懸念であったザトルワラ峠をついに越えた。昨日の順化活動のおかげでより速いペースで進むことができた。峠から先は南に面した開けた場所で雪はない。チェトラブで休憩。そこからあと３時間も歩くと聞き、皆どっと疲れが出る。そこからトラバースの道を進み、標高が低くなるにつれて、かなりの積雪になってくる。なんだか日本の冬山にいるような気になる景色だ。今日のキャンプ地は、タシン・ディンマまで 40 分程手前の沢すじの所で、雪を整地してテントを張る。

２月 26 日　晴→曇→雪　－２℃→－２℃→－２℃
タシン・ディンマ手前（3800m）9:00 発→バガール（3460m）10:15 着→コーティ（3650m）12：30 着

今日の行程は、川に向かって下る道である。アップダウンが多く、雪もある。プラスティックブーツを履いている我々にとっては難なく行けるが、普通の靴しか履いていないポーターは下りに苦戦している。川に下りきった所がバガールという所で、そこから少し登り、沢と川の合流地点であるコーティで行動終了。コーティはとても広く、テントが優に 10 張も張れる。サーダーのリンジさんの話によると、ターナの氷河湖が２年前に崩壊し、川が氾濫したことでタシン・オンマの村は流さ

れてしまったとのこと。彼が５年前、このあたりに来たときは、もっといい道があったのだそうだ。

２月 27 日　晴→曇→雪　－７℃→２℃→－２℃
コーティ（3650m）9:20 発→ｺﾞﾝﾃﾞｨｻﾝ（4150m）13:00 着 13:50 発→ターナ（4360m）15:45 着

コーティからしばらく歩くと、ついにメラ・ピークが我々に初めてその姿を現した。そこから３時間、河原を歩く。さらに川から離れ、広々とした所を行きゴンディサンで昼食。ここは、クスム・カングルのベースキャンプになる所だそうだ。その先にあるゴンパで山行の無事を祈る。ターナへの道の途中には、廃屋やテントが張れそうな場所が所々見られた。ターナは 10 以上のロッジが立ち並ぶとても広い所だが、シーズンにはまだ早いため、桂小枝に似た小屋の管理人のほかには人はいない。それにしても今日の行程は長かった。今日は、約半分の 15 人程のポーターが帰った。彼らは３日でルクラに帰るのだという。加納にいつも親切にしてくれたポーターが「バイバイ、カノウ」と寂しく言って、去って行った。

２月 28 日　晴→雪　－３℃→１℃→－５℃
ターナ（4360m）滞在

今日は休養停滞日とする。朝、晴れ間が見えたのもつかの間、雪が降り出す。１日中雪が降り続き、寒い。昼食にゆでたジャガイモも食べる。とてもおいしかったが、皆、食後気分を悪くする。少し心配だが、順化に関しては問題なさそうだ。

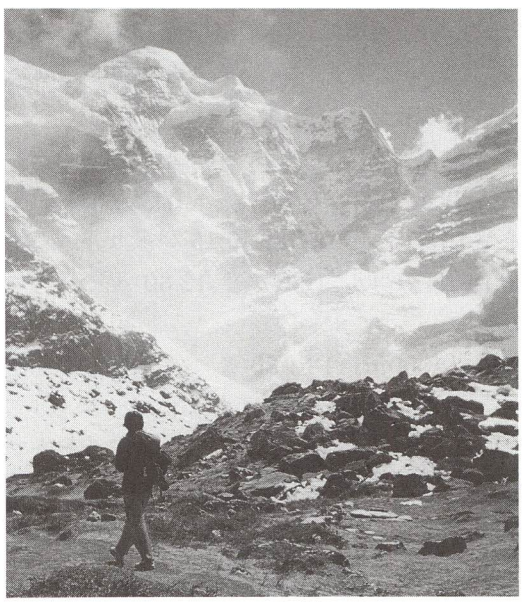
２月 29 日　曇→雪　－６℃→０℃→－３℃
ターナ（4360m）滞在

夜と明け方にターナ周辺で雪崩が起きた。サーダー、シェルパの意見もあり、行動はせず、停滞とする。午後になるとガスが出てきて、視界がまったくきかなくなる。

３月１日　雪　－５℃→－２℃→－３℃
ターナ（4360m）滞在

昨日の夜からの雪が降り続き、終日雪で停滞。昼にサーダー、シェルパとで、登山活動についてのミーティングを行う。ターナ滞在も３日となり、順化も万全だが、さすがに飽きてきた。

３月２日　雪→ガス→晴→雪　－６℃→０℃→－７℃
ターナ（4360m）9:50 発→ﾃﾞｨｸﾞ・ｶﾙｶ（4500m）12:30 着→カーレＢＣ（5000m）14:30 着
ターナから１時間程で我々にとっての最高到達点になる 4500m地点に着く。さすがに息苦しく、ゆっくりと歩く。途中、休憩時に我々にいる山の反対側の斜面で雪崩が起きる。しばらくじっと眺める。


メラピークを望む

ディグ・カルカに着くと、晴れ間が見え出す。この辺りは広大な平地が広がっている。さらに息苦しさは増し、数歩歩くたびに、深呼吸を繰り返す。

カーレは、多くの隊がベースキャンプにしているだけあって、とても広い所である。ただ一歩岩陰に行くと、多くのゴミが捨てられており、心を痛める。これでキャラバンは終わり、明日からはいよいよ登山期間だ。あとは我々の力でやる番だ。

３月３日　晴→ガス　－３℃
カーレＢＣ（5000m）9:00 発→メラ・ラＣ１（5400m）14:40 着

今までで一番ではないかと思えるような快晴。神崎監督、シェルパ、コック、キッチンボーイらに見送られて出発。ザックには個装、食料、装備がつまりズッシリと重く、高度も高いため、今まで以上にゆっくりと歩く。それほど雪はなく、ガレた急斜面を登り、やや開けた所でアイゼンを装着する。ここでヒドンクレバス対策としてタイトロープで全員をつなぐ。トップはクライミングシェルパとして同行するツェリンさんがなる。雪の急斜面を登ると、メラ・ラに近い広い平地で、悪天候になると迷いそうだ。メラ・ラに到着すると、とても風が強いため、そこから下りた地点にテントを張り、Ｃ１とする。

３月４日　晴　－４℃→15℃→－４℃
メラ・ラＣ１　9:00 発→Ｃ２（5830m）13:00 着

今日も雲一つない快晴だが、風は強い。Ｃ１にテント１張を残し、使わない食料をデポする。おかげでだいぶザックが軽くなる。タイトロープで全員をつなげ、緩やかでただっ広い斜面をゆっくり登る。所々に小さなクレバスが見えるが、特に問題はない。途中、エベレスト、ローツェ、マカルーなどの姿が見渡せる。Ｃ２は、大きな岩をぐるっと巻いた岩の東側で、ちょうど風がよけられ、日当たりがよいとても暖かい所だ。

３月５日　晴　？℃→１℃→－７℃
Ｃ２（5830m）5:00 発→メラ・ピーク山頂（6476m）10:40 着 11:05 発→Ｃ２（5830m）12:30 着

朝、５時に星空の下、出発する。今日もタイトロープ。夜が明けると、雲一つない快晴。緩やかな登りをすぎ、スノードーム南側の脇の斜面を登り、山頂を目指す。時折強い風が吹き、耐風姿勢を交えて進む。スノードームの脇の斜面を登りきると山頂が近くに見える。この辺りまで来ると、息苦しさは最高値に達し、咳が止まらない。山頂への最後の登りは急で、１ピッチＦＩＸする。それを登りきるとメラ・ピーク山頂。ついに我々はやり遂げた。メンバー、ツェリンさんと固い握手を交わす。神崎監督とシーバー交信をし、メンバー一人ひとりの喜びの声を伝える。風が強い中、部旗、日の丸、ネパール国旗を掲げる。その後で「桜門山岳会、日大山岳部万歳」と万歳をし、山頂を後にする。帰りの下りは早い。Ｃ２に着いたときには皆、疲れきっていたので、Ｃ１へ行くのはやめ、Ｃ２泊とする。

３月６日　晴　４℃→９℃→１℃
Ｃ２（5830m）8:45 発→メラ・ラＣ１（5400m）9:30 着 9:40 発→カーレＢＣ（5000m）12:00 着 13:15 発→ターナ（4300m）15:00 着

Ｃ２を撤収し、下る。タイトロープはしない。メラ・ラＣ１も撤収し、ベースキャンプへ向かう。途中のガレ場を下ると、神崎監督が待っており、一同握手を交わす。ベースキャンプに着くと、シェルパたちが歓待してく

メラ・ピーク合宿、ベースキャンプにて

れる。今日はさらに下り、ターナへ。行きで通ったときより道に雪がなくなっている。ターナの小屋の管理人と再会。またルクラへの長いキャラバンの始まりだ。

3月7日　晴　－3℃→9℃→3℃
ターナ（4300m）8:45 発→コーティ（3650m)9:30 着

メラ・ピークを登頂したことで順化ができており、ターナでも苦しくない。ここが富士山山頂より高いということを忘れてしまいそうなほどだ。暖かい日差しの中、のんびりと道を下る。河原の道をすぎるとコーティに着く。ここには、行きになかった茶屋ができており、ポーターが夜遅くまで酒を飲んで騒いでいた。明日の行程が2日分の距離なので、ポーターが2日分の給料をくれとサーダーに詰め寄っていた。コーティからはメラ・ピークが眺められる。我々がこの山行でメラ・ピークの姿を見るのもこれで最後だろう。「さようならメラ・ピーク」。

3月8日　晴→雪　－2℃→0℃
コーティ(3650m)8:15 発→チェトラブ(4300m）15:25 着

雪は往路よりも減っている。一度川へ下ってから、長い登りが続く。途中我々と同じくメラ・ピークを目指してキャラバン中の東京経済大学の人たちと出会う。チェトラブ近くになると粉雪が舞ってくる。我々がチェトラブに着くと、雪はさらに激しくなる。ポーターが全員着いたのが19時。雪の中、長い距離を本当にお疲れさまと思う。今日はテントを張らずに、ロッジに泊まる。

3月9日　晴→雪　－5℃→6℃→5℃
チェトラブ（4300m）8:20 発→ｻﾞﾄﾙﾜﾗ峠（4300m）10:00 着→ルクラ（4300m）15:30 着

今日は最終日。ルクラへ下りる日である。朝は快晴だったものの、出発するころガスが出始め、ザトルワラ峠に着くころには雪が降り出す。ザトルワラ峠先の稜線のコルからの下りは雪がかなりついていて、我々がポーターの下についてやる。イヤ・カルカで昼食。そこから先ははやる気持ちを押さえて、ルクラに下山する。17日ぶりのルクラは懐かしい。夜はお世話になったシェルパ、キッチンボーイ、ポーターたちと慰労会を行う。一緒に酒を飲み、歌を歌い、踊ったりと楽しく過ごす。

3月10日　晴　　ルクラ（4300m）→カトマンズ（1300m）

朝、プロペラ機でルクラからカトマンズに飛ぶ。久しぶりのカトマンズは、大都会の印象を受ける。カトマンズでの宿泊先はホテルヒマラヤ。ホテルで山行の汗を流す。夜、ネパール山岳会会長、井本ＯＢ、フリさん、ツェリンさんと日本料理レストランで食事をする。日本料理は久しぶりでおいしかった。

＊気温は 午前7時→正午→午後7時に測定したもの（1部抜け）

メラ・ピーク合宿を終えて

深沢智徳

あれは昨年の天幕懇親会でのことである。しこたま酒を飲んで泥酔した私は、大声で「メラへ行きたい、行きたい」と叫んでいたそうだ。そうだというのは、私にはまったく記憶がなく、そのことを翌朝聞かされたからである。それにしても、そんなに行きたいと思っていたとはと自分のことながら、話を聞いて笑ってしまった。

ここまで私が海外登山に魅せられたのはなぜだろう。入部当初の一年生時、全くの初心者だった私は、海外なんてつゆとも考えていなかった。ただただ合宿についていくのが精一杯だった。

その私が学年が上がるにつれ、海外への憧れを強く抱くようになっていった。我が部のＯＢには、素晴らしい経歴をもった方々がたくさんいる。その方々の話、それを聞くだけで私の胸は高鳴った。大きい海外登山はしなくても、一度でいいから海外へ行きたい、いつしかそんな思いを抱くようになった。一言で言えば「夢」であった。

かくして私がチーフリーダー時の年間目標に海外登山を掲げた。メラ・ピークという具体的な目標は、私とサブリーダーの小林とで話し合って決めた。技術的なことなど理由はいくつかあり、周りには何をいまさらメラ・ピークという声もあったであろう。それと同時に、出発直前までメラ・ピークへ行けるのかという声があったのも確かである。

しかし、私はこの目標にこだわりたかった。それは目標をあきらめる悔しさを知っているからである。冬山合宿の白山という目標を私たちはあきらめた。それを決めたのは、夏山合宿後であるが、私の心にはそのことが忘れられずにいた。決して順風満帆とはいかなかったこの一年間で、このメラ・ピークの一点だけは守りたかった。これは私の意地といっていい。

そして、私は一年生を勧誘したときネパールで海外登山をすると言った。この約束を一年生に対して果たさなければとの思いがあった。はっきりいって、最後にはこの比重のほうが高くなったような気がする。変な話だが、男の約束というかそういうものがあった。

話が前後するが、いざネパールへ行き、シェルパにメラ・ピークはやめてアイランド・ピークに行った方がいいと言われた時、私たちは頑なにメラ・ピークにこだわった。結果的には行けたわけだが、これは私たちのメラ・ピークへ対する執念であろう。

そんな私たちは、何度もメラ・ピークに本当に行きたいのかと質されたことがあった。私自身、年間数ある合宿の準備に追われ、メラ・ピークの準備を後回しにしてしまっていた。その余裕がなかった。もしくは忙しさを理由に私は本格的な準備を避けていたのかもしれない。

そして、私からメンバーへもメラ・ピークに行きたいのかと問い質したこともあった。人間、目標があまりにも大きすぎるとなかなか手が出ないものだと実感した。メラ・ピークへの道程は険しく、へたをすれば、道すら見失ってしまいそうであった。

だが、その道を照らし、導いてくれたコーチの方々がいた。あくまでも私たちのやる気を信じ、

海外登山の楽しさを知っているだけに、私たちにもその楽しさを知ってもらいたいという思いで、私たちを支えてくれた。そんな私たちは幸せものだ。感謝の言葉は尽きない。

ネパールに行き、メラ・ピークを登頂したいきさつは別に記したので省くが、ひとつだけ印象に残ったことがある。

私たちが初めてカトマンズの空港に降り立ったときのことだ。私たちの周りに子どもたちが殺到した。荷物を運んでお金を貰おうとするのだが、なにせその迫力には圧倒された。きれいな澄んだ目を見開き、顔に擦り傷をつくっていた子どもの差し出す手のひらを私は追い払いながら、ただの国の違いだけではない何かを私は感じていた。彼らは生きようと必死なのであり、今思うにその生きようとするエネルギーに私は圧倒されたのだろう。それはカトマンズだけではなく、ネパールのどの場所でも感じられた。生きようと強く意識しなくても生きられる国から来た私にとって、その違いはひしひしと感じられた。その生きようとするエネルギーに私は勇気づけられた。

ネパールの人々との出会い、過ごしたことが私の財産となるであろう。そして、ともにネパールへ行った下級生にとって、今回の合宿でのすべてのことが財産になるであろう。今回のメラ・ピークはあくまでもひとつのステップであり、一回きりの海外登山にはしてほしくない。現時点のレベルではメラ・ピークが精一杯だと思う。だが、今回の海外登山で多くのことを学んだ下級生にとって、この経験は次の海外登山への礎となるに違いない。そしてその礎をもとに、さらにレベルアップした登山をしてもらいたいと思うし、それができると私は信じている。そのときは、私が今回の恩返しとばかりに積極的に協力していきたいと思う。これは私から下級生への贈る言葉である。

今回、海外登山を経験してみて、海外登山は距離ほどには遠くないものだと私は思った。決して海外を甘くみているわけではない。レベルに応じた山を選び、しっかりとした計画を作成し、それに基づいて実行すること、これが条件であると思う。

海外は、決して遥かなる「夢」ではない。

■個人山行

・奥多摩　雲取山～鍾乳洞
4月1日～2日　L深沢、石川
・丹沢　主脈
4月10日　L小林、石川
・丹沢　水無川　源次郎沢
5月8日　L小林、深沢、石川、原澤、加納、鳥居、OB佐藤
・奥多摩　川苔山　逆川
5月15日　L深沢、京増、平井、OB武藤、OG鈴木、OB佐藤
・奥秩父　笛吹川　東沢釜の沢
5月29日～30日　L小林、京増、OG鈴木
・奥多摩　日原川　大雲取谷
6月12日　LOB佐藤、小林、原澤
・谷川岳　一ノ倉沢
7月4日　L小林、京増
・谷川岳　西黒尾根
7月11日　L深沢、石川、山口
・奥秩父　丹波川本流
7月18日　L深沢、石川、加納、OB佐藤
・中国　雪宝頂
9月3日～22日　石川
・南アルプス　北部縦走
9月5日～7日　L小林、鳥居
・白神山地　追良瀬
9月8日～11日　L深沢、原澤、加納、OB佐藤
・早池峰山　岳川　魚取沢
9月13日～15日　L深沢、鳥居、OB佐藤
・韓国　仁寿峰
9月17日～22日　LOG鈴木、OB宇多川、小林

初冬合宿・八方尾根　　（平成 11 年・1999）

冬山合宿・塩見岳山頂　　(平成 11 年・1999)

桜門山岳会

平成１１年度事業報告と１２年度

平成 11 年度理事長　尾上　昇

日本大学山岳部と桜門山岳会の活性化にお役に立てば、とお引受けした理事長職もはや一年経ちました。名古屋在住ということで、桜門山岳会や日大山岳部の状況も良く理解出来無いままに理事長をお受け致しましたが。正直申し上げまして、想像以上の沈滞振りにいささか驚いています。

一年経って、実運営に携わりその原因を考察して見ました。二つ有ります。先ずは山岳部（学生）の低迷です。桜門山岳会に課せられた大きな事業の目的に山岳部（学生）の健全育成が上げられます。

いくら監督やコーチ会が張り切っても部員がいなければ、その存在意義が有りませ。
逆に多くの部員を抱えていたとするなら、好むと好まざるに関わらず、ＯＢとしての役目、即ち学生の面倒を見ざるを得ません。

桜門山岳会を無理やりでも活性化させる近道は、山岳部（学生）の部員を増加させる事です。

もう一つは、桜門山岳会の中の若いＯＢと古いＯＢとの乖離です。このことは、年代の相違とか、認識の違いなどと言う一般論では、片付けられません。何故なら、
古くても、新しくても山岳部という同じ土壌に育ち、目的は一つで有るからです。後輩は先輩を敬い、先輩は後輩の闊達な意欲を育む事をお互いに理解しなければ成りません。

桜門山岳会の目的は一つと言いましたが、その目的とは山岳部（学生）の健全育成と山登りの実践です。桜門山岳会に常にこの目的に沿った自意識と実働が有れば、会は自動的に活性化します。

日大山岳部と桜門山岳会の両輪が上手くリンクしてテイクオフする為の処方箋を今一度具体的に指摘すれば、それは山岳部の部員を増強する事と、桜門山岳会の海外登山の実践です。

現在私は、色々な山岳会組織に関わり合いを持っています。山岳団体の強弱、優劣の判断基準は海外登山の遠征回数に比例するというのが私の持論です。私の経験からこのことは充分に裏付けられています。

昨年度を振り返りましょう。新入部員が三名残りました。小さな核が出来たと思います。メラ・ピーク登山の波及効果だとおもいます。このメラ・ピークには全員登頂し、大きな成果を上げる事が出来ました。又会員各位には、資金の募金をお願いしたところ、予定の３００万円の目標を上回ることが出来ました。改めまして、衷心より御礼申し上げます。今年は、その核をさらに拡大させる為の重要な年です。最低でも１０名の新入部員を確保しましょう。

天懇も声を大にして呼び掛けたところ、若手ＯＢを中心に５０名を越す参加者を得ました。これも小さな核です。

今年こそは若い連中を中心に１００名の参加者も目標にエネルギッシュな天懇を目差しましょう。そしてこのエネルギーを海外登山

の実践に転化させたいと思います。

幸い一部の会員から、最近その動きが出て参りました。この芽を大切に育ててやらなければ成りません。１９９５年エベレスト以後からの久し振りの計画です。ご理解とご協力を節に願うものであります。

こうした良いムードに呼応して、過去何度も検討されてきました自前の集会場、つまり、桜門山岳会ルームを持つ話も再燃して参りました。組織の活性化には、定期的に自由に集うことの出来る集会所は大変魅力です。

自前のルームには、桜門山岳会ばかりでなく、学生にも使って貰う事が出来ます。
現在の部室が１０月に取り壊されることが決まった事からも、一挙両得の感が有ります。今年度の事業計画に取り上げて、一日でも早く実現させたいと思います。

以上、思い付くまま昨年を振り返り、今年度を展望致しました。何かトンネルの先に明かりがチラホラ見えてきた様な気がします。この光を幻としない様に会員各位のご理解とご協力を賜りたいと存じます。

さて、この稿の終わりに際しまして、悲しいお知らせを申し上げなければなりません。この４月に野田福五郎先輩と中山昌之君を相次いで亡くしました。心からご冥福をお祈り申し上げます。特に中山君は、まだ５１歳の若さであり、桜門山岳会でのこれからの活躍が大いに期待されていたことを思うと残念で成りません。

心より追悼の意を表したいと思います。

合掌

日本大学山岳部

平成12年度（2000年4月～2001年3月）

部　長　　平山善吉
監　督　　神崎忠男
コーチ　　斉藤大輔
主　将　　石川重樹

部　員　　3年　CL石川重樹
　　2年　加納　鳥居創太　原澤修
　　1年　伊藤　松富　門田

部　室　　〒101-0062
　　東京都千代田区神田駿河台 1-18-1
　　日本大学理工学部内平山研究室

平成12年度活動報告

チーフリーダー　石川　重樹

大きな目標であったメラ・ピーク合宿が終わり4年生1名が引退し、3年(学部4年)の石川が主将、2年の鳥居が副将を務め、同じく2年の原澤、(学部3年)の加納、計4名で新体制がスタートした。

4名で新人勧誘を行ったが、人数的な限界や時間的な問題、なによりも、そんな危険で大変なことをしなくても…、という風潮から思うような成果は上げられなかった。確かに、数あるアウトドアサークルには人は集まるが唯一の体育会所属の山岳部と聞いただけで敬遠されてしまう。だからこそ今までのスタイルを続けていかなければいけないのだろう。新人勧誘には毎年頭を悩ませるが限られた範囲の中で案を出し合ったが、自分達の頑張りとは必ずしも一致しないのが現状だ。他大学も同じ状況なのを見ると、時代の波には逆らえないのだと思ってしまう。そんな中でも3人の新入生を迎える事ができた。

今年度の方針として、1年生を残すということに主眼を置き、冬山という最終目標も定めず、合宿ごとにやりたいこと行きたい場所を決めていくことにした。

5月の合宿は行わず、全員で新歓キャンプの計画を立てた。その他、6月の初夏合宿までは新入生を連れて日帰りの沢登りなどを行った。

梅雨の合間を縫って行われた初夏合宿にはさらに加わった1年生、計8名とOB1名で涸沢定着雪上訓練、奥穂高岳登頂を含めた従来通りの合宿を行った。その後2年生がリーダーを取り1年生を連れて槍ヶ岳往復の後半分散に行った。新体制で臨んだ初めての本格的な合宿を無事終えることができた。

夏合宿は自分らの実力を照らし合わせ、前年の内蔵助から剱沢定着に戻した。前半分散は石川、鳥居、伊藤で早月尾根から入りその他のメンバーは室堂からの一般的なルートで荷揚げをした。千葉OBに参加していただき雪訓2日、分散登攀2日を行った。岩登りは普段の経験不足が露呈し敗退という結果に終わってしまった。後半分散では全員の実力を検討し双六谷に定めた。唯一の現役のみの山行となった。毎年けがの多いこの時期に無事合宿を終えることができたのは何回もコーチ会を開き検討してくださったコーチの方々の

お陰だ。

これまでの合宿ではコーチの方に入ってみて頂いた。私自身も含めチーム全体の経験、実力不足を考えると安全の面からしても妥当であった。レベルを落として現役だけにこだわるのも一つのやり方だが、色々な面において未熟であった今年は、現役のみにこだわらずＯＢ参加してもらい、少しレベルの高い山行をした方が、実力向上のためにも安全面においても得策と考えた。

初夏合宿は例年通り八方尾根で行った。１年生１人が持病の腰痛のため抜けることとなった。毎年同じ時期に行っているが今年は本当に雪が少なく、ほとんど晴れていた。例年の経験から胸までのラッセルを覚悟していたので拍子抜けしてしまった。山行としては非常に快適であったが合宿の目的を達成するにはお粗末なものとなってしまった。

冬山はここ最近なかった越後縦走に定めた。自分達の越後の経験はなく資料のみの未知なる山域だった。初冬にも満足に雪の経験ができなかったのを考慮すると自分たちだけでは厳しい状態であった。コーチ２名の力を借りて合宿を迎えることになったが、これまでためてきた分をいっきに降らしたかのような降雪だった。地元、六日町ですれ違う人にことごとく忠告を受けながら入山しすぐに腰以上のラッセルと格闘することとなった。予想外の降雪量と雪になれていない１年生のため初日より大幅に遅れてしまった。雪の量、天気、体力を考え当初計画していた縦走から中ノ岳アタックとした。無事アタックを終えた下山日、越後の山は牙を剥いた。目も満足にあけられないほどの吹雪でテントが引きちぎられ視界もほとんどなかった。その後、悪天が続き、もし進んでいたら、と考えるとぞっとした。

冬山が終わり１年生、１人辞め、核であった鳥居がグリーンランドに行くため休部することとなった。最終的に３年の原澤を中心に４名となった。依然として、厳しい状況は変わっていない。しかも、今年度は他大学の多発する遭難事故も重なり廃部に追い込まれた大学も少なくない。少なからず影響を受けることと思う。

これまで通り合宿形態を取っていくのか、新入生を残す方針なのか、それとも冬山に向けそれなりにやっていくのか、ＯＢの方々との関わり方など、議論をしなければならない課題は山積みである。しかし、それらも含めて山岳部の面白さであり勉強であると思う。私たちを取り巻く環境は大きく変わってきている。その時にあわせたやり方を探っていかねばならない。山岳部に入りさまざまな人と知り合い、勉強させてもらい充実した学生生活を送ることができた。これまで支えてくださったコーチを始めとするＯＢの方々、メンバーひとりひとりに心から感謝いたします。

平成12年度コーチ会報告

ヘッドコーチ　斉藤　大輔

メラピークの遠征後、３年の石川を主将として新体制をスタートさせた。４年生がいないという「歯抜け」の状態は、1989 年以来10年ぶりのことだ。確かにここ10年間、常に 20 名以上の部員で活動を続け山岳部の春を謳歌してきたが、５年前の死亡事故をきっかけに部員減少に歯止めがかからなくなってきてしまった。ほとんどの他大学が頭を悩ましている部員減少の問題を、ついに日大にも突き付けられた。　４年生がいないという危

機的状況で、コーチ会としては今年１年、基礎技術の習得に主眼を置き指導することにした。新１年生の４名をなんとか残しながら、２年生３名の総合力アップを特に心掛けた。リーダーシップを補うため、なるべくコーチを合宿に参加させ、冬合宿には学生だけの主体的な合宿を目指したが、結果的に初夏、夏、初冬、冬、春とすべての合宿にコーチの誰かが参加することになってしまった。　一年間を総括すれば、冬山を最終目標にした山岳部的山登りに限界がきているのではなかろうか。結局、石川が卒業した今、８人いた学生も４人しか残っていない。つまり、３人の１年生が途中で辞めてしまったのだ。つまり、学生が指向する登山の形態が山岳部に合わなくなってきたといえるのではなかろうか。最近の学生の傾向は、より高くより困難な山登りなど求めていないし、まさかその先に、ヒマラヤの高峰があるなんて露とも考えていない。周りを見ると、困難なクライミングやフリークライミングがしたければ社会人山岳会が盛況である。ただ山に登るだけなら、大学の中に様々なサークルがある。海外に行きたければ、旅行会社やアルパインガイドがツアーを募集している有り様だ。　「これからの山岳部をどうするか」。このことをコーチ会や学生が中心となり熱心なＯＢとも一緒になって考えてきたが、はっきりとした答えは出なかった。今年も手探りで答えを探す一年になると思う。ここでＯＢ諸兄にお願いしたい。もしも、日大山岳部が冬山やヒマラヤを最終目的とするのではなく、別の道で生き残りを計ったとしても、それはすでに時代の流れとして了解していただきたい。これは私の予測だが、山岳部が冬山やヒマラヤだけに固執し続ければ存続の道が危ぶまれる気がしてならない。とにかく、山岳部の火を消さないことを第一に、コーチ会として考えうるすべてのことに取り組んでいこうと思う。　最後に、桜門山岳会の皆さんにお願いがある。古野ＯＢが日大山岳部のホームページを立ち上げている。パソコンさえあれば、いや、携帯電話さえあれば、誰でも山岳部の現状を知ることができる。また、ホームページ中にあるアルパインラウンジというメッセージボードには誰でも書き込み可能だ。これは、北海道や九州にいる山岳部の行事に参加できないＯＢも、また海外在住のＯＢさえも桜門山岳会の動向を温度差なく感じられる新たな交流場だ。これからはこのホームページがＯＢ会の中心になると思っている。特に古いＯＢの方々の書き込みは、停滞しつつある山岳部の活動に活気を与えることになるはずだ。山岳部から遠ざかっている方が書き込みしにくい気持ちはわかる。「今さらパソコンなど」とは思わず、多くの人に参加してもらい、桜門山岳会３００人全員で山岳部を盛り上げられればと願っている。

記　録

■５月山行

北アルプス 小窓尾根～早月尾根

期　　日　5月11日～5月14日

メンバー　L千葉 鳥居

5月11日　　東京～富山～馬場島～二又

高速バスに乗り富山へ、松尾平で熊が出るとの注意を受け、行ける所まで行く。

雪が多く徒渉する必要はなかった。

5月12日　晴れ～曇り～雨　CS～ニードル～ドーム

雪が多い。2121の登りから急な雪壁になりアンザイレンする。所々残置フィックスが残っていたためタイトロープする。結局一度もザイルは解除しなかった。

5月13日　　曇り時々雨～晴れ　CS～三ノ窓～池ノ谷乗越～長次郎ノコル

ひたすらアンザイレン、三ノ窓への下降は3ピッチ懸垂、池ノ谷乗越葉小さい雪崩が何度も起きていた。5月は雪がグサグサだ。

5月14日　　曇り時々雪　CS～剣岳～早月尾根～馬場島

視界は10メートル、どこを歩いているのか分からない。小窓尾根よりよほど早月尾根のほうが渋かった。早月小屋でザイルを外し気楽な気持ちで下山。

■初夏合宿

穂高連峰・涸沢定着

期　　日　6月14日～6月18日

メンバー　L石川　鳥居、原澤、加納　伊藤、松富、門田　OB本多

６月１４日　　雨～曇り　上高地→涸沢

１年生は２９キロ、２年生は３５キロを背負って黙々と歩き始める。今年は雪が多く本谷橋過ぎから雪が出ている。

６月１５日　晴　涸沢BC~雪訓場~涸沢BC

５６のコルは朝がた、陽があたっておらず凍っていたので３４のコルを雪訓場とする。直登、直下降、ダイヤモンド、八の字を行う。ザイルワークとグリセードを行う。

６月１６日＜金＞涸沢BC~白出のコル~奥穂高岳頂上~白出のコル~涸沢bc 晴れ　登頂

途中２箇所雪がついたトラバースがあり、下りに細引きで１ピッチ、フィックスで１ピッチ張る。

《後半分散》

メンバー)L鳥居、SL原澤、加納　１年伊藤、松富

期間)平成１２年６月１７日＜水＞～１８日＜日＞

場所)北アルプス南部 横尾～槍ヶ岳～上高地

６月１７日＜土＞涸沢～横尾~殺生ヒュッテ　曇り~雨

出発して間もなく雨が降り出す。槍沢キャンプ地以降すぐ雪が出てペースが落ちる。

６月１８日＜日＞殺生ヒュッテ　～槍ヶ岳～上高地 晴れ

槍の登りで一箇所細引きを使い、下りでフィックスを張る。1年の補助に神経質になりすぎたためか少々時間を食ってしまう。

今年度新体制になってからの初の合宿を無事終えることができた。梅雨のこの時期に予定通り頂上を踏めた事は一年生にとって良い思い出となった事だろう。

■初冬合宿

期間)平成 12 年 11 月 23 日(木)～11 月 27 日(月)

《場所》後立山連峰　八方尾根～唐松岳

メンバー)L 石川 3　SL 鳥居 2　原澤 2　加納 2　伊藤 1　松富 1、佐藤 1　OB 本多

11 月 23 日(木) 黒菱平～八方池 bc 快晴　入山

くるぶしまでしか雪はなく夏道を行く。その後偵察をしたが、ほとんど雪はない。

11 月 24 日(金) 八方池 bc～扇雪渓～八方池 bc 快晴　雪訓 1 日目

半ば強引にアイゼンを履き歩行訓練を終える。ビーコン捜索をしてこの日の行動を終える。BC に戻りそれぞれくつろぐ。

11 月 25 日(土) 八方池～扇雪渓～八方池 bc 快晴　雪訓 2 日目

クラストしているうちに歩行の復習を行う。順次ザイルワークを行い、その後フィックスの練習をやる。

11 月 26 日(日) 八方池 bc～唐松岳～八方池 bc 快晴　唐松岳往復

強風のため出発を 1 時間遅らす。いやらしい所はあるがフィックスをするほどでもない。扇雪渓への下降でフィックスの練習をして戻る。

11 月 27 日(月) 八方池 bc～黒菱平 雪～雨 下山

今合宿初の降雪だが残念ながら下るのみ。夏道に雪が積もり歩きにくい。途中から雨に変わり雪はだいぶ溶けている。

《全体を通して》

例年になく少ない降雪量であったためラッセルワークを初めとする体力強化面で訓練はできなかった。天気も快晴が続き 1 年生に冬山の厳しさを分からせるのは難しかった。

■冬山合宿

期間)平成 12 年 12 月 28 日(木)～平成 13 年 1 月 1 日(月)

《場所》越後連峰　野中～中ノ岳

メンバー)L 石川 3　SL 原澤 2　加納 2　伊藤 1　松富 1　佐藤 1　OB 斎藤　千葉

12 月 28 日(木) 野中～ダム管理所～十字峡 cs1　雪　入山

田んぼに張るが雪はすでに腰まであった。深々と雪が降る中、車道を歩く。初日からの猛ラッセルに先が思いやられる。

12 月 29 日(金)　十字峡～967 地点手前 cs2 雪時々曇り

中ノ岳へ向けて出発するが、思うように進まない。雪の量は腰まで、ところによっては胸や頭を超える。1 年生はトレースを崩したり木の根にはまったりとついてこない。

12 月 30 日(土)　967 地点手前～日向山 cs3 快晴

無風快晴の中出発、CS から小屋が見える。振り返ると今来たとレースと六日町の町並みが見える。日向山の中継小屋裏に張り、明日の悪天を予想し雪洞を掘る。

12 月 31 日(日)　日向山 cs3～中ノ岳～日向山 CS 曇りのち晴れ

今日行かなければ中ノ岳すら無理との判断、

天気は午前中いっぱいが勝負、強風の中、中ノ岳へ向けてアタック開始、膝までのラッセルを回す、天気がもってほっとする。

1 月 1 日(月)　日向山 CS～三国川ダム管理所 風雪　下山
早朝より物凄い風雪、四人用テントが潰される。急いで 6 人用へもぐりこむ。意を決して撤収開始、目もろくに開けられない。来る時のトレースはきれいに消えていた。

《全体を通して》
今年は雪の量が多く本来、車で入れる十字峡まで 1 日かかってしまった。冬の越後縦走はクリスマス寒波で大量の雪が降る前に抜けてしまうか、たっぷりと日程を取って計画を立てないと無理のようだ。いずれにしても厳冬期の越後は厳しいことに代わりはない。だからここ最近は人が入っておらず行く価値のある、やりがいのある山域だ。

初夏合宿・奥穂高山頂（平成 12 年・2000 年）

夏山合宿・長次郎谷（平成 12 年）

冬山合宿・中ノ岳山頂（平成 12 年・2000 年）

桜門山岳会

平成１２年度を振り返って

理事長　尾上 昇

一昨年の総会で、少しでも桜門山岳会と日大山岳部のお役に立てるならとお引き受けした理事長職も早や2年、お約束させていただいた任期を何とか終えさせていただくことができそうです。

短い期間ではありましたが、この2年間を総括させていただきまして本年度の会務報告と退任のご挨拶を兼ねさせていただきます。

先ず、私の理事長就任につきましては、皆様方に少なからずの疑問を生じさせたようです。直接、間接に私の耳に達していました。当然こうした声が上がることは、承知していましたので、その辺りの事情は、理事会や評議員会、短信あるいは、私信でお伝え申し上げてきました。

かいつまんで申し上げれば、桜門山岳会内部の確執による活動の停滞と部員不足による山岳部の低迷で、理事長職の引き受け手がなかったことです。確かに名古屋在住の私が、理事長職を務めることは、異常です。桜門山岳会の苦衷の選択だったと申せましょう。そこで私は、私に与えられた任務を、先ず第1に内部の融和を計り、桜門山岳会を活性化させること、次いで山岳部の部員を確保し正常の部活動のできる山岳部に復活させることと定めました。

具体的には、若い人達と古い会員とのコミュニケーションを計り、集会に楽しく人の集まりやすい雰囲気を作ること、そして山岳会と名のつく以上山登りを実践することです。すなわち海外登山の派遣です。

山岳部については、部員確保のための手段の強化と、コーチ会を中心とする若いＯＢの山岳部への積極的な関与です。更には、ＪＡＣの諸行事への積極的な参加、大学当局との緊密な連携も掲げました。

さて、その成果であります。決して満足のいただけるものではなかったと認識していますが、自己採点させていただくとするなら、なんとか及第点ぎりぎりの 60 点だと思っています。

天懇や新年会、総会などへの参加者も増えましたし、久し振りに中村君率いる海外登山隊が今秋サンルン峰へ出発します。

山岳部の方も3年生3名、2年生3名が残り、今年の1年生の部員獲得に期待が持てそうです。これには、和田君にお世話になった勧誘パンフレットや、古野君を中心として作成してくれたホームページが威力を発揮してくれそうです。

また活動の拠点となるルームが確保できたことは、何事にも勝る喜びと申せましょう。これは神崎さんのお力添えによるところ大ですが、学生はもとより、ＯＢの集会場所としても利用できるのが魅力です。

以上のように大きな飛躍とか、際立った変化はありませんでしたが、今後の桜門山岳会と日大山岳部の活性化の基になるような核は、できたものと自負しています。

いわば復活の緒についたばかりと申せましょう。今後の課題は、先ずは、ここしばらく会報が出ていませんので、早急な発刊が望まれます。また、間もなくやってきます 80 周年への取り組みも問題です。中途半端に終わ

った 70 周年の二の舞だけは、避けなくてはなりません。

幸い次年度に向けた新執行部も決まり、一段と若返った諸氏に期待したいと思っています。先にも記しましたように、名古屋在住ということで皆様方には、随分私の勝手をお許しいただきました。そしてこの２年間を支えてくれました岡田、大谷、中村、古野、神崎、高橋の各ＯＢ諸氏に心から感謝申し上げます。

また、芝田会長という素晴らしいバランス感覚をお持ちの会長の元で務めさせていただけたことを幸に思っています。幸い芝田会長には、ご留任いただけることになり、一安心です。

私といたしましては、やり残したことがあります。それは、いうまでもなくサンルン登山隊です。無事日本に帰国させるのが私の責務と思っています。登山隊のこと改めましてどうぞ宜しくお願い申し上げます。種々ご厚情賜りましたことに対しまして御礼申し上げ筆を置かせていただきます。

“声”

—平成10年度・部員—

学生の気持ちであるうちに

4年　本多直也

後輩たちへ。まだ学生の立場であるうちに自分が勝手に考えていることを参考までに残しておきます。

この文章を書いている99年春現在、多様化、個人主義は若者のみならず世のなかの風潮である(大きな割合を閉めるということで、もちろんそれ以外の人間もいる)。十人十色は当たり前、一人の人間を一色で表せない今は十人百色かそれ以上と言える。大学生しぼって言えば、バイトもしたい、彼氏・彼女もほしい、サークルなどはそれなりに楽しくやりたいがあまりのめり込みたくない、努力して汗かいているのってダサイ、就職も厳しいし、という現状である。

山岳部も例外ではない。新入部員に関して言えば、ほとんどの時間を部活に費やし、厳しく危険な山に重荷を背負って登り、なぜか靴を蹴り込み、ふやかした米を田部、雪を解した水を飲み、へつるという聞き慣れない言葉を覚え、裏声で通信し、頂上で皆と握手して抱き合い、旗を立てて感動を味わいたいんですよ、若いときの苦労は山で帰って言うじゃないですか、と目をきらきらさせて移入部してくるわけがない（いればそれはそれでうれしい。が、怖い)。

けれども「フリークライミングってかっこいいな」とか、映画『クリフハンガー』を観て「僕もスターローンみたいになれるかなあ」とか、『サウンドオブミュージック』を観て「ああ、私もアルプスの山々に囲まれてどれ蓑歌が謡たいわあ」とあ、「ムーンリバーは名曲だ。山でも歌おう」か、大学がつまらなくなりストレスからか「本多ぁ〜、おれも山の頂上で叫びてえよお、連れてけよお」とか、「せた線（世田谷線）よりオレのほうが速い」と電車で競争したりとか、家の周りの草をいろいろと食べてみたりするとか、そういったアウトドアに対する潜在的需要・欲求・能力を持っている人は少なくない。…はずだ。……いるか？

さらにそういったもの以外にも、充実やら仲間にやら、何かを求めている人は少なくない。……はずだ。

人間が自然の中で安全に活動することは難しく、その安全を追求することはもっとも重要なのだが、それができるなら、フリークライミングだけ、スキーだけ、夏山だけ、植物観察だけ、トレッキングだけ、マネージメントだけ楽しみたいという人間でも部員としてやっていける包容力が山岳部にあればと思うときがある。

実際にそのようにすることは難しいのだろうか？　自分に関していえば、それはできなかった。振り返ってみれば、こんな考えとは正反対の脈々と受け継がれてきたどっぷり合宿至上主義に浸っていたりする……。後輩たちにああしろこうしろと自分たちが槍の越したことを押しつけるつもりはない。言いたいのは、とにかく毎年の活動を一定の流れに三面護岸工事せずに、その年を形成するメンバーによってつくり、舵取りすればいいのではないかということである。

ひとつの目標に向かって全員でやるか、多

様に行うかなどふた方の長所・短所を考えて……。部員の下図や思考は毎年変化して当たり前だろうから、今年のやり方は今年のメンバーに限ってのベストを考え、来年には来年のベストを考える。もちろん昔からのやり方にはよいところがたくさんあるから温故知新で。現役部員が安全に生き生きと楽しく活動している雰囲気が伝わればきっと新入生も入ってきてくれる。……甘いか？
毎年総会のころには、「おいおい１年、こんなに入ったのかよ、21 世紀にも物好きがまだいるんだな」と言わせてほしい。

それから、なぜ山登るのかとか、また山以外のことに関してでも、悩みすぎて時間を使うくらいなら、なんらかの行動をとることをすすめる。悩んでいるだけでは言葉で表せる明確な答えなんて出ないからね。悩むのも行動するのもどちらも大事なことだと思うけど、悩むほうだけに多くの時間を割いてしまうのはもったいない。悩んで、行動して、そのうち何のことに対する「何故？」という問いにも、「う～ん、好きだからさ」と笑顔で答えられれば最高だ。そのとき君は輝いているんじゃないかな。「好きだから」君は言えるか？

山岳部のよいところ、悪いところ

４年　松本達彦

山岳部の良いところ、悪い所と言われてもあまりこれだといえるものは浮かんでこない。４年間、部活をしてきて、途中、伸司の事故があったので二度と事故を起こさないようにという意識で、悪いところはみんなで積極的に改善してきたし、良いところは、これは良いぞなどととくに意識したこともなかったので、浮かんでこないんだと思う。

あえてあげるなら、普通の学生とは少し（？）違った経験ができるっところが、良いところだと思う。このご時世に自ら進んで困難を選択する自分たちも自分たちだが、自主的に取り組めば、きっとそれに見合うだけの何かを手に入れることができる部だと思った。

悪いところというか、嫌だったところは、入部したときに比べれば、かなり改善されていっていると思う（たとえば部会日数減、講義会の内容の充実など）。引き続き部員同志で話し合い、自分たちが事故を起こさないように、また楽しんで活動できるように部を変えていければいいと思う。それと、気になったことなのだが、山岳だから山に登ることは当たり前なのだけれど、部員に自転車や海外旅行をしたいという者がいたら、そういう要望にもできるだけ応えていける部になってほしいと思った。そうすれば視野も広げられ、より多くの経験ができてよいと思う。

自分は今年で山岳部を卒業するのでこれからはＯＢとして学生をできる限りバックアップしていこうと思う。また自分なりの山登りを見つけて続けていこうと思っている。

最後に、山岳部に入部して、そしてよい先輩方に巡り会えて本当に良かったと思っている。我が大学生活に悔いなし！

ＯＢの方々、今後とも学生たちを温かい目で見守り、ご指導・ご鞭撻の程宜しくお願い致します。

大丈夫？　ＭＹ山岳部

３年　深沢智徳

マイ山岳部。我が青春の山岳部。入部してはや３年。時が経つのは早いものです。いま

や私がチーフリーダーとなっているのですから驚きです。でもこんな厳しい現状のなかでチーフをやるとは予想していませんでしたが。

私にとっての大学３年間はそっくりそのまま山岳部での生活に置き換えることができます。楽しいこともありました。苦しいことはもっとありました。悩んだこともありました。それら全部がいい思い出であり、山岳部を愛着を以てこう呼べます。「マイ山岳部よ。

今回はマイ山岳部の現状をつれづれなるままに書いていこうと思います。

思えば、私の山岳部の入部当初から部員不足は切っても切り離せない問題でした。私と同期で入部したのは、私を入れて２人です。もう一人の彼は、初夏合宿後退部して、以降、１年生は一人だけでした。１年生一人というのは心細くもあり、つらいものです。私はそれを実感しています。ですから、私が２年生のときに佐藤が戻ってきて、同期としてやっていたのはかなり違いました。心強かったです。

そして現在、私はまた一人に戻りました。佐藤は２月合宿に参加して、春山合宿も行くのですが。今のメンバー構成は、サブリーダーで２年の小林（大学では３年）、１年は石川（大学では２年）と京増の計４名です。正直いって厳しいです。かなり厳しいっす・そして合宿に行けるメンバーはというと、小林は体が完治しておらず、京増は所々の事情で参加せず、私、深沢と石川の２人だけです。これはかなり厳しいです。マジきついっス。……と愚痴を言っても始まりません。今年の春の新人勧誘を頑張って、新入生の大量入部を目指します。

一方、我々４名は現状を悲観せず、憂ことなく、我々でどれだけできるか、工夫し、努力していくことが大事だと思います。そして、この逆境をより楽しめる余裕を持ちたいものです。来年の春のネパール海外山行を目標に、それを楽しみにして頑張ります。マイ山岳部が「大丈夫？」と言われず、「大丈夫だな、マイ山岳部」と言われるように願って。

私が山岳部を一度やめ、出戻るまでの１年間

３年　佐藤　凡

僕が山岳部を１年で辞めて、まず一番始めにやったことは空手だった。高校に入る前から空手をやってみたいという希望は常に持っていた。しかし、高校には空手部がなかった。

代わりに柔道部があったのでそっちに入ってしまった。これはそのときちょうどマンガで「柔道部物語」というものを読んでいて、それに影響されて『オレも全国制覇するぞ』みたいな強い意気込みで入った。

高校３年間の結果は黒帯が取れたくらいだった。それでも３年間部活をやり通したということに少しの達成感、満足感を持てた。大学に入ったら何をやるべきか自分には２つくらいに絞れていたと思う。

高校のときに友だちと奥秩父あたりに山登りの真似事をしに行った。それが予想以上におもしろかったし、それに本も読んだ。具体的にはシェルパ斉藤という人が書いた（シェルパじゃないけど）『行き当たりバッタリ旅』というのが一番大きく影響を受けた。だから大学に入って自由な時間ができたらいろんな旅をしてみたい（旅行ではなくタビである）と思っていた。

もうひとつは前々から憧れを抱きつづけてきた空手である。大学に空手部はあった。しかし、極真カラテではなかった。あの『空手バカ一代』の極真である。大山倍達総裁曰く

（あえて“総裁”とつける）、「極真こそが地上最強の格闘技である」だそうだ。

実際、僕は本を何冊も読んでそう思ったのだから、せっかくやるからには極真がやりたかったのだ。だから空手部に入ることはやめて、アウトドア系のサークルを探すことに決めた。

山岳部を選んだのは、ある友だちに出会い、その友だちと一緒に山岳部に入ることになったからだ。友だちのつきそいで山岳部を見にいったつもりが、結局、自分も入ることになってしまった。入部したのは、当時、僕の頭のなかでいろいろ計算があったのだが、ここでは本題ではないので書くことはしない。

結局、その友だちは初夏合宿で早々に辞めていった。僕も辞めるかどうか迷った。山登りはこんなに苦しいものだったのか。……当たり前である。30キロ以上背負って歩く登り方が、そのときの僕にとって苦痛以外に何があるというのか。

しかし、山を下りた後にはあのときの苦しさを忘れて、いやあの苦しさがおもしろい思い出に変わってしまうのだった。それに中学、高校と3年間部活をやり遂げてきた自分には中途半端に辞めることにはためらいがあった。

だが結局、辞めてしまった。しかし、辞めて言うのは何だが、本合宿は辛いことがほとんどだったが、沢登り、山スキーと個人山行はおもしろかった。

ともかく中途半端で辞めてしまったことは、1年間ずっとやけに引っ掛かっていた。空手の他にもやりたいことがあった。自転車で日本を縦断してみたかった。だが、夏休みにやる予定で貯金をするつもりがいっこうにお金はたまらず、自転車も買えずに終わった。

夏休みは10万円くらいの予算で沖縄に行った。以前から行ってみたかった西表島に行くためだった。イリオモテヤマネコで有名な島だ。本州にはない植生の森の中を一人で歩いていたら、道に迷って沢を下降した。普通の人が行かない湾へ森を1日かけて通り抜けて行ったりした。真夏の40度の暑さの中で歩くのは苦労した。1年間、山のほうにばかり行っていたこともあるが、海の青さ、きれいさには本当に驚いた。

こういう海でカヌーを漕ぐのもおもしろいだろうとか、アダンというアロエの鬼のようなものの群生地帯に入って身体中傷だらけになったり、その湾の主と呼ばれている老人に道案内してもらったりした。パイナップル農園で丸々1個採れたてをもらった。

石垣島では椎名誠が映画を撮ったサンゴがきれいな海で地元の人と一緒に泡盛を飲んだり、赤石と言われている人が、めったに人がやってこないビーチで素っ裸になって泳いでいたりした。

沖縄の旅は2週間くらいでお金がなくなて終わってしまったが、非常に有意義なものであった。

アウトドア全般（山登り、釣り、カヌー、自転車など）に興味があって、アウトドア系のサークルを見て回る学生は多くいると思う。山岳部はアウトドア系であるが、文字通り山登りのみにイメージが固定化してしまっていて、先鋭的に岩壁を登ったり、または汗くさい、きついというイメージしか一般の人にはないと思う。汗臭くてきついのは当たっているがそれが全てではないし、良いところもいっぱいある。

現在、部員は4名と非常に少なくなっているが、それに悲観することなく頑張ってほしい。部員が少ないぶん、一人あたりの予算は多く使える。それでも矛盾することをいうが、人が多くいたほうが面白いし、仕事の負担も軽減される。まずは部員大量入部をさせるために少しでも興味を持ってくれた人や興味の

ない人でも言葉巧みに（ウソも方便）入部させてしまう。海外遠征も予定しているが、これもいい傾向だと思う。山岳部をやっていて海外旅行に行くことは日程上、あまりできそうにないことだったが、普通の学生は毎年のように行っている。それを見て行きたくなる部員も絶対いると思う。事実、僕も行きたかった。そういう部員の自由な意見・発想をうまく取り入れて新しい活動をしていったら面白いような気がする。現部員でアルバイトをしている者はいないが、お金がネックとなってやめていった人もいることだしアルバイトをする環境・日程調整もしっかり考えたほうがいいと思う。

僕は１年間、部活を辞めてふたたび山岳部に戻ったが、やっぱりそれだけ山岳部というものに魅力にあったからだと思う。大学４年間が終わるに当たって残念なのは山岳部を４年間やって卒業できないことである。僕が山岳部から離れた１年間は有意義であったし、その体験なしで、山岳部を続けることはできなかったかもしれない。辞めないで続けられる柔軟性も必要であるし、個人でも自分の意見を通していく、いかに自分が面白くしていけるかが、結局、山岳部の盛り上がりに結びついていくことになると思う。

山岳部にはまってしまう人、はまれない人

２年　小林州行

山岳部にははまってしまう人間とそうでない人間との違いは、自分のやりたいことに目標があるかないかだと思います。

たとえば、ＡくんとＢくんが同時にパソコンを始めたとします。２人ともまったくの初心者です。

Ａくんは「パソコンができるようになるため、まずwordができなくては」と考え、『サルでもできるwordの本』を買ってきて練習しました。次に「Excelもできないといかんだろう」と考え、ひたすらExcelについて勉強しました。「住所録もつくらなくては、年賀状も写真の編集もインターネットもメールもとにかくいろいろできないと…」。ところがＡくんはしばらくするとパソコンがだんだん嫌になってきました。「難しい言葉がたくさん出てくるし、配線も邪魔くさいし、インターネットも初めのうちはおもしろかったけどもう飽きたし…」

次第にパソコンに触れる機会が減っていき、いまではもうパソコンは部屋の隅っこで埃をかぶった置物になってしまいました。あんなに楽しみにしていたはずのパソコンも、興味を失うとどうでもよくなってしまいます。

一方、Ｂくんはとっても助平なやつでした。Ｂくんはエロゲームを買いに行きました。一番Ｈそうなソフトを選び、家に帰って早速やってみました。「うっひょー！」。そのうちにエロゲームの映像をもっと速く動かしたいと思うようになり、そのためにはどうすればいいだろうかと調べ始めました。知識のないＢくんでしたが、道楽のために頑張ってメモリーを足しました。「おっ、速くなったぞ」。さらにインターネットにはＨな情報がいっぱいあるという噂をもとに、「こりゃたまらん」。Ｂくんは究極のエロゲームを求めてどんどんパソコンにはまっていきました……。

たとえ話が若干長くなってしまったような気もしますが、決して山岳部と関係のないことを書いているわけではありません。

Ａくんが山岳部に入った場合、初めのうちは知らないことばかりで楽しくやっています。ところが続けていくうちに、ザイルワークを

覚えなくては、講義録も、トレーニングもと……。だんだん面白くなくなってきて、やめたくなってきます。

Ｂくんは岩に登るのがおもしろいなあと思います。そうなると岩の本を読んでみたり、フリークライミングに行ったりするようになります。「あの岩に登るためには技術が必要だ、体力も、知識も…」。幸か不幸か、Ｂくんは気がついたら山岳部にはまっていました……。

Ａくんタイプの人間にＢくんのようになってもらえたらよいのですが、どうすればそうなるのかは分かりません。Ａくんが面白さに自分が気づくように、諦めないで機会を与え続けていくことがとりあえず必要だと思います。

どんなことであっても自分のやりたいことに目標を持って一生懸命やればいつかは一人前になれると思います。

山岳部を１年間やってきて思うこと

１年　石川重樹

山岳部での１年間を振り返って思うのはいろいろありすぎて、纏まらないが、まず第一にあげられるのは、すべてが新しいものへの挑戦だったということだ。3000m級の山へ行くのも初めてのことだったし、30キロの重荷もそうだったし、フルマラソン、スキーも生まれて初めての経験で新鮮だった。

なぜ山岳部に入部し、続けているのかという問いに対して、好奇心を満たすため・他人にはできない、自分にしかできないという一人よがりの誇りがあるため・偉大な先輩方に真の男の姿を見いだし、自分もそのようになりたいと憧れるため・単なるナルシストのため・なぜクライマーは命と金を賭けて山へ登るのかを突き止めるため・普通の生活では味わうことのできない感覚（充実感、征服感、生命感ｅｔｃ）を味わうため・社会勉強をするため。

以上、主たる答えをあげてみたが、まだまだたくさんある。

山岳部に入って視野が広がったとも思う。これまで娑婆の世界しか知らなかった自分が壮大な自然を相手にしている人たちがいることを知った。そして自分もその自然を知った。人間がいかに弱い存在であるか、自分が生きていることが不思議だと思った。自分のことを心配してくれる人たちがいたし、応援してくれる人、反対する人、いろいろな“人”を知った。

近頃、自分がいかに大きな組織に所属しているか感じている。数々の記録と多くの名クライマーを生んだ“日大山岳部”という組織の歴史と伝統を。そして、この看板を背に係わってきた人たちは、いくつになっても目の輝きを失っていない。凛とした一本の筋を感じる。たぶん、本人たちは意識していないのだろうけど。

ある人から聞いたことがある。「人が人を癒すには限界がある。結局、人は自然に癒される」。本当かどうかはわからない。だが、たしかに自然には厳しくもあり、美しくもある。ただ楽しいだけでは自分はやっていない。

学生時代にしかできないことをやれとよくいわれる。いま、なんとなくわかるような気がする。いましかできないこと、自分にしかできないこと、それを見つけるのが学生時代だ。山岳部に入ることができて運がよかった。

エベレストの写真集を見ていたら、裏表紙に作詞家の阿久悠の詩が載っていた。

「崇高にして傲慢な神　夢という甘い重いを

打ち砕く　山が微笑むわけでもなく　侵すべからずと拒みつづける中で　怒りにも触れずお咎めもなく　スックッと誇り高く立った男たちが　心の旗を翻したことを　思い浮かべてみるがいい　萎えた心では進めない　嘆いていては歌えない　最後の一歩が希望そのものであったように　それぞれの人の無念に快挙の旗が立てられる」（一部抜粋）

世界最高峰のエベレストの頂への最後の一歩は希望そのものだった。人という小さな存在が、自然の頂点に足跡を残した。それはこの詩の怒りにも触れず、お咎めもなかったからだ。人が自然に立ち向かっていても、当人は、はるか彼方。自然は大きい。

私の食糧日記

1年　京増朋子

1年の初夏か夏合宿で、今回の合宿は食糧係をやってみようと決めたら、いつの間にか部の食糧長になっていました。献立を立てる際に難しいことは、予算、生ものはあまりあとまでもたないこと、重さ、そして何より全員で食べるので人の好みがあるということです。食糧係は自分だから、献立は自分の好みでいくぞ、というわけにもいきません。私の好みにしてしまうと、毎日お茶漬けとか、毎日チョコボールとかになってハチャメチャになってしまいます。

献立を立てるなんて最初はスゴく嫌でした（というより、いまも好きではないです）。しかし、いい加減な献立を作るのは、食費を出してもらた部員の人たちと、料理される野菜に失礼なのでそういうわけにもいかないのです。

その点、個人山行で何を食べるかということになると、自分の好きなものを食べたいだけ持って行けるので、買い物をするときには気合が入ります、みんなで交換し合えるというのもいいです。ＯＢの方から、沢に行ったときに、岩を熱くして肉を焼いて食べたよという話を聞いたとき、『おおっ、スゲェ！　沢の楽しみ方を知ってるな』と感じました。一泊二日くらいの山行だったら、かなり自由が効くので、おもしろい山行になると思います。岩で焼肉……一度やってみたいです。

合宿中、朝起きたときに飲む紅茶は、紅茶を飲むことに意味があるのか、それとも水分と糖分を摂ることに意味があるのでしょうか。聞くところによると紅茶には何か意味があるらしいです。

それと、部にある大鍋はスゴイです。何がスゴイって鍋底の中心がぼこっと盛り上がっているので、油を入れてものを炒めようとしても全部油が脇にいってしまうので、炒まっているというより揚がっているという感じでほとんどしゃぶしゃぶ状態なのです。おもしろいといえばおもしろいのですが、結構手間がかかります。いったいなんでああなってしまったのか。

初冬山行で初めてペミカンを使い、酢豚が夕食だったとき、私は酢豚というものが、とろとろしたものだと思っていたので、それなりに水を入れると「水はたっぷりね」と先輩にいわれ、ペミカンがたくさん水を吸うものなのかと思い、できてみるとやっぱりスープになっていて『酢豚じゃないじゃん！！！』と驚きつつも、なかなか美味しく食べていたのを覚えています。

合宿の食事はまずい！　といっても、山で食べているときは結構美味しく食べているような気がします。しかし、いったん下山して、ごった混ぜになったレーションを見るのはつらいです。

「今日のメシは〇〇だ！　頑張ろうぜ！」
　そう声を出せる献立を立てるべく、食糧係の道を歩んでいこうと思います。

＊補足
・食糧係：合宿中の献立を作成。在庫をチェックし、買い物リストを作成する。
・生もの：夏合宿では肉の保存は炒めた肉を味噌漬けにする方法が主流。塩漬けにしたこともあったが、塩辛くて食べられず。
・朝の紅茶：有力な理由は新陳代謝を高めるためだとか……。そのほか、凍傷防止のためだともいわれる。
・大鍋：主に夏合宿で活躍。たいてい１年が背負う。パッキングが難しいため、大鍋担当になるとショック。ザックの外側にくくり付けるため、底が自然とボコボコに。
・ペミカン：たっぷりの油を使った野菜炒めを冷し固めたもの。山では湯で溶かし、さまざまなルーを入れていただく。冬山で活躍。以前はラードを使用していたが、中村進ＯＢの「体によくない」という指導で、92年、食糧長だった中村順哉ＯＢがサラダ油を導入。
　現在、大学山岳部でペミカンを使用しているのは日大山岳部と早稲田大学だけといわれる。他大学では手作り乾燥野菜を使用しているところも。例・東京農大、成溪大。（快記）

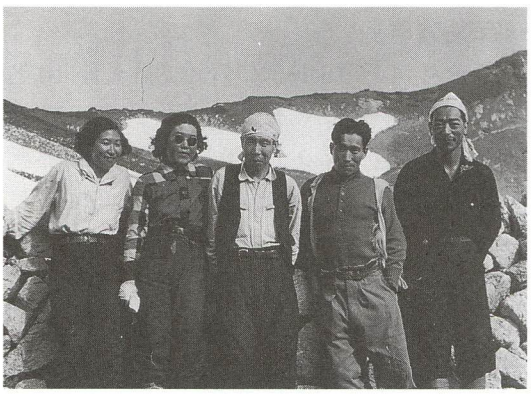
寄　稿

出　会　い

千谷　雅子

若い頃の願望のひとつに結婚しても、山に行きたいという思いがあった。

戦争中、友人達と奥多摩あたりをぼつぼつと歩きはじめ、戦後何も分からないまま、日本山岳会を訪れた。御茶ノ水のルームの雰囲気が楽しかった。



（左から）私、水掛その子さん、千谷壮之助、佐伯文蔵氏、金坂一郎氏
（剣沢小屋前にて、昭和 26 年 7 月 28 日撮影）

昭和 26 年、彼に出会い、生まれて初めての高山、剱岳に連れていってもらった。彼にとっては､随分とお荷物の山行だったと思う。その後、どんどん山にのめり込み、穂高へ、剱へ、そして縦走と、彼と一緒に歩いていれば何の不安もなかった。

そして彼はマナスルへ、しかし決して人様の前で、それを口にすることはなかった。

そして結婚、スキーに、山に、休み毎に足を運んだ。子供ができてからは、山から遠ざかったが、スキーだけは、山岳会以来の友人達と子供連れで楽しんだ。夏は海にと子どもを主体とした生活になり、彼もずっと付き合ってくれた。

子どもが成長し、二度目の山行ができるようになった。彼との山行は、昭和 62 年の剱岳を最後に、以後彼は古墳や歴史的に興味のある場所にせっせと通い、後にはスペインに何度も通い、その写真の数はおびただしい。

彼はどこへ行くにも、勉強して行くことを望んだ。ヨーロッパでは、二人だけのトレッキングも楽しんだけれど、「山だけでなく､都市も見なさい。ドイツ語ももういっぺん勉強して」といわれた。彼自身は、英語、ドイツ語、フランス語、そしてスペイン語の勉強と、グリンデルワルドでは、イタリア語も通じたのでびっくり。

子育て後、私は女二人で山行を続けた。彼は何も言わずに出してくれた。よくぞ信用していてくれたのかなという感じでした。

そして阪神大震災、すぐに関西在住の方々の安否を確かめ、皆無事だったよといい、一人神戸の方のみ、家の倒壊で彼独特のお見舞いやら、元気づけをずっと続け、彼亡き後今でも奥様から、「壮之助様のあの時の言葉は忘れられない」「思い出しても涙がこぼれる」と書いてよこされる。彼は、誰にでも誠実な人でした。

いつもわがままな私に付き合ってくれ、希望通りの人生を送らせてくれた。いつも山の景色の中で、ゲートルに紺のチョッキ、ソフトか手拭をかぶり、岩の上に立っている後姿が忘れられない。

山行中、疲れて文句をいうと、彼はいつも「仕方がないから歩こうよ」と言った。
長い間を本当にありがとう。

《編者注》この追悼文は、千谷壮之助氏の夫人より、在りし日のご主人を偲び生前寄せられた愛情に対し感謝を込めて寄稿されたものである。

初登頂！

リャンカン・カンリ7535m

中村　進

1999年の春、日本リャンカン・カンリ登山隊に参加した私は、幸運にも中国チベットに屹立する未踏峰リャンカン・カンリを初登頂することができました。ここにその概要をご報告させていただきます。

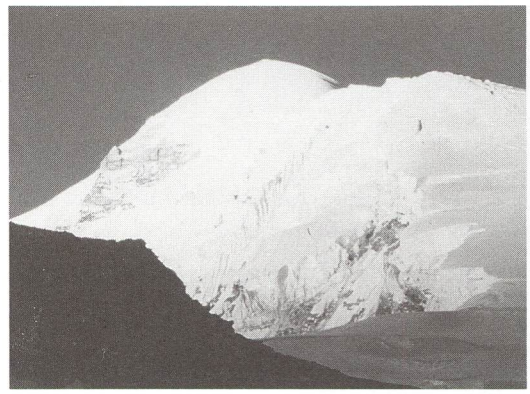
この登山隊は当初、日本山岳会ガンカー・プンスム登山隊として出発し、1998年の秋、隊長伊丹紹泰、中村進、山本篤、及び、読売新聞社の井原敦、宮坂永史の5名でガンカー・プンスムの偵察を行いました。この偵察の時、ガンカー・プンスムから北に伸びる稜線上に屹立していたリャンカン・カンリを望み、この山がいまだ誰一人足を踏み入れたことない人跡未踏の山であることを確認しました。

一方、ガンカー・プンスムの登山は日本山岳会に不測の混乱が生じ、中国からも登山延期を要請されたため、登山計画は白紙に戻ってしまいました。それもすべての隊荷の梱包を終えた、出発1ヶ月前のことでした。

一旦は解散しかけた登山隊でしたが、リャンカン・カンリ峰なら登山の可能性がありましたので、日本山岳会から離れ、日本リャンカン・カンリ登山隊を組織し改めて中国に登山許可を申請しました。その結果、中国登山協会から直ちに許可が下り、さらに多くの岳友たちの支援を得て実現に至りました。

一方、この登山は日中登山交流２０周年記念として、中国の特別な配慮、ご協力を頂いて行われた登山でもあります。

では、以下に登山行動の概要をご紹介します。



リャンカン・カンリ（７５３５ｍ）（撮影小林尚礼）

《行動概要》

1999年4月18日、伊丹紹泰隊長他10名の隊員はジープ、マイクロバスに分乗、隊荷を積んだ大型トラックと共にチベットの区都ラサを出発。10時間ほどで、海抜4500mにある最奥の村、ヨジツォンツォに到着。

村からは馬を利用し、2.5トンの隊荷を2日がかりで4750mのBCへ運搬。4月21日、リャンカン氷河とナムサン氷河の出会いにBCを建設。

23日　登山活開始。
25日　5350mにＣ１を建設。
26日　Ｃ２へのルート開拓に成功。
28日　荷上げ開始。
30日　荷上げ、Ｃ２入り。
5月1日　Ｃ３ルート工作。
2，３日　Ｃ３への荷上終了。
09日　第一次アタック隊初登頂に成功。
10日　第二次アタック隊も登頂に成功。
15日　BC撤収。

ガンカープンスム偵察の成果もあり、登山は順調且つ、非常に早いペースで進行しました。心配していた下部アイスフォールも安定しており、約１１ピッチのフィックスを張ってルート開拓に成功。その後、さしたる困難もなく６９２０ｍ地点にＣ３となるアタックキャンプを設営。BCで2日間の休養をとっ

た後、5月9日、１０日の二日間に亙って10名の隊員が初登頂しました。

《この登山の特徴》

一、短期間の登山

この登山はBC建設から登頂まで１８日間と、早いペースで進行し、さらに、殆どの隊員が６９２０ｍのＣ３に一度の往復のみで、BC休養を経て７５３５ｍの頂上アタックを行い、高度の影響も受けずにうまくゆきました。その理由としては、全員が高所登山のキャリアを十分持っていたことと、ルートがさほど困難でなかったことなどが上げられます。

一、9大学からなる混成パーティ

この隊は明治学院大、日大、明大、信州大、立正大、京都大、愛知学院大、成城大等、異なった9大学からなる11名の隊員によって編成されましたが、一糸乱れることのないチームとなり、初登頂をものにしました。そこには、お互いに尊重と協力の精神を損なわなかったことが上げられます。

一、初登頂と若者の成長

未踏の山へのチャレンジは、すなわち未知への領域を切り開くことになりますので、登山者は本当の自分の力が試されます。

ですから、その未知の領域を切り開いたとき登山者は最高の充足感と自信を獲得してゆくことになります。

この登山にはすでに8千メートルを6座も登頂した山本君やＫ２、マカルー、マナスルなどを登頂した高橋君、竹内君、加藤君などがいましたが、その彼等がリャンカン・カンリの頂きに立ったとき、涙を流し、最高の充足感に達したのは、自らの力で未知の領域を切り開いた初登頂だったからに他なりません。

その後も、高橋君、竹内君、加藤君らがＧⅡ、ＧＩ連続登頂、ナンガパルバート等で活躍していることは十分うなずけることです。「山がそこにあるから」ではなく、「その山が未知なる山だから、まだ誰も登ったことがないから」これが私達を山に駆り立て、高め、そして登山を最高に面白くしてくれることと言えるでしょう。

リャンカン・カンリ、いい登山でした。

リャンカン・カンリ（7535m）山頂
（左から）山本、中村、高橋Dr. 佐藤

『日本リャンカン・カンリ登山隊１９９９』

隊　長　伊丹紹泰　明治学院大学山岳部OB
副隊長　中村進　日本大学山岳部OB
登攀隊長山本篤　明治大学山岳部OB
登攀Ｌ　鈴木清彦　愛知学院大学山岳部OB
隊員　角谷道弘　信州大学山岳部OB
小林尚礼　京都大学学士山岳会OB
竹内洋岳　立正大学山岳部OB
高橋和弘　明治大学山岳部OB
加藤慶信　明治大学山岳部OB
高橋純一（医師）京都大学山OB
佐藤大輔（通訳）成城大学山岳部OB

カンチェンジュンガ北面

1998年日本山岳会青年部カンチェンジュンガ北面登山隊に参加して

平成4年生産工学部卒
山本　茂久

学生時代からあまりヒマラヤ志向ではなかった私が、3年前初めて本気でヒマラヤに行きたいと思ったのだが、なかなかうまくいかなくて困っていたときに今回の話がやってきた。“カンチ北面・谷川隊長”ということで即決したが、隊長以外殆ど面識が無いメンバーと果たしてうまくやっていけるかが少し心配だった。

準備が始まって皆と話すうちに、個性的だけどいい人達に会えたと思った。実際の準備が始まると、皆が時間を作って作業を進めて行く中で、仕事を理由に自分だけあまり手伝うことが出来ず心苦しかったが、そのことに一切文句を言わないメンバーに感謝した。

今回の登山が、ヒマラヤに限らず海外登山初体験の私ではあったが、いままで他の遠征の準備を見たり、報告を聞いたりして大体のことは想像がついたつもりだった。しかし、実際に準備をして、登山を始めると、想像を超えたことが沢山あり、それぞれに感動したり、驚いたり、反省したりと、ここに書ききれないほど沢山の経験をした。

今回高所初体験の自分は実際にどの程度高所に順応出来るのかが、当然のことながらまったく分からず、どこまで行けるのかとても興味があった。しかし、キャラバン2日目からすでに調子が悪くなり、BCにいてもいっこうに良くならない。キャラバンの間も皆と順化行動をしっかりやってきたし、これで高山病になるようではこの隊ではついて行けないと自分に言い聞かせていた。しかし、トレーニング不足を後悔しながらも、こればっかりはそういうレベルではないなと思った。

登山活動を始めてから、C1との往復をするうちに調子が良くなるかと思った。しかし、下りの時だけ調子が良く、BCに着くと再び頭痛と吐き気と下痢が襲う状況が続いた。2回目の荷揚げの前に田辺さんから一旦降りるように勧められたが、ここで降りたら荷揚げを続ける皆に申し訳が立たないし、体裁上もう復帰出来ないだろうと思い、行けるだけ行くことにした。しかし、結局出発直後にあまりにも弱々しい自分に気づき、そのまま1000m下のカンバチェンまで降りることにした。

カンバチェンまでその日のうちに下ると頭痛はおさまったが、胃痛と下痢は変わらない。とにかくここで飯が食えるようにならないと、BCへは戻れないと思った。一緒に付き添って来てくれた、キッチンボーイのマハビールが色々と気を使って食べ易いものを作ってくれるが、最初はなかなか食べることは出来なかった。ここでの2日間はゆっくりとした時間の流れの中で、散歩をしたり、ヤクを眺めたりしながら、あせらずのんびりと過ごした。そして、休養2日目の夜には腹いっぱいタルカリを食べられるようになり、BCへ戻る自信がついた。

3日目になる4月8日にカンバチェンを出発。キャラバンのとき8時間かかった道のりを、たった3時間でロナークに着く。体も非常に軽い。あらためて高所順応の影響の大きさを知った。BCに着くと、「1日休養して、C隊のメンバーとして荷揚げに加わるように」との指示があった。3日も荷揚げを休み、順応にも問題がある私は、もう登山活動に戻

ってはいけないのでは、と思っていたので、この指示は非常に嬉しかった。

その後の荷揚げでは順化はスムーズだった。しかし、体調が良くても経験あるメンバー達のペースには追いつけなかった。

登山は強力なメンバーの力で非常に順調に進んだ。A隊の谷川、赤坂、奥田、B隊の田辺、広瀬、椎名という経験豊かなメンバーのチームが交代でトップに立ち、C隊は経験が無い山本、中村、大橋を経験者の長久保が引っ張る形で荷揚げに徹した。3隊がそれぞれ自分の仕事をきっちりこなしたため、C1~C2、C2~C3、C3~C4とそれぞれ技術的に難しい部分があったにもかかわらず、スムーズにルートは延びていった。

C4（7900m）の設営が完了し、全員がC4までの荷揚げをこなした時点で、全員が頂上アタックできる体制が出来上がった。

今回は1回もルート工作に加わることも無く、僕ら初心者3人は、他のメンバーに気を使ってもらいながら荷揚げを続けたのだが、本当に力の差を強く感じた。と同時に、こんな私でも頂上アタックのチャンスがあったということは、隊全体の力が強かったということだと思う。

一次隊が登頂するまでは何のトラブルも無く、みんな良い雰囲気を作ってやってきていただけに、残念な結果になってしまったが、もし、一次隊が成功して、自分がアタックに出ていたら、と今になって考えるとどうなったかは分からない。この答えが出ない限りは、このスタイルでこのクラスの山に挑戦することは出来ない。しかし、今回のスタイルは国内の登山の延長で考えられる、とてもシンプルな登山が出来たと思う。

ヒマラヤ登山では、ルート選びよりも気の合ったメンバーを集めるほうが大切だ、という話を誰かから聞いたことがあった。今回はルートも良かったが、メンバーはもっと良かったと思う。

素晴らしい経験をさせてくれた素晴らしい仲間に感謝したい。そして、今は無き2人の仲間の冥福を祈って…。

韓国クライミングツアー

緑風たちぬ～韓国・仁寿峰

1999年AUTUMN

鈴木快美

動機は不純だった。

99年1月、冬季アジア大会の取材で韓国を訪ねた私は、警備にあたる軍人3人から、ラブレターをもらったのである。それは「一目会ったときから僕の世界が変わった」「一緒に未来を築こう」という熱烈な内容だった。当然ながら私はそんな経験をしたことはない。気をよくした私は、“いーじゃん韓国。また来よっ！”と心に決めて、帰国の途に着いたのだった。

そしてその願いを叶える絶好の機会はすぐにやってきた。5月の下旬、『岳人』をめくっていると、韓国ソウル市内にある仁寿峰という山が、日本からすぐ行ける“プチ・ヨセミテ”として紹介されていたのである。

くわしく読み進めると、仁寿峰はダイナミックなスケールを誇る岩山で、しかも5.9程度のルートも数多く存在するという。しかも私の苦手なカチ系（つまり石灰岩とか）ではなく、スラブ系（花崗岩とか）で構成されているとのこと。体が重いせいか少しでも岩がかぶると、まったく身動きができない私にとって（当時、体脂肪32%）、微妙なバランスで登っていけるスラブは、まだ攻略しやすい

岩質といえた。つまり、仁寿峰は私にも登れるということである。

そう判断するやいなや、さっそくパートナー探しが始まった。ターゲットは大学6年生で時間ならたっぷりあるひとつ下の宇田川勲である。本を読み終えるとすぐ電話した。

「もしもし、あのさー、7月に韓国にフリークライミングしに行こうよ」

彼の地での楽しかった日々を回顧し、1日も早く同じ状況に身を置きたかった私は、2カ月後という急いだ申し出をした。しかし、当然ながら宇田川は私の魂胆を見透かしたようにこういった。

「何いってるんですか。2カ月後なんてダメですよ。だいたい鈴木さんは5.9リードできるんですか。ちゃんとトレーニングしてったほうがおもしろいですよ」

まったくぐうの音も出ない答えである。こうしてこの翌週から9月の出発まで、小川山に毎週通うという生活が始まったのである。

小川山でのトレーニングは、私はスラブ、クラックの5.9、宇田川と新たに加わったメンバー小林州行は、5.10を9月までにリードできるようになることを目標に掲げることになった。この設定の低さをあざ笑う先輩もいたが、フリークライミングが苦手な私にとってはけっこうなハードルである。また「センスがない」といわれ続けてきた宇田川にとっても大変なことだっただろう。何故なら学生の夏山合宿にも同行し、夏の2カ月間、入山日数48日という驚異的なことをやってのけてもいたのだ。ただ小林だけは例外で、あまり小川山に来られなかったにもかかわらず、出発直前、宇田川がやっと登れたルートをやすやすクリアーし、宇田川に苦々しい顔をさせたこともあった。

そしてときは巡る。4カ月もの小川山通いが終わり、9月17日、韓国行きの日がやってきた。装備は日本とまったく同じで、これぞ、日本の山登りの延長ってやつである。小林が学生だったのでコーチ会に計画をチェックしてもらったが、それもたった1回で終わった。理想的な海外遠征の形だ。うきうきした気分で日本を発ち半日経たないうちに、ソウルに着いた。

市内からタクシーで30分ほどの仁寿峰の登山口は、ピクニック客も多く、奥多摩みたいな雰囲気のところだった。中高年の登山者が多く、おばちゃんがかしましいのも同じで、山小屋の従業員という感じの背負子を背負った人がいる。出っ歯にした歌手の長渕剛に似ている。思わず、じっと見ていると長渕もどきはこういった。「ハリケーン、カミング」

空は青空。えっ！　という感じである。聞き間違いかと思ってもう一度尋ねた。しかし、彼は同情するように繰り返した。「トゥモロー、アンド、アフタートゥモロー、ハリケーン」。

そして悲しいかな、この言葉どおり仁寿峰は雨に祟られることになるのである。

登山口から1時間ほどで拠点となる白雲山荘に着くと、さっそく取付を探しに行った。取付を見つけると、韓国の大学生らしき人たちがすでに登っている。岩場は『岳人』に書かれていたとおり、巨大な洗濯板をゆるやかに斜めにしたような岩場で、勢いをつけて走ればそのまま登れてしまうような印象だ。そしてやはり『岳人』にあったとおり、1本1本のピンの位置が異様に遠く、やけに恐ろしい。それなのに大学生たちは下から2、3本目にいるにもかかわらずランニングビレーもとらず、洗濯板の上でぶらぶらしているのだ。落ちたら滑り台のように着地できそうではあるが、そううまくはいかないのは間違いない。韓国人は熱き魂の持ち主であるらして、

登り方も豪気なのだろうか。トリッキーさをできるだけ遠ざけたい私にとって、信じられない光景だった。

そしてこの日、空は晴れから曇りに変わり、やがて雨に。大学生を眺めたあと、ロープ1本で登れるフリールートで遊んでいたら、雨足がさらに強くなり小屋に帰るはめになってしまった。

翌日、さらにその次の日も長渕もどきのいうとおり、台風接近で雨となった。たしかに9月は台風シーズンまっさなかだが、まっ、大丈夫でしょ、という浅はかな目論見は完全に外れたことになる。

しかし1週間の滞在を予定していた私と宇田川はまだましだった。気の毒だったのは、4日間しか韓国にいられなかった小林である。あっという間に帰国日を迎え、結局、初日に登ったフリールート1本だけに終わるはめになった。お土産用に購入した栗を片手に空港奥へと進む小林の背中は、さすがに哀愁が漂っていた。しかし、なぜ小林がわざわざソウルで大量の栗を買ったのか、はたして税関を突破できたのかは、いまも謎である。

さらに小林が帰国した翌日も雨となった。きっと登れるだろうというかすかな希望が遠のいていく。だがこの日は暗い気持ちを慰める出来事が起こった。ソウル市内観光にも飽き、小屋でうなだれる私たちを気の毒に思ったのか、もうひとりの小屋の主、金さんが「食事で使う松を取りに行くついでに、周辺を案内するよ」と申し出てくれたのだ。

金さんは、いかつい顔にきついパーマでかなりの強面（しかも田中輝似）なのだが、フルートを奏で、ボルトが壊れても、「岩を傷めるから」という理由で、古いものをきれいに抜き取ってから、同じ場所にボルトを打ち込むという美学の持ち主だ。昨晩、午前1時すぎまで飲み明かしたときも、晴れたらナイトクライミングに連れていってあげるとと話してくれた（ちなみにナイトクライミングとは、月明かりのある夜、岩登りするというもの。ソウルの夜景が一望できてそれは美しいそうだ）。インテリジェンスを漂わせる渋い山男であった。

金さんとのピクニックはスリリングに展開した。途中で雨がアラレになり、短パンの私は9月なのに凍えそうだ。しかも仁寿峰と双耳峰をなす主峰の白雲台山頂までは普通の道を通ったのだが、以降は道なき道というか、崖を行った。スラブの一枚岩をずりずり下りたり、『タイガーケイブ』という洞穴を四つんばいでくぐったり……。金さんは屈強な体の持ち主でもあり、決して普通のピクニックをさせなかった。あとから聞けば、このルートも本来、上級者ピクニクラー向けガイドルートのひとつだったらしい。90分くらい案内してくれたあと、まだ仕事があるからとどこか山奥に消えてしまった。

午後は「そろそろ体がなまってきたね」と宇田川と意見が一致し、あらかじめ日本でチェックしておいたクライミングジムに行くことにした。地下にあるそのジムは、壁一面落書きがしてあり、昔の学生運動の本拠地みたいなところだ。しかも、そこで登っている男性はみな、異様に鍛えられた体がチラチラ見えるタンクトップを着ていて、そろって自信ありげなのが気になる。日本にいる間、宇田川は体に自慢を持っていて上半身を見せて登りたがっていたので、私は内心『うざいなあ』と感じていたのだが、ここでは完全玉砕である。Tシャツを着て恥ずかしそうに登っているのでげらげら笑った。

そして帰国前日、登るチャンスがとうとうやってきた。この日は曇りでいつ降りだしてもおかしくなく、すこし迷った。しかし、今日はもう最後。迷ったら行くしかない。だめ

だったら下りてくればいい。なんとかなるだろう。

ルートは仁寿Bを選んだ。30mのクラックが続く人気ルートである。準備を完了し、宇田川に先行してもらうと、途中、すこしかぶったところで小雨がぱらつく。その手前で一度落ちた宇田川が、さらにひるんでいる様子がわかるが、なんとか1本目を完登する。しかし、苦戦したのはここだけで、あとはぐんぐん高度をかせいだ。

60mのロープをめいいっぱい伸ばして先行している宇田川の姿は見えないが、楽しんで登っていることがロープを通して伝わってくる。彼の登ったあとを辿るとそれも納得で、クラックにはさんだ指と足がきっちりはまり、階段を上がるようによじれる。恐怖感なしに高度感を感じられる快適バランスがいいのだ。また途中で雨もやんで、さらに高みへ行くと、風が吹き抜けますます気持ちいい。私にとって、初めての岩場はいつも怖い存在でしかなかったが、ここでの約3時間、感じていたのは終始さわやかなすがすがしさだった。

山頂ではソウル市内が眼下に広がった。

街に出ていた間は、街のどこかしこにある赤の色彩、そしてハングルに酔ってしまいそうだった。とにかく極彩色ないろどりに心が休まらない気がした。降り続く雨にどこかいらいらしていたのだろうか。

しかし、ここから見るソウルは緑色が目立つ穏やかな街だ。ひとつの街に対する印象が、あまりに違うことに軽い驚きを覚える。高い山は見えない。ゆるやかな大地が大陸的に広がっている。「ああ、登れたのは1本だけだったな」とつぶやくように思う。でもまあそれもよかろう、とりあえず登れたのだから。とにかく山頂は気持ちいいし、晴れやかな気分だ。いまの仁寿峰にまつわる私の記憶は、最後に山頂から眺めたときの印象を持って完結している。

DATA

■アクセス

仁川空港からタクシーで登山口「道成寺（トソンサ）」に行ってもよいが、地下鉄4号線「水踰（スーユ）」駅で下車し、タクシーを使ったほうが安上がり。登山用品を購入したい場合は、東大門へ。登山用品店街あり。韓国製のフレンズなど、日本の半額で買える。

■装備

ロープは60mがベスト。50mの場合、下降用に2本必要。カム類は最低3セット。＃4、5を多めに。シュラフ、マットは必携。

■情報

『岳人』163 号がもっとも便利。『岩と雪』136 号、163 号、書籍『韓国の岩場』（カモシカで小冊子で売っている）、星稜登高会会報13 号、インターネット上でも仁寿峰で検索可能。

■白雲山荘

一泊2食付き約 3000 円。食事はボリュームあり。・０２－９０７－７２４２

■言語

白雲山荘では基本的に韓国語のみ。スタッフによっては英語可。

■クライミングジム

入場料 400 円。交通）地下鉄1号線「祭基洞（チェキドン）」駅下車。6番出口。徒歩7分。住所）ソウル市東大門区ＹＯＮＧＤＯＯ洞２－42－119 、地下１階　・０２－９２８－４６７７時間）17:00 ～23:00 （土曜日は13:00 より）

追 悼

樋山君を偲ぶ

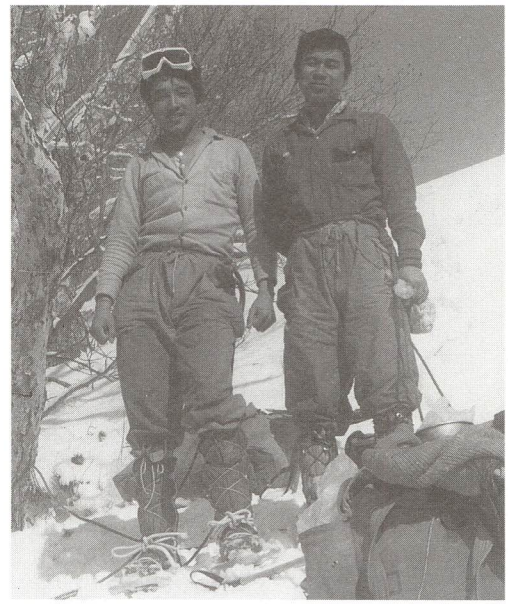
昭和45年卒　原田　洋

54歳の小生にとって二人目の追悼文となり「何故」と言わざるを得ない。40歳代で同期が二名他界する事はこの上も無く残念であり、アンウンの呼吸で話しが出来た二名がいなくなる事は自分の故郷がダムの底に沈んでしまった様な虚脱感に等しい。

樋山君の訃報を聞いたのは香港に在席していた時で、古畑兄より電話を貰い、まさかと思いながらも半年以上前の事を思い出した。出張で日本へ帰国してい時にシタツツラの仲間内の昼食会があり、其処で樋山君が肺にカビが生える病と知ったが本人は到って元気で私も大した病気では無いと思い込んでいた。ところが後で知った事だが、其の昼食会に出席していた連中は彼が肺がんである事を知っていた様だ。その時知っていれば何か出来たと言う分けではないが何か呆気ない別れとなってしまった。

「じゃ～また」が最後の会話だったと記憶している。香港に居た関係で葬儀にも出席出来なかった事が悔やまれる。

学生時代、一年生の頃は合宿でアゴを出すのは私か彼で、その面からも入部した時から気が合った。双方空気の様な存在と思っていたのか今思えば特別なエピソードがある訳でも無く、多分お互いに何となく同じ行動をしていたからかも知れない。四年生になって卒業したらニューギニアの旧スカルノ峰（カルステンツ）へ行こうとインドネシア大使館を訪問し可能性を調べた事があった。結果的にヒマラヤが解禁となりシタツツラへの遠征に繋がった。



在りし日の樋山君（左）と平野君

この遠征まではお互い同じ方向を向いていたがシタツツラから帰国後、数年後に彼は再度ヤルンカン遠征隊に加わり不完全燃焼の気持にピリオドを打とうとした。私は仕事一辺倒の生活で日本を留守にする事になったが、落ち着いたら再度昔に戻って新宿の飲み屋街を歩き回り度いと願っていた。自然の付き合いであったので、今でもヒョと電話が来る様な気がしてならない。重ね重ね残念である。

ご冥福を心から祈りたい。

平成7年11月10日逝去　享年48歳

伸司へ

宇田川　勲

思えばまことに短い一期一会だった様な気がします。

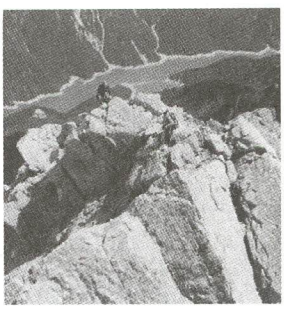
伸司と出合ったのは、平成六年の四月、農獣医学部のキャンパスでした。新人生の中でも背が高くガッチリとした体、そして厳つい顔は一際目立つものが有りました。入部した当時は「無愛想で話しにくそう」なんてことを思い、話し掛けることも少なかった様な気がします。また、伸司には直接聞いたわけでは有りませんが、だらしない所の多かった私をあまり好きではなかたのかも知れません。然し、月日が経つに連れ、伸司がたまに言うあまり面白くないギャグや、笑顔などを見るに連れ「無愛想で話しにくそう」という当初の印象は薄れ、話す事も多くなりました。
伸司と話すと、私の考えの足らなさや、また勇気づけられたり、どっちが上級生だか解らなくなる程、しっかりとした考えを持った奴だと感心させられることが多かったのです。

山に関しても、知識、体力、技術などもあり、何よりも山を好きなんだという気持が伝わってきました。一緒に山に行く事は少なかったですが、山へ行けば同学年内ではリーダーシップを発揮し、体力もある、技術もある、と本当にすごい奴でした。

何であんなに山の好きな奴を、山は奪ってしまったのだろう。私は伸司を助ける事が出来なかったのかと、悔やんでも悔やみきれません。

私は伸司に、今回の事故に対してどの様な償いが出来るのであろうか。私は伸司を生き返らせることはできない。私の命と交換することもできない。私にできることは・・・。今でも私の心の中には、伸司の笑顔、ギャグ、無愛想な顔など、さまざまな想い出が詰まっています。私は心の中にいる伸司に、私の目を通じて、おおくの山々を見せて上げたいと思っています。山の好きな伸司に。

また、伸司には迷惑かもしれませんが、これからの自分達の行動、そして山岳部に入ってくるまだ見ぬ後輩達を見守っていて欲しいと思います。（当時山岳部三年生）



土肥先輩をしのぶ

昭和37年芸術学部写真学科卒
今村　文彦

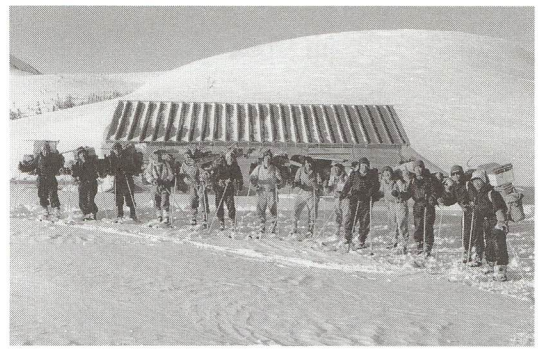
土肥先輩は、昭和9年卒の大先輩です。私の生まれる5年も前に山岳部を卒業された大先輩、親子ほども年が違います。たまたま同郷（富山県出身）と言う事で、会報編集者から私に追悼文の依頼がありました。

土肥さんにお会いしたのは私の現役時代ですから、かれこれ四十数年前の事になります。私は卒業以来東京を中心に、地方を転々とする生活で富山に帰ることもほとんどなく、親しく山の話しをうかがう機会を失してしまいました。お世話になっておきながら記憶があいまいで、文章にまとめる事ができず困り果ててしまいました。長女の淑江さんが東京にお住まいのことを思い出し、お会いして、お話しをうかがってきました。

いま私の手元に一枚の写真があります。昭和３６年の春山合宿下山の日、薬師・太郎小屋の前でスキーをはき、大きなキスリングを背負った１４人が横一列に並んで撮った記念写真です。撮影者の私を含めると、「１５人が参加した合宿だったんだ」と記憶が少しづつよみがえってきます。

あの頃、土肥さんは北陸電力の有峰ダムの工事に携わっておられたので、小見（現・有峰口）から折立までのトラック便の面倒を見てもらい、入山前日には全員が立山町前沢の土肥先輩のお宅に泊めていただいた。

淑江さんが中学生、妹さん二人は小学生、いくら父親の後輩とはいえ１５人もの野郎が突然押しかけていったわけですから、本当に驚かれたことと想像します。どのように食事をし、どのようにして寝たのか思い出せませんが、一家総出で温かく迎えてくださったこ



春山で土肥先輩宅に押しかけた現役達

とは記憶に残っています。

淑江さんの記憶の中で一番強烈だったのは、昭和３１年？夏山合宿赤痢騒動だった。体調不良で下山した数人の部員が土肥さん宅を訪問し、その後赤痢に感染していることが判明。「両親が留守のときに突然、保険所員がやってきて家中を消毒していったんですよ…」。「お墓は生まれ故郷の立山町下段の山のよく見える場所に建てました。戒名は浄岳院釈清渓、山の好きだった父のために特別につけてもらいました」と話してくれました。

土肥信義先輩は明治４３年１１月富山県中新川郡立山町下段村の林業農家の次男に生まれ、富山中学から日本大学専門部土木科に進まれ山岳部に入部されました。

昭和９年卒業後県庁などに勤められましたが、召集を受け技術軍属として横須賀に配属、終戦を迎える。戦後、立山町前沢に居を構え北陸電力に勤務されました。日大山岳部のホームグランド剱岳の麓とあって、歴代山岳部員、ＯＢが大変お世話になりました。

晩年、友人の佐伯文蔵氏（故人・剱沢小屋主人）らとヒマラヤトレッキングに出かけられたと人づてに聞き、お元気なんだなあと喜んでいましたが、平成８年７月帰らぬ人となられました。享年８５歳。

明治、大正、昭和、平成の四代を生きられた大先輩のご冥福を心からお祈り致します。

千谷壮之助先輩を偲んで

昭和27年工学部工業化学科卒
松田　雄一

マナスル会での千谷さん　1981年11月28日

マンスル初登頂の際、槙隊長と共にナイケ・コルで補給のための輸送指揮を担当、裏方として登頂成功に貢献された千谷壮之助氏が、平成8年8月5日早朝、入院先の川口私立医療センターで、心筋梗塞により逝去された。(享年88歳)

千谷さんは、大正8年1月27日、仙台市で千谷好之助氏の長男として誕生した。父君好之助氏は、当時仙台市の旧制第二高等学校の地質学の教授として仙台に赴任されている時であった。その後、幼少時代を東京・大森で育ち、昭和9年日大三中を経て日大予科理科に進学、同14年3月工学部建築科を卒業した。

この間、山岳部に籍をおき、神山勉氏を中心とする山岳部の黄金時代の山登りを楽しみ、卒業時には、リーダー会の一員として活躍され、スキーの上手なことでも知られていた。

大学卒業と同じに、海軍省建築局に入省、同年10月より、終戦まで海軍技師として、鎮海海軍施設部に所属して朝鮮に滞在した。

戦後、復員と同時に運輸技官として、運輸省、運輸建設本部に勤務し、戦災に遭った駅舎再建の設計等で活躍された。

昭和22年10月になって神山OBが、日本山岳会の「山日記」編集に携わることになり、桜門山岳会が実務を引き受けることになったので、千谷さんも、日本山岳会に入会して協力することになり、第14輯と15輯の2冊を担当した。

昭和23年5月、千谷さんは、たまたま同じ編集委員をされていた津村利男氏に誘われて、運輸省を辞し、津村氏の勤務先である株式会社「暁組」に移籍することになり、日本キリスト教団所属の全国各地の協会再建に尽力された。

千谷さんにとっては、この会社が、日本山岳会のルームにも近く、また当時槙さんが社長で、慶応の谷口(現吉)さんや北大の林(和夫)さんがあおられた、佐倉飼料(株)や西村工業(株)の事務所も近くにあって、都合がよかった。このような訳で、昭和25年からは日本山岳会の理事にも選任され、以後7年間に亘り、国体登山や東京支部担当の理事を務めることになった。

昭和27年になると、西堀栄三郎氏がマナスル登山の許可をとってこられたので、その年には、マナスル登山の準備が開始され、千谷さんもその準備委員に名を連ね、梱包を担当することになった。そして、以後5回に及ぶすべてのマナスル隊の梱包を担当され、この分野の専門家になられた。

こうして迎えた昭和31年の第三次登山隊では、地道に黙々として実践され、多くを語らない千谷さんの人柄が認められて、槙さんの絶大な信頼を得ることになり、隊員に選ば

れた。現地へ出かけてからも、槙隊長の期待に応えられ、登頂成功に貢献されたことは、ご高承の通りである。

マナスル登頂に成功された年は、千谷さんにとっては、両手に華の幸せな年になった。その年の秋、11 月 22 日、5 年越しに愛を育んでこられた中山雅子さんと、目出たく華燭の典をあげられたからである。(編者注:千谷雅子さんによる別稿「出会い」をご参照下さい。

その翌年、千谷さんは日本住宅公団に入り、戦後の団地建設ブームの尖兵として、多くの団地建設業務を担当され、定年退職されるまで活躍された。晩年は、ご夫妻で海外旅行でヨーロッパを訪ね、スペインを中心とする建築やケルト族の研究、国内にあっては、装飾古墳に興味をもたれ、各地を旅行されていた。

に最後にお世話にお世話になったのは、1995 年のエベレスト北東稜登山の時である。この時には、戸村実行委員長を補佐し、親身になって実行部隊を支えてくださったことを、忘れることができない。その頃には病魔は徐々に千谷さんの体を苦しめていた筈である。それにもかかわらず、重要な委員会には、必ず出席され、適切なアドバイスをされていたことが思い出される。

6 月 18 日に入院されたとの話を伺っても、それほど切迫しているとは思ってもいなかった。しかし、7 月下旬になって、虫の知らせか、思い立って入院先の病院をさがして、山本晃弘君をさそって、お訪ねした時には、面会謝絶とのことで愕然とした。それでも僅かな時間であったが、お許しを得てお目にかかり、二言、三言、お話を交わすことができ、回復を祈ってお別れしたのだった。

奥様から、「今朝、主人が息を引きとりました」との電話をいただいたのは、それから数日後のことであった。

沼尻　正隆　先生

高緑　繁伸

昭和 54 年、清田清先生が定年のため山岳部長を退任されました。すぐに後任部長選び作業が始まり数名の先生の候補が挙がりましたが、大学当局との折り合いが付かず、部長不在が 1 年半以上続きました。

そんな折、当時の主将から文理学部中国文学の沼尻先生の話が出てきました。先生は元山岳部長であったのお弟子さんでもあり、三島教養部の山岳部長も長年勤められ、の白陽会の追悼会で何度もお目にかかった方でもありました。

山岳部長には最適任の先生と思い、すぐに大学当局に推薦をいたしました。大学からも快諾を得られ、桜門山岳会からも承認を頂きました。そして、先生からも瀬能先生につながる部であるならばと、快くお引き受け頂きました。

先生からは「山岳部の活動はすべて君にまかせます、しかし、最後の責任は私が持ちます」というお話を伺い、かえって責任を感じてしまいました。

先生は、学生の頃から低山徘徊を趣味とされ、東洋思想と山岳とのかかわりに深い興味を持ちつづけておられ、静寂孤独な山岳自然の裡こそ限りない自己凝視の思索の場であることを痛感されておりました。部員には時あるごとに山での事故の防止を説き、山を本当に知る者の謙虚さ、叡智こそが、山を愛する者の何より大事であると話されていた。

部員とは一度も山行くを共にすることはありませんでしたが、昭和 29 年 11 月、富士山の事故の際は三島山岳部を率いて、捜索活動

に参加を頂きました。

秋の天懇にも毎年お誘いしたのですが、役職のご多忙な先生には中々お出かけ頂けませんでした。

昭和 60 年には、文理学部長に就任され、63 年には日本大学副総長の任につかれました。日本大学退職後には佐野女子短大の学長を勤められました。中国文学関係、詩吟、箏曲等の役職多数。文学博士（中国古代思想専攻)。山とお酒をこよなく愛された先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

平成9年10月9日　逝去。

追悼

石井達男君を偲ぶ

日大山岳部で青春を共にした昭和２８年卒の友、同期の石井が逝ったのは平成１０年の晩秋であった。思えば私たちもすでに古稀を過ぎて人生と言う一つの大きな山を越えて来たわけだから、昔の仲間が元気で皆、揃って語り合うことはできない。まさに歳月の重みはその残酷さと共に私たちの上に覆い被さってくる。何人かがすでに故人となってしまった我々の世代、その中でも石井はフルマラソンを完走する元気な男だったのに突然体の不調を訴えてから５か月と言う短い月日で故人となってしまった。高齢になっても現役で山へ行ける数少ない大切な友を失って唯々愕然としたあの日のことを思い出す。

石井の訃報を同期の中川から連絡を受けたのは１１月１６日の早朝であつた。その一週間ほど前に彼の元気な声を電話で聞き、病状が快方に向かっているように思えただけに、私は驚愕と痛恨の思いで急ぎ中川と二人、石井宅に伺った。そして故人となってしまった無言の石井と対面することになった。

この年の７月、シルバータートル隊のガッシャーブルム峰登山隊に合わせてのバルトロ氷河トレッキングに私が同期の石井、志水を誘い、彼はその説明準備会に元気な顔を見せて昨年のアルプスに続き三人でカラコルムの山に入ることを大変楽しみにしていた。それが出発直前の６月末、急に体の不調を訴え参加を見合わせ検査を受けることを私に告げた。それでも私は日頃あんなに元気でマラソンをする彼の事だからと楽観的に考えてカラコルムに向かった。

巨大な氷河と天空を切り裂くように聳え

北アルプスでの石井君（中央）（昭和27年）

立つ壮大な岩と氷のバルトロの山々を眺めながら、志水と二人「石井と一緒だったら本当に良かったのになぁ」と幾度となく口にしていた。そしてこの山行は、至福の時間を共有できる気の合った仲間との山行がどれ程素晴らしいものであるかをあらためて気づかされた山旅となった。

帰国して直ぐ日大病院に彼を見舞い、奥様より彼の病状をうかがい、すい臓が悪く手術をするとのことで大変心配をした。しかし、思いのほか元気な彼の様子にそんなには病状が進んでいるとは思えず、彼との山登りの再開を期待して一日も早い回復を心待ちにしたのであった。それから約三ヵ月、余りにも早い石井との永遠の別れに悲しみの涙をこらえて、通夜、告別式に参列することになってしまった。

山形県上の山市出身の石井との出会いは、昭和２４年、彼が山形商業を卒業して日本大学経済学部に入学され山岳部に入部して来たときである。私は既に故人となった鹿島、安藤たちと予科で一年、部の山登りをやっていたので彼とは学年は同期、部では一年上という変則的な同期生であった。爾来５０年、まさに半世紀にわたる付き合いとなった。特に晩年は社会的、家庭的責任からお互いに解放されて、私と一緒に大いに山登りをしようと、そして始めたばかりであったので本当に彼の死が悔やまれてならない。

彼との思い出はたくさんあるが何といっても昭和２６年１２月の前穂高東壁から槍ヶ岳を往復する冬山合宿の時の奥叉白の池雪崩事故である。１６日の深夜、私と石井、安田、津田の４名で幕営中、新雪雪崩に全員が其の場で埋没し、私なぞは自力脱出が出来ず、まさに文字通り死を覚悟した一時であった。雪国育ちの彼はスキーも上手であったが、それ以上にやはり雪に強かったと言う事でしょうか、何とか自力脱出して隣の津田を掘り起こし、私、安田、と全員を脱出させた。正に私達の命の恩人であつた。彼の存在無くしてはその年の我々の冬山の成功は無かったわけである。日頃余り闘志を外に出さない温厚な彼の真の闘志に、東北人らしい粘りの有る一面を知り素晴しい仲間が私の身近にいる事の幸福を覚えたものである。

ＯＢになってから２年目の１１月、富士山の大雪崩遭難事故があった。今のようにコーチ会制度は無かった時代であり、彼は若手ＯＢとしてその山行に参加していたため、ＯＢとして未然にあの雪崩事故を防げなかった事の責任を感じ精神的に大変苦しい思いをしていたようであった。私の場合とは責任の度合いは全く違うものであるが、私もその２年前遭難事故のあった合宿のチーフリーダーとして懊悩の時を過ごしていた時でもあったので彼の気持ちが察せられる思いであった。そのことも有ってかＯＢ会の活動は控えめのようであったが、その責任感は晩年まで失われず、山岳部，そしてＯＢ会のことを折りに触れ心配され、私が会の理事長を引き受けた３年間などは同期生として何かと私を支えてくれた。彼のこのような部と仲間に対する何時までも

変わらない熱い思いに東北人らしい彼の性格を知るものであり今こうして学生時代、そして晩年と、私にとって本当にかけがえの無い仲間であったことを彼が逝ってしまった今、あらためてしみじみと感ずるものである

社会人としての彼は卒業後、石坂さんの居るトーハンに就職され会社の山岳会でリーダーとして余暇を楽しまれたようであり、その山仲間の信江さんと結ばれ、そして二人のご子息にも恵まれ、また永年の養父母へのご孝養も立派に尽くされ、ようやくこれから長期の山登りも楽しめる境遇になったところであった。世俗のしがらみから解放され、積年の思いである海外登山が始まったばかりのところで急逝された彼の心情はどのような想いであったか、さぞかし無念の思いが有ったことと察しますが、告別式、そして一年後の偲ぶ会には部の仲間のみならず、彼の少年航空兵時代の友人が遠方からわざわざ出席されたこと、トーハンの多くの山仲間が出席されたことなどに、愛すべき吾らのベソ（彼のアダ名）の人柄が偲ばれるのであった。

彼が逝ってから早、三年余、彼との最初にして最後の海外登山となってしまったアルプスはブライトホルンの白い山頂に立つ彼の顔が私のアルバムの中で笑っている。本当に楽しかった彼との山旅を懐かしく想いながら彼の人生を思う。

多くの山仲間と友人に囲まれ、そして暖かいご家族と過ごされた彼の人生は兄上のお話しにも有りましたように、静謐に、そして穏やかな川の流れのように過ごされた幸福なものであったと私には思える。彼が６９歳で鬼籍に入ってしまったこの歳月は正に私達の人生に生の無情を悟らせることに決して永いとは言えない思いである。合掌。

平成１４年３月

山本晃弘記

根津皖一君との思い出

昭和 37 年卒　高橋正彦

昭和 33 年 4 月、日大本部（当時は三崎町にあった）の百名程入る講堂で、入部式が行われました。

新入部員だけで 80 名もいましたから、講堂は満席でした。式が進み、新入部員の自己紹介に移り、根津君の番が来ました。

そのときの山歴が、「谷川岳をホームグランドとして、一の倉沢の南稜、滝沢スラブ…」ときた。上級生も登っていなかったので、驚きの、オッーという言葉を通り越して、一瞬の静寂が走ったほどであった。

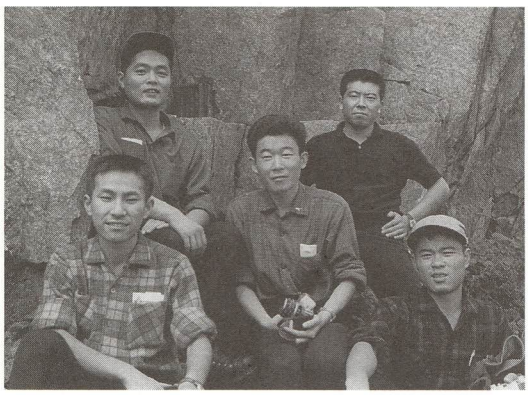
これで、小生は自動的に、根津君に一目置くはめになった。

根津君とは、学部（生産工学部）も同じ、織物製造業という親の職業も同じで、産地こそ十日町と米沢と違ったが、何かと気が合った。

横尾での初夏（参加者 59 名）、剣沢での夏山合宿（参加者 40 名）を経て、涸沢での秋山合宿（参加者 24 名）に入る頃は、依然として、小生は精一杯であったが、彼は余裕綽々であった。

入山二日目、岩魚留から涸沢へは暗くなってしまい、へとへとになってしまったが、炊事当番で、根津君と一緒になると、彼が、「高橋よ、上級生にアゴを出させるのは簡単だぜ、前の人より少しずつ離れてはつく、離れてはつく、を繰り返すと、上級生も参ってしまうぜ」と言うのである。

小生は「お前も意地悪だなあ」と言う以前に、彼の余裕がうらやましかった。しかし、この元気が災いして、上級生に睨まれたよう



穂高の故菊地・中村ケルン前にて
（後列左から）今村、根津
（前列左から）鈴木、高緑、高橋

だった。

話は飛ぶが、われわれが新三年部員となった時、池田さんがチーフとなり、三年部員からは今村、鈴木、高橋がリーダー会に入った。しかし、誰しもが当然入ると思っていた根津君の名はなかった。

このことで、根津君は退部すると言い出した。私と今村は代々木の下宿に、彼を引き止めるために随分と通った。

「一年我慢すれば、我々の天下が来るのだから、我慢してくれ」と説得したのであったが、彼のプライドが許さなかった。彼は退部していった。そのことは、返す返すも残念であった。しかし、我々の交友はその後も続いた。

卒業の春山合宿で、剱北方稜線に入っていた小生に、「解析概論の単位がとれていないぞ」と、現地連絡所に電報をくれたのは根津君であった。

昭和 53 年に、北極点の遠征を終えた池田さんは「もう大遠征はこりごりだ」といって、5 月の連休に、親しい仲間だけで、剱岳に通うようになった。それに、根津君も加わり、それまで高い所はいいや、と言っていた池田さんが「50 才になったら８０００m峰へ行く」と言い出した。

昭和 63 年、根津君はトレーニングで、池田さんと共にマッキンリー峰に登頂。そして、50 才になると同時に、チョ・オユー（平成 3 年）、ダウラギリ（平成 6 年）、そして、ガッシャーブルムⅡ峰（平成 10 年）と、池田さんの片腕として参加し、すべて登頂したのである。

この成功は、彼の並々ならぬ強靭な体力と精神力、そして、日大山岳部への思い入れの証でもあった。その後、彼は人間的にひとまわりも、ふたまわりも大きくなり、学生時代の時のように「俺が一番」という負けん気は影を潜めていった。

荒荒しい彼が好きだった私は、温和になったことが寂しくもあり、また、嬉しくも合った。

GⅡが終わったら巻機山へ行こうと、根津と約束をしていた私は、彼が帰国して間もない、9 月 13 日、柴田、岡田の両名を誘って、米子沢を快調に登った。

それもそのはずであった。根津は前日にルートを偵察して「高橋には、ここはこのホールド」と、細かく調べてあった。私は、ただ彼の指示通り登ればよかったのであった。

かように、彼は非常に慎重で、優しい人柄だった。

それから 2 ヶ月後の 11 月 15 日、午後 9 時過ぎ、根津の奥さんから「主人が巻機山で遭難した」という電話があった。

聞けば、登山者が知らせてくれたとのことで、根津は歩けないが生きているとの事であった。しかし、大阪からでは新潟に向かう交通機関はない。私は池田さん、今村に電話をし、東京から直ぐ救援に向かってもらうことになった。だが、翌日、ヘリコプターで救出された時には、すでに亡くなっていた。

あの根津君が山で死ぬなんて考えられなかった。しかし、私は「現実なんだ、それが山

なんだ」と懸命に自分を納得させようとしたが、納得出来なかった。

事故の翌年の9月、私は根津君が遭難したヌクブ沢を訪れたが、そこは高巻きあり、ヘツリあり、さらに、片足がやっと乗るくらいの悪場が続き、いつ崩れてもおかしくない危険なコースであった。

まして、根津君が登った時は、雪が降り、積雪もあったとのこと。あのベテランの根津君も足を踏み外したのであろう。

家族思いの根津君が、奥さんと別れの言葉も交わさず亡くなるなんて、僕も寂しい。君が登山中に竹の子を採って、生で食べさせてくれたことを思い出す。60才になったら、年金でももらってのんびり暮らそう、と言っていたことも適わなかった。

君のお墓に訪ねると、いろいろ散財をかけるので、奥さんに「おかまいなく」と言うのだが、「根津がしたと思ってください」と言われてしまう。

奥さんの心の中では、君は今でも生きているのだ。冥福を祈る。

根津皖一　平成10年11月15日　巻機山ヌクビ沢で逝去。享年59才

付記　日本山岳会「山岳」1999 Vol.94に池田さんが追悼文を掲載しています。

野田福五郎君を偲んで

昭和15年工学部建築科卒
星野　辰雄

戦後復刊されたＪＡＣの山日記３冊（第14刊～16刊）の編集委員として活躍された野田君は平成12年4月2日、入院先の静岡市立病院のおいてすい臓ガンのため逝去された。享年80歳だった。

私の山の盟友ともいうべき野田君の死去の知らせを受けた時、私の周りにあった一本の巨木が無くなったような寂しさに襲われた。在りし日の彼との山での思い出は尽きないが、周囲を見渡して見ると、山岳部時代一番接触のあったのは私であり、６０年以上も前のことを思い出しながら追悼文を書くことにした次第です。

1937年4月、私の一年後輩として、彼は日本大学予科理科山岳部に入部した。その当時の山岳部は元気に動き回る行動力のある集団であった。１９３９年の１月には、神山勉リーダーのもと、彼は入来、大塚等若手のメンバーと冬の穂高に入っており、40年1月の冬山岳沢合宿の際には中心メンバーとして参加、同年4月には佐藤耕三氏以下２０名のメンバーで天狗のコルから槍への極地法登山に参加し、佐藤リーダーのもとアタック隊の一員として槍の往復に成功している。

この時、彼は食料係りとして綿密な食料計画を立案して実施したことで、仲間から高く評価されたことを覚えている。これに先立つ１９３９年の７月には、私がチーフリーダーとなって夏季剱岳合宿を総勢３９名で行った。錚錚たる猛者達の中にあって計画の立案から，準備，実行，事後処理に至るまで、いつも私

の片腕となって補佐してくれたのが彼だった。人間性豊かな彼は、誰からも愛され、信頼される素晴らしい人間であった。彼は私と同様、山岳部の中では何時もサブとして終始した男だったが、私と違うところは、協調性があり、波風を立てたことはなかった。リーダー会などで議論続出した時でも、笑いながら言う短いが、的をとらえた一言、二言が議論を結論づける切っ掛けになったことが幾度あったことか。

1940 年の夏はわが部にとって大変な年になった。涸沢で行った夏季合宿終了後の奥又白生活で、将来を嘱望されていた彼の一年下の入来重弘、上関徹也の両君を四峰正面壁で失ってしまったのである。その後始末で彼が奔走している間の 3 月には、私は卒業して就職し満州に赴任してしまい、彼との山岳部での生活は終わった。その彼もその年の１２月、戦争中の非常時の処置で繰上げ卒業となり、軍隊に入隊した。

日本山岳会は戦後の再建に立ち上がり、１９４７年、山日記（編者注：今の山渓１月号付録「山の便利帳」をグレードアップしたもので、遭難対策、雪崩、天気図用紙、山小屋等が記載されており、サイズはポケット版だが、厚さは 2ｃｍ位あり、僕等の頃は合宿必携の品であった）の復刊に当たり、私達の仲間である神山勉氏がその編集業務を引き受けることになった。

それに伴い神山ＯＢの号令一下、１６名の桜門山岳会員が日本山岳会に入会して、以後 3 年間、山日記編集委員として崎田ＯＢの補佐役として山小屋の調査などに精力的に活躍した。

1948 年１１月の日本山岳会主催による富士山での冬山技術講習会の時も、彼は神山ＯＢに声をかけられて、真島ＯＢと共に初級班のリーダーとして参加したが、氷雪技術については神山ＯＢにみっちり仕込まれていただけに、その腕を買われたものであろう。

1954 年から静岡県の大井川町の工場勤務となったので地の利が悪く、それ以降はＪＡＣとは疎遠になったが，「山岳」や「山」の熱心な読者であり、しばしば感想を伝えてきた。

晩年の彼とのつき合いは、シルバーＯＢの仲間とのハイキングの他、毎年 1 回、熱海か沼津で開催されるシルバーＯＢ懇親会で旧交を暖めるだけになったが、いつも顔を合わせれば話は山岳部時代の思い出になった。

「野田君よ、80 歳を過ぎるとどっちが先だ後だといっても仕様がない。今度逢う時は、腰を落ち着け語り合おうではないか」

心よりご冥福をお祈りして追悼の言葉とさせていただきます。

《略歴》

1920 年１月２日東京市高輪南町に誕生

1937 年日本大学予科理科に入学と同時に山岳部に入部

1941 年 12 月日本大学工学部機械工学科を戦時につき繰り上げ卒業

1947 年日本山岳会入会、紹介者初見一雄・神山勉

2000 年４月 2 日すい臓ガンのため逝去。享年 80 歳

編者注：本文は星野先輩がＪＡＣ「山岳」Ｖｏｌ．95/2000 に寄稿したものを高橋正彦（Ｓ37 年卒）が当会「会報」33 号用に編集しなおししたものです。

出来るだけ原文を尊重したつもりですが、至らないところはご容赦下さい。

中山昌之先輩の思い出

昭和４８年卒　宗方慎二

２００２年3月１５日　１９：００、岡田先輩より中山先輩の追悼文を書いて欲しいとの依頼が電話であった。もうスグ三回忌である。何を書くかというより、中山先輩の何を書き残したらよいのだろうかと迷った。素直に書こう、あんな凄い人はもう出ないだろう。

私は昭和44年５月に日大山岳部に入部した。四年生、(敬称略)　平野・樋山・原田。三年生、半谷・中山・川上。二年生、中塚・岡田・山本・薬師・宇佐見・高澤・田名網。一年生、宗方・安川・玉置。総勢１６名だった。

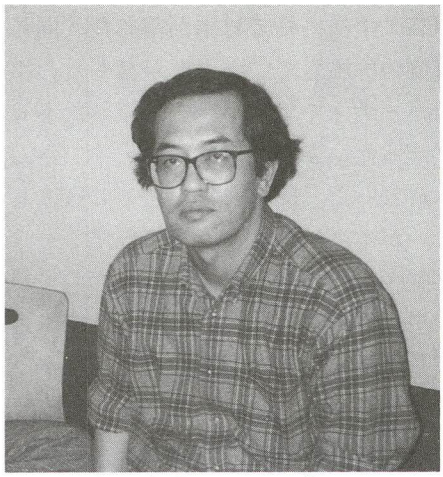
部室は日大本部地下、神田三崎町である。入部して直ぐに渾名のある人にきづいた。一人は中山さん、通称「ダッペ」。もう一人は高澤さん、通称「ヨタロー」。二人とも茨城の出身で、独特のイントネーションを持っていた。

アル日、中山さんにそれと無く渾名の話をしたら、「俺は達平、高澤は洋太郎だ」と教えてくれた。

少しオカシイとは思っていたが、何日かして同期の安川が高澤さんに「ヨウタロウさん」と話しかけたら、やはり「ヨタローさん」と聞こえたようで思い切りケトバサレタ。

しかし中山さんは「ダッペさん」と呼ばれても「オウー」とこたえて何事も無かった。

私は彼の『男の器量』について思い出したい。三年生の彼は、二浪であった。細かく言うと一留一浪、四年生より年は上だった。デモ彼の口癖は「半谷がリーダーで『宇奈月から西穂』をヤル、協力してくれ」だった。



中山先輩　ＯＢの集いで

半谷さんを何時も立てていた。
トレーニングは熱心だが足は遅かった。でも何かが違っていた、山の登り方が。その冬、穂高・唐沢岳西稜を登った。彼は深い雪の中のラッセルで『男の器量』を示した。

口では何も言わないが自分の順番がくると、一生懸命に倒れるまでラッセルをする。その距離が半端じゃない、一生懸命に本当に倒れるまでして次に交代する。そんな人だった。

私はその様な中山さんを見て、心の底から「ダッペ先輩」と尊敬していた。

其の後、中山さんは現役部員でただ一人シタ・ツツラ遠征隊に参加したが、高山病で体調を崩し、思うような活躍は出来なかった。そして彼は再度のチャンスを求めつつ、トレーニングに励み続け『宇奈月から西穂』は敢行され、彼は立山のサポート隊に入った。
半谷さんは縦走隊だから当然彼がサポート隊のリーダーかと思った。しかしサポート隊のリーダーは和田さんだった。和田さんは山岳部から遠ざかっていたが、『宇奈月から西穂』にホレ、復部していた。

中山さんは何も言わずに向かい入れた。計画は完璧に成功した。

次の年、冬に大事件が起きた、我々、学生

は穂高・南岳西稜で村木が落ちた。同じ日、反対側の屏風岩で中山さんが落ちた。平野・中山パーティでヒマラヤを目指したトレーニングだった。幸いな事に村木・中山さん共無事に終わった。簡単に書くとこの様にしかならないが本当は違うような気がする。

平野・中山パーティは、屏風岩の最終ピッチで中山さんが落ちた。結果的に中山さんは３００m下の中央バンドに落ちて助かった。後に中山さんは私にこう言った、『俺はよう運が良かったんだ、あの日中央バンドに雪がガッポリ積もっていたから足から刺さって助かったんだ。次の日　落ちた奴はよ風で雪が飛んじゃっていて即死だとよ。』

ただ聞くとこの様だが私は信じていない。今時ザイルは切れない、何故一人で落ちたのかの説明は無かった。今、平野さん、中山さん御二人とも亡くなっているので真実の話は聞きようがないが、いま一つハッキリしない。何度も聞いたが中山さんは答えなかった。

１９７４年にヤルンカンの許可が下りると彼は真っ先に志願し、出発までの忙しい準備の間にもヨーロッパの冬の壁でのトレーニングを行っており　私もその一員として認められ約半年の遠征隊を御一緒させて頂いた。

随分とお世話になりました。不幸にして中山さんは虫歯の所為か、後半体調を崩しアタッカーになる事は叶わなかった。でも前半戦はあの穂高のラッセルの時の様に、トップに立ち黙々とザイルを伸ばしてくれました。

中山さんが居なければアタックも出来なかったでしょう。本当にガンバって頂きました。

或る日、岡田先輩から「中山さんはもう僅かだ」の連絡が入り、お見舞いに伺いました。嫌な位になるような櫻の満開の日でした。お見舞いの挨拶も終え、帰り際に私が「先輩、また・・・」と言うと、中山さんは目で返事をしました。

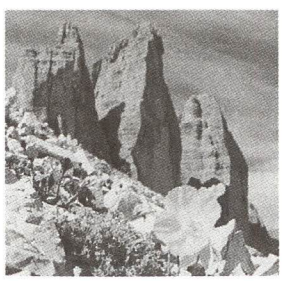
『バカ、もう逢えないんだよ、世話になったな』と。

納骨の日、中山さんの骨を当の墓に入れようとした時に、突如として雷が鳴り雹がガンガン降って来ました。あれは中山さんの別れの言葉だったのでしょう。

『俺はまだ死にたくはないんだ』って。

先輩、少しガンバリ過ぎましたネ。合掌。

平成 12 年 4 月 19 日　逝去。



だけわらさん

石坂　昭二郎

森下さんのことをどうして「だけわらさん」といったのかよくはしらない。

戦後極地法などというおかしなものにとりつかれた関東の大学であったが、その前夜、山登り本来の姿で、前穂の北尾根に挑んだ森下さんのことは忘れられない。そのことは、すでにいろいろなところに書いている。

主なものは、“戦後の山岳部”1954 記、「ゲートル６号」、「ゲートル２０号」1996、に転載、“回想”「雲表の友」、「神山勉追悼集」1969、“追悼程島三郎”「解放 32 号」1997 等であろう。

森下さんが大宮の持養ホーム原殿苑に入っていることを松田さんから聞いたのが 95 年の初めだった。それから自分の姿を重ねて、まだらぼけの森下さんのところにけっこう通ったものだ。それ以前にゆっくり話しをしたのは富士山 33 回忌 1986.10.5 の帰途、森下さんの運転する車に同乗して、製本屋をやっていた八丁堀の家が地上げされたこと、それではと、森下さんも地上げの仕事を広くやって近所の人に喜ばれた話。「石坂、お前も何かあったら相談にのるぞ」といったようなことを、行楽帰りの車に巻き込まれて、いつ東京にたどりつくやらと、のろのろの車の中でのんびりした会話だった。

95 年 1 月 19 日、原殿苑。車椅子で左半身がきかないというのに、開口一番、「石坂、ナーゲルを作ってくれるところを知らないか」と言う。北尾根のこと、梅松と登った四峰フェース、槍沢小屋の話、奥多摩を歩いたことなど、とりとめもなく話したようだ。

八丁堀に友達がいるから訪ねてほしいとも言われて、2 月 9 日に八丁堀に行って、森下さんの麻雀仲間に病状を伝えたのだが、結局は誰も顔を出さなかったらしい。森下さんは麻雀の本も出版したらしい。

原殿苑入所は 94 年 1 月 31 日。それ以前は、渋谷でプー太郎半年、市川で 2 年、大宮で建設作業員をやっているとき、はしごから滑り落ちて、五年間東大宮病院で過ごしたという。

ハワイに白百合を出した自慢の娘さんがいるので、一時は大金を持って逃げていたといった話もあったが、はっきりしない。

富士山 33 回忌以降、青木、西田、森田、牛奥が亡くなったが、その他に森下さんがいたということをふと思ったものだ。あの部厚い“追悼―富士に眠る仲間へ―の製本は森下さんの作だ。その後も森下さんにあいたくて行くといろいろな話が出たが、中学の同級生の田中さんのこと、日大同期の海軍中将の息子、大島直行さんのこと。この人とは一度あったような気もするが、戦後の山岳部には戻らなかった。

眼鏡があわないから買ってくれとか、靴の話は毎度のように出た。まごの手、飴、ドーナツ、アンパン、三笠山等ほしいともいわれた。時々は私が食べたして近所の食堂まで車椅子で出かけ、ハンバーグやワインを口にしたりもした。食欲はなかなかのものだった。私もかみさんの病気でもたもたしているうちに松田から森下さんが亡くなったという知らせがあった。2000 年 6 月 27 日、10 時、大宮市営葬儀場で、私達の仲間、芝田、北村、石坂、田中さんグループ 3 人、ハワイの娘さん、原殿苑から苑長と森下さんの面倒をよくみてくれた中島さんだけの火葬だった。

森下さんの山岳部入部は 1943 年、その年の暮れには山岳部は解散したのだから、一年間だけの活動だった。しかし私が戦後森下さ

んから学んだものは確かなものだった。神山さん時代の残照があったということか。

“自覚と責任とを持て、この上に建てられた合理的活動こそ、日大山岳部員としての人格がある”森下。私はヤクザな姨捨ぐらしで、時々すらすらと口にでてはっとすることがある。

私は何もしないのが一番。つるむのはきらいだ。すすめない、とめない。一人でも生きられる。などとうそぶいているが、めったに訪れる人もなかった森下さんは、どんな気持だったのだろうか。奥さんに去られ、娘さんはハワイ。でもニヤニヤしながら看護婦さんにタッチしたりしてけっこう楽しそうであった。

植物人間になった晩年の初見さん、最後までナーゲルにこだわった森下さん。そんな人に無性にひかれるのは、私にもそうゆう運命がまっているのだろうか。

石坂弁護士を知らないかと、かくし財産があるような口ぶりをしたこともあった。初見さんのように、すべてをなくしたのだろうか。

それも今では知るよしもない。

天国で小首かしげて、にやりとまっているのであろうか、でも1日2粒のピーナツではごめんですよ。

鈴木克己さんを偲んで

(機13年卒)

昭和15年工学部建築課卒
鞍田昌彦

平成13年3月、星野君より、突然、電話で、鈴木さんの訃報に接し、私は生涯忘れることのできない先輩の死に、しばし呆然としました。

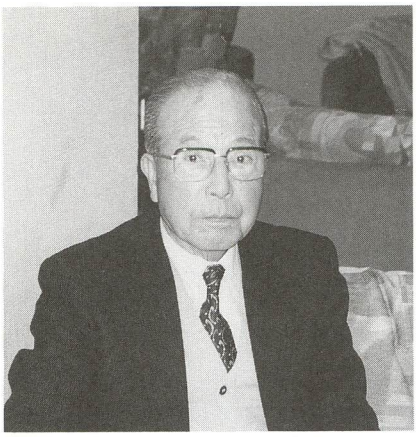
鈴木さんは、旧姓を渡辺と言い、旧制静岡県立静岡中学校より、昭和8年4月に日大予科理科に進み、昭和13年3月工学部機械科を卒業、三菱重工名古屋航空機械製作所に入社されました。

私が鈴木さんを知ったのは、昭和１０年、予科理科に入学して、山岳部に入ってからで、鈴木さんは二年先輩でした。当時の山岳部は、新入部員の歓迎山行が三つ峠で、夏休みには剱沢の合宿、冬休みは熊之湯のスキー合宿、その間には、初冬の富士登山を行うのが恒例となっていました。

当時は、鈴木さんより二年先輩に米沢（直治）、広田（憲治）両氏がリーダー格としておられ、両先輩卒業後は、名実共に鈴木さんがリーダーになられました。

当時、学校より出る部費は予科理科のみで、二年の時、川崎君が部費査定の評議員の一人で、私も部費説明に出たとき、鈴木さんよりいろいろアドバイスを受けました。

当時、学校から部費が出るのは、予科理科のみでしたが、私が2年の時、その後中支で戦死された川崎（信三）君が、部費査定の評議委員の一人で、私も部費の説明に出たことがありましたが、この時は鈴木さんから、いろいろとアドバイスを受けて出たことを覚えています。当時の部費は、年間四百円位かと



鈴木克巳さん　1996年2月27日

思いますが、その部費はテントの購入、上高地小梨平の大型テントの修理、諸々の登山器具の購入費等に使われていました。春休みの剱岳登山の際には、剱御前小屋への食料の搬入費用も、この部費より出ていたように思います。

昭和11年春の剱岳登山は、鈴木さんがリーダーとなって実施し、無事下山して、富山駅付近のおでん屋で乾杯した思い出があります。

昭和12年の春も、鈴木さんをリーダーとして、剱岳に向かい、鈴木さん同期の水越（一郎）さんの遭難がありました。この遭難の当日は、鈴木、水越、笹本（正剛）、福武（義夫）の4名が、剱御前小屋を先発して剱岳の頂上に向かい、松代（正三）、鞍田、佐伯（文蔵）の3名が食料補給のため室堂へ、源次郎のコルには、前田（一二）、津村（利男）等が、テント生活をしておりました。

水越さんは、我々よりも遅れて一人で小屋に来られて、登山に参加されたので、疲労があったのではないか推察されます。

この遭難事故は、リーダーの鈴木さんのその後の人生の上で、何かと影響を与えていたように思われます。鈴木さんは、戦後、水越さん郷里のお寺での追悼法要をはじめ、平成9年4月、鶴見の統持寺で行われた桜門山岳会物故者合同慰霊祭、これ以前にも静岡のお寺での法要等を計画して実行されたことが、このことを如実に物語っております。

鈴木さんは、卒業の年の実習は、飯高（望宏）さんと台湾の塩水港製糖（当時は槙有恒氏が取締役として在任しておわれた）に行かれたが、現地より「ヤッケ」を二つ飛行機で送ってほしいとの連絡がありました。しかし、当時の飛行機便には重量制限（2kg）があり、そのため、包装しないで、そのまま送った記憶があります。

実習後に飯高さんと二人で新高山に登られたとのことでしたから、このヤッケが役にたったものと思っております。

三菱重工に入社した翌年1月には、陸軍に召集され、技術将校として立川にあった陸軍航空工廠の鋳造部門に勤務していました。当時、私も東京の防空戦隊にいたので、一度お訪ねしたことがありました。

当時の戦闘機の発動機は1400馬力位で、2000馬力の能力を発揮させるために、植込みフィンのシリンダーが要求されていました。鈴木さんはその植込みフィンのシリンダーの金型の鋳造方法の画期的な改善により、昭和19年9月20日付で陸軍参謀総長より、「陸軍技術有功賞」を授与されました。

鈴木さんには、戦前、戦中、戦後を通じて、親しくして頂きましたが、その私も、人の世の無常さを感ずる年齢になりました。鈴木さんのように功績を残して、この世を去ることが、如何に大切であるかを考えさせられております。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

［　略歴　］

大正2年8月5日静岡県榛原郡五和村（現金谷町）で生まれる。

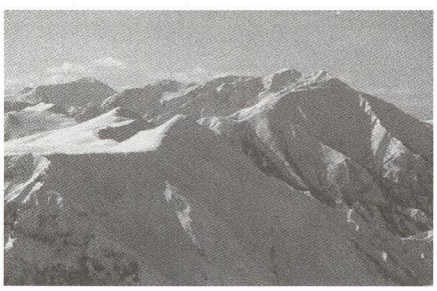
昭和8年4月～13年3月　日本大学山岳部に在籍。この間、昭和9年4月9日、富山県下新川郡大家庄村（現朝日町）出身の先輩、広田憲治氏とのペアで、池の谷の大滝がデブリで埋まったとの情報を得て、当時前人未踏の池の谷の核心部を抜け、池の谷の左俣経由、剣岳の頂上を1日で往復、積雪期池の谷の初完登者となった。

昭和13年4月　三菱重工業（株）名古屋航空機製作所に入社。
昭和14年1月　召集を受け陸軍航空工廠（立川）に入隊。
昭和19年2月　除隊（召集解除）して三菱重工に復帰
昭和19年5月　鈴木家の長女保美さんと結婚。
昭和20年10月　終戦により、三菱重工を退職。
昭和26年6月　旭可鍛鉄（株）に入社。取締役を歴任。昭和53年8月同社を退社。
昭和58年5月から平成7年5月　掛川信用金庫監査役。

この間日本山岳会には、昭和25年5月～昭和62年まで在籍した。

平成13年3月5日　肺不全のため、藤枝市の平成記念病院にて死去（享年88歳）

（文責　松田雄一）



編集後記

一、平成8年度から発行が止まっていた会報ですが、今回平成12年度までの5年分を発行します。平成13、14年度分は次回34号になります。

一、会報発行所の連絡先は具体的に連絡がとれる場所として、岡田監督にお願いしました。

一、会報の書式は基本的に前号に従いましたが、本文の文字をやや大きく読み易くした他、若干修正しました。

会報　第33号

発行日　2003年2月1日
発行者　神埼忠男（桜門山岳会理事長）
編集委員　山本茂久・鈴木快美・原田洋・中村進
発行所　日本大学保健体育審議会山岳部
桜門山岳会
連絡先　山岳部監督宅（岡田貞夫）
電話：03-3866-2473
印刷所　前田印刷株式会社